
はじまりはひとつの禁忌 ~ Cry at the Moon ~

ジャム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじまりはひとつの禁忌 Cry at the Moon

【Nコード】

N7559U

【作者名】

ジャム

【あらすじ】

「お前、この場合は助けてやるけど、後で手伝えよ。じゃないとどつちみち死ぬからな」

満月の夜。瀕死の重傷を負っていた、ごく普通の高校生^{いづみ けいた}出海慶太は、治癒の力を持つ少女に救われる。

しかしその代償として、少女を執拗に狙う異形の者達と闘うハメになってしまう。

渡された指輪を使い、闘いの中でマナと呼ばれる力を操る事を覚えていく慶太。

そして日常から突如いざなわれる——異世界。

そこを支配する者とその世の平和をかけた、近接格闘メインの、ロマンスあり、妹属性あり、巨乳にコスプレ、ツンデレヤンデレ、憑依に退魔のバトルストーリー！

こんな煽りでいいのか作者！ 無理はしない！ 人生はワン、ツ
ー、デカルチャー！ ガンバレ慶太たち！

第一話 出逢い

——初夏。満月の綺麗な夜。

突然だけど、俺つてもう死んじゃうみたいなんだ。死因は、腹部からの大量出血によるショック死ってやつかな。

こんな所でこんな風に最期を迎えるなんて、全く思ってもみなかった。

なんでこんな事になったのか。直接の原因は、追いかけていたヤツらの内の一人に、手刀で腹部を貫かれた事なんだけど――

少し時間を遡って。

その日の俺は、なんとなく夜風にあたりたくて。海へと抜ける人気のない筈の林道に自転車を転がしていたんだ。

するとふいに、道脇の林の中から人工的な足音や喧騒が聞こえてきて。

「なんだ、こんな時間に何の音だ？」

……好奇心から林の中に足を踏み入れたはずの俺は、気が付けば

木の幹に隠れて息を殺していた。

——え、なぜかって？ 決まってる、見つかるのが怖いからだよ。ヤツらは普通じゃない。

見た目は多分人間だと思うが、その身体能力は、確実に人間のそれを超越している。

さつきからそんなヤツらが縦横無尽に林の中を駆け回り、一人の聖職者らしき格好をした人間を追い込んでいた。

その聖職者らしき人物つてのが、よく見たら女の子みたいだった。

牧師が着ているような法衣。その着丈は膝上十五センチくらいで、ちよつと短め。エンドには赤いステッチが施され、程良いアクセントになっている。

そしてトリートメントの行き届いた、長い黒髪。月明かりに照らされ、キューティクルの輝きを放つその頭には、角帽が載せられていた。

その娘が実は一番スゴくてカッコよかったんだ。

迫り来るヤツらの猛攻をスルスルとかわして、駄賃代わりに突きや蹴りをくれてさ。

それは最早、美しいと形容していいものだった。

だから……見とれていたんだ。此方に近づいてきているのに気付кинаながら、身を隠す事も忘れて。

——女の子と目が合った。

彼女も、あつ、と思ったに違いない。すぐに向きを変えて、俺から遠ざかるように移動していった。

……助かったと思った。でも、あの娘は一体？ さっきの印象的な瞳が忘れられなくて。

……なあ、アンタが俺なら、今この場からそそくさと逃げる、そんな事が出来るかい？ 出来ないだろ？

事の顛末が気になるのは勿論だが、何よりあの娘の正体が気になつて。

ここでうやむやにすれば、きっとあの瞳を一生夢に見続けるだろう。そんなのはゴメンだった。だから追いかけた。

追いついたその先では。さっきの少女がヤツらに囲まれていて。

助けてやりたいと思う気持ちはあるものの、何が出来るわけでもない——小市民の俺は、木陰に身を潜めて様子を伺う他なかった。

少しの沈黙の後、多対一の激しい攻防が始まった。その時の俺は、固唾を呑んでただその少女を見守るのみだった。

最初は本当に、何にも見えないくらいの凄まじい攻防だった。俺は彼女の動きを目で追い、必死で食らいついていた。

会話もなく続くその格闘は確かに凄かったのだが、なにより俺の

視線を捉えて離さなかったのは。

少女の履きこなした、白地に薄いオレンジ色のグラディエーターサンダルと、そこから黒い法衣に向かって伸びる、しなやかで健康的な脚だった。

けれど疲れからなのか、徐々に彼女はその動きに精彩を欠いてきて。よく見ると、彼女は追っ手に対してワザとトドメをさしていないようだった。

そんな事をしていれば、幾ら実力に差があるとはいえ、疲れて動きが鈍るのは当たり前だろう。

そうこうしている内に、彼女はどんどん追い詰められていった。そしてとうとう、完全に周囲を取り囲まれてしまっていた。

——彼女に策はあるのか？ 何か俺に出来る事は？

その時の俺は、何故だか彼女を助けなきゃいけない気がして、焦っていた。

それで、目的地に着いたら飲もうと途中で買っておいた、コーヒの缶を右手で握り締めて、囲んでいるヤツらの内の、一番少女の近くにいた奴に向けて、思い切り投げつけた。

そしたら、その場にいる者全員の眼が一斉に俺を捉えてさ。恐怖したと同時に、後悔もした。血の気は引き、俺はすくんで縮みあがっていた。

その時。

気が付けば一番手前の追っ手が、一呼吸で俺の腹をえぐっていた。まるで穴の開いたペットボトルのように、俺の身体からドバドバと血が流れ出たんだ。

「う……か……」

身体を張った派手な演出とは裏腹に、俺は地味に呻いただけだった。周りの景色が歪み、視界が暗くなっていく。

少女が何か叫んでいるようだったが、それを聞き取るだけの力は、俺には残されていなかった。

……これが、俺の最期だ。客観的に見て、これは致命傷だ。最早助かるまい。

遠のく意識の中、最期に追われていた少女の瞳に、視線を合わせた。

視線を……合わせた……？

——手のひらに温もりを感じる。

遠のいていた意識が戻ってきたようで、俺はスーッと目をあけた。

するとそこには、俺の手を両手で握り、此方を見つめる少女の灰色の瞳があつた。

「え……？ な、なんで俺」

「黙って！」

ズキンと痛みが走り、さっきの出来事が夢ではないことを痛感する。

——俺、生きてる？ まさか彼女が助けてくれたのか？

何が何だか整理仕切れていない俺に、少女は話しかけてきた。

「何であんな事した？ 何も出来ないくせに」

なんだよ、さっき黙れって言ったくせに。とは思ったが、そんな感情はすぐに押し流されていった。

「いや、君がヤツらに囲まれて危ないと思ったから、助けようと思つて」

「はあ？ あんなの何の助けにもなつてないし、それでこんな致命傷を負つて死んだら、まるっきりバカじゃない！」

う……何も言い返せない。でもバカは無いだろう、バカは。と、少しの反感。

だがそんな事よりも気になる事があつたので、俺はそれを口にし

た。

「それより、さっきのヤツらはどうしたんだ？ 逃げ切ったのか？」

そう、さっきまでの喧騒が嘘のように静かだ。辺りを見回す。

俺は先の現場からは少し離れた、3Mほどのコンクリートに囲まれたグラウンドに移動してきているようだ。

俺を抱えたままこの壁を乗り越えたのか、この娘は？ やっぱりこの娘も人間離れしてるのか。

しかしさっきの感じだと、まさか見逃してもらったって事は無いだろうし。

かといって、逃げ切れるようにも見えなかった。一体どうなっているんだ？

——な、何なのアイツ！？ いきなり出てきてやられちゃってるじゃない！ もうー仕方ないっ！

「おいお前、私を見るー！」

意識を失いかけている少年に、必死で視線を投げかけた。

「う……かつ……」

後悔の念を滲ませながら呻く、そのバカがこつちを見た。

今だっ……！

私の能力でアイツを救う。
イーウィルアイ

力を使うのをここまで我慢してたのに、もう！

視線を合わせた彼の体感時間がどんどん遅くなる。流血が減少し、脈拍・呼吸も鈍くなっていく。それも急速に。

そしてすぐに、彼は時を止めたように固まってしまった。それは、彼だけを時間の観覧車から一時降ろすようなイメージ。

これでアイツを仮死状態にしている間にこの場を乗り切る。

法衣の中に手をつ込み力行使して武器を取り出す。私の得物は鎌だ、それも特大の。

全長は2Mほどで、弧を描くように長く伸びたその刃は、月明かりを反射して露に濡れているかのようなようだ。

襲いくる複数の追っ手の脇をすり抜けると同時に、この大鎌を一振り。一気に三人の身体が上下に分かれた。

それを見て追っ手が逡巡した。その期を逃さず一足で別の追っ手の懷に飛び込みまた一振り。今度は二人の胴と脚が離れた。

そしてそのまま跳び上がり、左手から眩い閃光を放つ。私を目で追っていたため、全員目眩ましを喰らったようだ。

瞬時にそれを確認した私は、固まった彼を抱きかかえ即座にその場を移動した。

暫くすると無人のグラウンドが見えたのでそこへ移動し、端の方にあるちよつとした芝生に彼を横たえる。

そしてもう一度力を行使する。今度は治癒の力だ。ここでは説明しないが、私には他の者を治癒する能力がある。

それを目の前の致命傷の男に施す。その魔力が身体に流れ込み精神に刺激を与えたため、彼は今目覚めたのだった――

それにしてもバカな男だ。助けたいだって？ この私を？

「なあ、さっきの奴らはどうしたんだ？」

また聞いてくるから仕方なく答えてやる。

「まだ近くにいます。でも逃げるのも隠れるのももう諦めた」

「な、なんで？」

うざったいなー、大人しく治療受けてるよと目で訴えながらも答えてやる。

「……ヤツに見つかったから」

俺が困惑した表情を浮かべていると、さっきの奴らが集まってきた。

……人数が減っている？ 彼女が倒したのか？ どこぞの流浪人のように、不殺の誓いじろさずでもしてるのかと思っていたのだが。そんな風に状況を推察していると、少女が呟いた。

「間に合わないか……」

ドクン……

ドクン……

突然大気が揺れ、波紋が広がるように空間が歪んでいく。

「ちっ、来たか……」

突如、地面に光の線が走りだし、何かを描いていく。これは……扉だ。洋風な感じはあるが、片手開きのごく普通の扉だった。

そして光が消えると、地面に描かれたその扉の絵がひとりで立ち上がった。

「嘘だろ、何だよアレ？」

……ガチャ、ゆつくりと扉が開いていく。中から一体何が出てくるのか。俺の思考回路はショート寸前、何も想像出来ないでいた。

ドアの縁に巨大な手が掛かる。……デカい。明らかに扉よりもデカい身体が、どういう原理か判らないがそこをくぐってきた。

全貌を現したその姿は、腕は四本、体長五メートルはあろうかという巨人だった。

「見ツケタゾ」

発達した犬歯の見え隠れする受け口から吐き出されるドスのきいた低音が、大気を伝って俺の身体を揺らす。

ヤバい、コイツはヤバい。全力で本能が訴える。逃げろと。

「ちよつ、ちよつとちよつと、何だアイツ！」

思わずテンプレな台詞を口にしてしまったが、彼女は答えてくれた。

「ナイトメア。リリスの使者よ」

よく分からない言葉が出てきた。……ナイトメア？ リリスの使者？

顔は鬼の形相、爪は鋭く尖り、一掻きであっさりボロ雑巾になれそうだった。

そんな威圧的な巨人がどんどん近づいてくるというのに、彼女は治療を止めようとしめない。

「に、逃げよう！」

俺は動けないから頭に――俺を抱えて――とつくのだが、とにかくそう懇願した。

「無理よ。魔力を行使した時のマナの揺らぎはすぐには消えない。それを追いかけられるから逃げられない。

それに、今治療を止めたらお前は死んでしまうぞ、致命傷なんだから」

それは勘弁だが、かといってこのままでは二人に未来はないのは明白だ。

「何でそこまでして俺を助けようとするんだ？」

「それは私が最初に聞いた事だろ。

そもそもお前が手出しして来なければ、こんな事にはなってなかっただろ」

う……それはそうかもしれない。しかし言われっぱなしは何だか癪だ。

「じゃあどうすんだよ！」

などと内輪もめしているうちに、巨人が目の前まで近づいて来ていた。

「オレサマオマエマルカジリ」

そう言いながら右腕を二本伸ばしてきた。

俺は恐怖の余り視覚情報を放棄していたのだが、恐る恐る瞑っていた目を開けると、俺達と巨人との間に、シャボン玉のような薄い膜があるのが見えた。

どうやらこの膜が巨人の腕を弾いたようだった。

「何だコレ？」

「バリアを張った」

「すげーじゃん、これなら」

「ただの時間稼ぎよ」

後退り自分の腕と俺達を交互に見やっていた巨人は、事を理解したようで次の動作に入ろうとしていた。

右掌を天にかざす。すると周りを囲っていた追っ手たちの内数人が膝をつき頭を抱え、白く発光した。

そして丸い塊となり巨人の掌に集まっていく。集まった白発光の塊を筋肉隆々の腕で握り潰すと、光が握った拳に宿った。

そして人差し指を立てながら俺達に向かってその腕を振ると、幾つもの閃光弾が光の尾を引きながら襲ってきた。

しかし……またもや無傷だ。もしかして俺達助かるの？ と淡い期待を込めて少女をチラリと見る。

……彼女は険しい表情を全く崩していない。それを見て、危険は去っていないのだと理解した。

巨人がもう一度掌をかざす。今度は四本ともだ。すると残りの追っ手たちも同じように白い光の玉となり、それぞれの掌に集まっていく。

そしてまた握り潰すと、今度は投擲用のジャベリンのような光の槍になった。

それをまず一投。

「くっ……」

シャボン玉のようなバリアが揺れる。少女は苦い顔をして汗を浮かべていた。大丈夫なのか……？

続けて二投目を放ってきた。

毎回目を閉じては開けてを繰り返していた俺でも、巨人と俺達を阻んでいた筈のシャボン玉が無くなっているのに気付くのに、時間は掛からなかった。

「お、おい、バリア無くなっちゃったぞ！？」

「わかってる！ 私はシールドを張ったりするのは苦手なんだ！」

「何とかならないのか!？」

俯き小考した後少女は言った。

「方法はある。……いや、お前を助けつつこの場を乗り切るにはこれしかない」

「あ、あるならサッサとやってくれ」

彼女は少しムツとした表情を見せたが、すぐに敵を見据えた真剣な顔に戻り、俺に同意を求めてきた。

「お前、この場は助けてやるけど、後で手伝えよ。じゃないとどっちみち死ぬからな」

……え、手伝え？ 後で死ぬ？

俺の理解が追いつかない内に、巨人が残りの光の槍を両手に持ち替え二本同時に投擲動作に入っていた。

そして少女もその瞳を閉じて集中力を高める。

巨人が槍を投げるのと同時に、少女が呟いた。

「……スプリットソウル」

俺はまたしても情けない悲鳴を上げながら目を閉じていたのだが。

どうやら槍は二本共逸れていったらしい。俺達のすぐ側を風が通り抜け、後方で爆発音がしたからだ。

……助かった……？

恐る恐る目を開けると、俺の横で手を握っている少女の後ろに、もう一人同じ顔の少女が佇んでいた。

第二話 二人の少女

——正直度肝を抜かれた。それは巨人の方も同じだったに違いない。

二人の少女、正に瓜二つ。唯一違うのは瞳の色。目の前の少女はグレーの瞳だが、分身？ の少女は青い瞳をしていた。

その分身はクルツと振り返り巨人の方に近づいていく。

上半身ばかりに目がいつていたが、こうして横になって足下から全体を見て、改めて女の子っぽい所に気付く。

そう思うと、巨人の方に歩いていく後ろ姿は、短い法衣から覗く太股と膝裏のカンジがなんだか……なんだかなんだか。

ああ、例え死にかけてもそのような不埒な感情を持つ男。それが俺。不死鳥慶太なのだ。

しかし他人に——特に女子には——このような変態的思考の持ち主であることは絶対に知られてはならない。そう、絶対にだ。

……と、膝裏のくぼみに思いを馳せている間に、固まっていた巨人も相手の所作によりやく反応した。

先に動いたのは巨人の方だった。その体軀を生かし一蹴りで飛び込み、四方から殴りかかる。

それを少女は股の間をスルリと抜けるといって、最短かつ最小の労

力でかわした。

振り返り対峙し直した二人を見て、グレーの瞳の少女が話しかけてきた。

「今の内にお前を完治させるぞ。集中しろ」

「わ、分かった」

——相変わらず俺の身体は動かないままだった。

それは彼女の瞳の魔力がまだ効いているかららしいのだが、治癒の法の刺激で精神だけが先に目覚めたらしい。

ちょうど身体は眠っているが、頭は起きているというレム睡眠のような状態だ。

だがそれと違うのは、瞳の魔力が切れる前に傷を癒さないと——少なくとも致命傷から回復していなければ——彼女にここまでしてもらった意味を無くしてしまうという事だ。

だから俺は、彼女の言う集中というものがどうすればいいのか分からなかったが、とにかく傷が癒えるのを真剣に祈った。

「……よし」

少女はふうつと一息ついてから握っていた手を離し、俺に起き上がるよう促した。

「ありがとう」

素直に謝辞を述べる。

「別に感謝される事じゃない。私に関わって死なれるのが迷惑だっただけよ」

うーむ、まさかこんな風に返されるとは。何だか変な空気が流れる。

……そんな空気を打ち破るかのように、法衣から大鎌を取り出したもう一人の少女とナイトメアの闘いを見ながら、彼女は語りかけてきた。

「あのデカブツは、もう一人の私が倒す」
デスサイズ

「そうなのか？」

少女はコクリと頷く。

「あの程度の奴は、本来私の敵ではない。でも問題はその後」

口を挟まず聞き入る。

「あのデスサイズは、私から闘争本能を分離させた私の影のような存在なの。」

だからまた一つに戻らなくちゃいけない。

でもアレに理性は無く、私の命令を聞くわけではないの」

鈍感な俺でも何となく直感する。

「……さつき後で手伝えって言ってたな。もしかして……」

「そう、お前がスキを作って私がアイツを吸収する」

「む、無理だつて！ さつき一瞬で死にかけたんだぞ！？」

「無理でもなんでも、やらなきゃお前も私も死ぬのは間違いないぞ。アレに理性は無いんだからな」

「俺はともかく、何でアンタまで襲われるんだ？ 影なんだろう？」

少女に少しの躊躇いが見えたような気がした。

「私の影とは言ったけど、アレが本来の私のあるべき姿なの。だから私を消して元の自分に帰ろうとするはず」

……？ 話が見えない。影なのに本当の自分？ 次々と湧いてくる疑問に頭を抱える俺に、少女は何かを差し出した。

「これを人差し指に嵌めて」

渡されたのは、幾何学模様の四角いプレートがついている指輪だった。受け取ったなりで左の人差し指に装着する。

するとプレートが、独りでに指に巻き付いてチクツと痛みが走った。どうやら裏が判子注射のようにつゲつゲになっっていたらしい。

「その痛みは指輪が毛細血管と結合した証よ。最初だけだから安心して。それは『イマージュリング』と言って、血液からマナをダ

イレクトに吸い上げて装備者のイメージを具現化し易くする、いわば『イメージ』初心者用の指輪なの。

幾何学模様の線に光が満ちてきたでしょ？　それがイメージスタンバイの状態よ」

……まてまて、何がなんだか。それにやるとも言っていないぞ、俺は。

「イメージユって？　マナって何なんだ？」

「イメージとは、簡単に言うと頭の中でイメージしたものを実際に形にする事よ。

その時に消費するエネルギーをマナって言うの。

基本的にマナの消費量が多い程、大きな力や物質を表現出来ると思っているわ」

「ふーん、なるほど」

……で？　っていう。こんなの俺に渡してどうすんの？　ヤダよヤダヤダ。さつき雑魚っぱいのにあっさり殺されかけたっていうのに。

という心の叫びを無視して、少女は唐突に質問してきた。

「お前、名前は何て言うんだ？」

如何にも「えっ？」という表情をしていたであろう俺に、続けて少々意地悪な言葉を重ねる。

「助けた奴の名前くらい知っててもいいだろう。それとも、無いの

か？ 名前」

俺は慌てて、どもりながら名乗った。

「あ、あるよ名前。慶太、出海慶太」

「いずみ……けいた……」

フーン、という顔をしながら俺の名前をリピートした少女は、そのまま口を噤んだ。

二人の視線の先では、ナイトメアとデスサイズの攻防が繰り広げられている。

………

慌てて少女に聞き返す。

「……今度はアンタの番だろ？ 名前。何て言うんだ？」

やっぱりか、と一瞬遠くを見るような目をした後、彼女はつぶやくように答えた。

「名前は……無い」

えっ？ 俺にあんな意地悪な聞き方して？ 俺は遠慮なく疑問をぶつける。

「じゃああのデスサイズってというのは？」

「アレはかつて私に与えられていた使命を具現化したものよ」

「……使命って？」

「……私の使命は穢れた魂の浄化。その象徴があの大鎌デスサイズ。そしてそれを振るうあの姿が、さっきも言っただけ私の本来のあべき姿なの」

……魂の浄化と大鎌。二つのキーワードから一つの解を導く。

人間に限らず全ての生物が抗う事の出来ない運命。それは死だ——魂の浄化とはおそらくそういう意味合いがあるのだろう——それを与える立場と言われて、思い当たる存在と言えばまず一つしかない。

「……し、死神とかそういうの……？」

後退りこそしなかったが、心の奥底から湧き出る畏怖の念が、彼女を不愉快にさせてしまったかもしれない。

「まあ……そう思うのが普通だろうね」

……やっぱり。伝わっちゃったかな。申し訳ないという気持ち胸に広がっていく。しかし名前が無いとはどういう事なのか。自然と口について言葉が紡がれる。

「でもアンタが本当に死神だっていうんなら、他にもそういう存在があって、その間では何か呼び名があったんじゃないのか？」

神話や御伽噺の中での話だと思っていた存在を、あっさりと認めるような発言。だが、彼女の話嘘だと切り捨てる事は到底出来なかった。

「呼び名か……確かにあった。

でも今の私にはそれを名乗る資格がないの」

「どうして？」

そこまで聞いた所で、彼女の表情がフツと緩んだ。

「……その先が知りたければ、この場を乗り切る事だ。見て、もうすぐケリがつく。

あのナイトメアが片付いたら、今度は私達の番よ。そろそろ覚悟を決めなさい」

上手くあしらわれたようだ。だが今の会話で俺の心は、先ほどよりは少し平静を取り戻したように思えた。

「イヤだと言ってもやるしかないんだろ？」

強がってみる。自分自身を鼓舞するためにも。

気付けば、ナイトメアは脇から生えていた二本の腕が無くなっていて、代わりに鎖の先に鉄球のついた武器を振り回していた。

さっきの、追っ手が白い塊になって光の槍になったのもそうだが、どうやらコイツらは何かを代償にして別の何かを作っているようだ。

その何かの根本がマナとかいうやつなのか。で、この巨人は腕二

本分のマナを消費して鉄球を作り出したと。

自分の判る範囲での解釈で状況を整理してみた。なるほど、彼女の話に通じる部分があるようだ。そんな考察の材料になっているとは知る由もない巨人は、得意げに鉄球を振り回して獲物を仕留めようとしている。

だがデスサイズにとってそれは、欠伸が出るほどスローな動きだったに違いない。

自慢の肉体から繰り出される猛攻を軽々とかわされ、痺れを切らした巨人。まさに脳筋といった具合に、間合いも計らず短絡的に武器を振り回している。

そしてデスサイズに向けて叩きつけた直後、遠心力で伸びきった巨人の両腕が、ロボットのそれのように胴体から離れた。彼女の大鎌が下から上へと刈り取ったのだ。

鉄球が慣性で腕を引きずりながら飛んでいく。

「グオオオオッ！」

流石に痛いらしい。無い両腕部分を見つめながら巨人は吼えた。

ここぞとばかりにデスサイズが決めに入る。

高々と跳躍しその握り締めた大鎌を、身体を思い切り反らした状態から、胸と膝がくっつくくらいの勢いで一気に振り下ろす。

かまいたちのような衝撃波が巨人の身体を通過した数秒後、その巨体が真つ二つに別れたのだった。

崩れ落ちた巨人の身体は、燐のような鈍い光を放ちながらその存在を消していった。

「終わったか……。次は私達の番よ」

スタツ……と柔らかく着地した青い瞳の少女。首から俺達を見やり、身体を向けなおす。

「……来るぞ。さあ慶太、イメージで取り敢えず身を護るものを出しなさい」

——強がりとは所詮強がりでしかなかった。またしても俺はテンパってしまっていた。

「うう……あ……」

鎌を携えた少女がどんどん近づいてくる。それに気圧されジリジリと後退ってしまう。

「慶太！ しっかりしろ！」

自分の声が耳に届いていないのを察知した彼女は、チツと舌打ちして自ら死線の向こうへ踏み込んだ。

「はあーっ」

飛び込みながら懷に手を突っ込み白い反物を取り出し、フリスビ

ーを投げるような動作をすると、高速で相手に向かって伸びていく。

デスサイズはスツと左へ動いて身をかわしたかと思うと、これまで高速で飛び込み鎌を縦に振る。

それを名無しの少女は、慣性を利用してしゃがみながら右回転し軸をずらし、そのまま立ち上がりながら右脇あたりを思い切り蹴り上げる。

デスサイズは鎌を握っていた右手を離し、身体を仰け反らせてかわし、無駄の無い動きで蹴り上げた脚を掴みオーバースローで投げ放す。

少女はキリキリと体勢を立て直し、ズザザーっと滑りながら手をつき着地した。直ぐに相手を視認する。

既にデスサイズは目の前まで突進してきていた。

次は鎌を短く持って横に薙いできたのを、飛び退いてかわす。しかしデスサイズも続くように飛び込んで更に薙いできた。

「くっ」

今度は腹ばいで着地してやり過ごし、立ち上がりながら左手に取った角帽を相手の顔に押し当てる。

そして視覚を奪い右で腹部に正拳を入れる。だが今度はデスサイズが咄嗟に飛び退いて身をかわすのだった。

青い目の涼しげな顔。大鎌をゆつくりと反時計回りに回転させると、一対の細身の剣に変わった。

一方の険しい表情の灰の瞳は、反物を洗濯物を干す時のようにパッとはたいて白い棍に変える。

ジリジリと互いの間合いを計る。……と、二人の武闘——舞踏とも言えそうな——を傍観していた俺に突然声がかかる。

「慶太ー、早くイマージュしてー！」

俺はまだ震えている。

「そんな……、出来っこない。それにそんな動き……ついて行けない」

「それは私に考えがある！でもイマージュ出来なきゃそれも意味がない。

早く！早くして！」

「そんな……」

たじろぐ俺を尻目に、剣劇の第二幕が上がる。といっても剣線を振るうのはデスサイズで、少女は身を守るのみだった。

様々な方向から迫る剣撃を棍で受け止め、或いは受け流し、刺突はすんでのところで身をかわす。

法衣は最早着衣としての機能をほぼ失い、その奥に秘められた柔肌を勿体ぶるようにちらつかせている。

「グヘヘ……」

と言いながら、普段の俺なら目を皿の様にして食い入る所だが、流石にそんな心の余裕はなかった。

しかし危ない。特に危険だと感じるのは、間合いをとろうと飛び退いたり、偶に放つ強撃をかわして体勢を立て直そうとしたりした時だ。

毎回あわやというギリギリの防御になってしまふ。なぜ同じ顔の少女でこんなにも能力に差があるのか。

闘争本能の具現化などと言っていたが、それが何か関係しているのか。

暫し二人の剣の舞いが上演されたのち、またお声がかかる。

「慶太ー！ 早く、早くしてくれー！」

……言っておくが、俺は普通の人間なのだ。自称死神に手を貸すなどそもそもおかしい。助けてくれた事には感謝するが、それとこれとは話が別だ。

相変わらず身体は、初夏の夜でそう寒い訳でもないのにブルブル震えている。

こんな俺に一体何が出来るというのか。イメージ？ バカな。そんなよく分からない事が、こんな切羽詰まった状況で簡単に出来

てたまるか。

少し前は助けなきゃ、という感覚もあった気がしたが、今はもう見る陰もなく、飼育箱の中でブルブル震えるハムスターの気分だった。

そんな、卑下されて然るべき俺の頬を突然何かが掠め、背中を預けていたグランドの壁に突き刺さった。スーッと一筋、血が流れる。

「慶太、次は額を狙う！」

それは、必死に剣を捌きながら少女が投げてきたクナイだった。いよいよ脅迫行為に及んできた。

例えばショー等で、不意に指名されステージに上がるのを拒む顧客のように、こんなにも俺は無理だと言っているのに。

助けてください！ 誰か、助けてください！

……いつか中の良い女の子と見た映画の台詞が、心の中でこだまする。最早俺に選択肢はないのか。俺の人生、やっぱりここで終わりののか――

少女が俺目掛けてクナイを放つ。ソレが俺の額を割るのに要する時間は1秒にも満たない。俺はその1秒足らずに祈りを込めた――死にたくないっ！――

第三話 イマージュ

「慶太！ 見せてみるー！」

慶太目掛けてクナイを放ちながら叫ぶ。

——今ここで出来なきゃ私達は終わりなんだ。頼む、慶太——

ズガッ

両腕で頭を覆っていた彼から一瞬光が放たれ、クナイが直撃の寸前で何かに阻まれた。

「な、なんだソレ！？」

彼女にそう言われた俺は、ソーツと目を開けた。盾が、盾を創ったのか俺は？

にしては彼女の反応が妙だ。あれか、ちょっとデカいからか？俺の身体がすっぽり隠れそうだからな。

「ソ、ソレがお前のイマージュした盾なのか？」

なんだ、なんか文句あるのか。見事にやってやったじゃないか。

この若草色の長方形。無駄の無いスラッとしたフォルム。

薄々気付いていたが、俺がソレと認めるのには少し時間が必要だった。

ソレは……畳だった。

この状況が、最もカッコイイ場面になる筈の台詞をキメる。

「た、畳返しだ」

「……」

「……何バカな事言ってるの、やり直しなさい！」

くっ……やはりそうきたか。仕方ない。俺は盾をイメージするためにもう一度目を瞑って集中してみた。

畳が白発光に包まれ、突き刺さっていたクナイが支えを失い落下する。そして円形の盾が出来上がった。

うむ、大きさはなかなかだ。左腕のバックラーとしてはちょうど良い。

焦げ茶色で表面は凸凹している。……マンホールだった。「お前、またそんなダサイモノを……」

「ダサいって言うな！　ここを見る」

俺は文字の書いてある部分を指差した。

「耐……圧……？」

「そつだ耐圧だ。丈夫そつだろ」

少女の頭上に吹き出しが見える。

「コ、コイツ、何を言ってるんだ……？」

そんな感じの台詞を浮かべてるんだろつ。さすがに少し、恥ずかしい。

沈黙しながらも、一対の剣の猛攻を捌きながら凌いでいる少女に突然声を掛けられる。

「慶太、武器も出せ！　盾から剣を引き抜くイメージをしてみろ！」

「こ、こうか……？」

盾の端を握ると、握った部分が光を放ち、イメージの具現化が始まった。勢い良く右手をしならせるように引き抜くと、刀身がグニャグニャする蛇腹のような剣が現れた。

「こ、これがイメージジュ……。俺のイメージした剣……」

少女が死闘を繰り広げているなか、俺は暫しイメージジュの余韻に浸るようにボーっと蛇腹の剣を眺めていた。

その時少女は、デスサイズの猛攻を受けてかなり追い込まれていた。剣のイメージに成功した俺にコメントする暇もないくらいに

俺は蛇腹の刀身を根元からその切っ先までゆっくりと眺めながら、イメージを膨らませる。

「これが本当に俺のイメージ通りなら……」

二人の少女が鐔を競り合うようにして動きが止まった時を見計らい——かなり離れていたのだが——

斜め後ろから剣を振ると、ジャララッ！ と剣先が高速で伸びてデスサイズの顔を掠めた。

すぐさま青い瞳が俺の目を射抜いてくる。

が、俺がその瞳に恐怖を感じるよりも早く。

少女が前蹴りで腹部を蹴り上げ少し浮かした後、後ろ回しで棍を脇腹に叩き込みそのまま振り抜いた。

初めての有効打を喰らって吹っ飛ぶデスサイズ。それを見ながら、少女が俺の方へ移動してきた。

「お前、そっちのセンスはなかなかじゃないか。」

「動きについていけないから、動かなくても攻撃が届く武器をイメージしてみたんだ」

実は俺は格ゲーヲタの一面も持つ。この剣は俺が今ハマってるゲ

ームを参考にしたものだっただけ。

それ故に防御面のイメージが湧かないという弱点もあるのだが――格ゲーは基本肉体で直接ガードするタイプが多く、精々剣で弾くのが殆どだからだ――。

そんな事は知りもしない少女には、得意げに答えてやる。

「なるほど。」

自分の欠点を理解した上でイメージ出来るなんて、鍛錬次第で今後が楽しみだね、防御面はダサいけど」

「ダサいつて言うなって！

……それより俺の攻撃はさっきの不意打ちが精一杯だぞ」

そう、ノーマークだったであろう俺の攻撃がああしてかわされてしまった以上、俺の攻撃など全く役にはたたないだろう。

それを踏まえた上でさっきの彼女の発言の真意を問う。

「さっき考えがあるって言うってたな。何なんだ、俺に出来る事なのか？」

「慶太、これからお前の能力を限界まで引き出してあげる。でももう攻撃はしないで。専守防御よ。」

そうすれば、今の慶太でもかなり持ちこたえられるはず」

俺の不安そうな表情を見て、諭すように少女は続ける。

「聞いて。今アレの最も危険な能力は『神速』よ」

「神速？確かに速いな。でもそれはアンタも一緒じゃないのか？」

「違うわ、私が距離を取ろうとする度に追い詰められてたでしょ。

神速はデスサイズ的能力なの。

普通は地面を蹴ってその反動で移動するから、実際に動き始めてからスピードにのるまでは少し時間がかかるの。

簡単に言くと、零から百の動きになるのに数秒かかるのが普通なんだけど、神速はいきなり百の動きが出来る能力なの」

なる程、だから逃げる事も距離を取る事も出来なかったのか。だが今から俺がそれに相對する事を考えると、やはり無理なんじゃないかと思えてくる。

「でも今のアイツは神速に絶対の自信を持っているから、まず直線的な攻撃しかしてこない。

だから正面から受け止める事を心掛けていれば、今の慶太でも大丈夫なはず」

確かに裏を取るような事はしていなかったな、と思いつ返す。

「但し一つ言っておくぞ。

お前の能力を引き出した後、私は残りの力をヤツの吸収の為に使うから、お前を助けてやる事は出来ない。

私達が生き残れるかどうかは、お前次第だということを忘れるな」

俺は覚悟を決めた事を彼女に告げる。

「……分かった。俺は俺の出来る事をやる。後のことは頼んだぞ、……と」

歯切れの悪い台詞に少女は怪訝な顔をしていた。

「どうしたんだ？」

「いや……名前が無いなんてな、と思つてさ」

少女は唐突な言葉にキョトンとして、目を丸くしている。

「……俺が名前つけてもいいか？」

俺にもはつきりと分かるくらいに、少女がピクツと反応した。

彼女は髪で表情を隠したまま尖った口調で反論してきた。

「こ、こんな時に何言ってるの！ サツサとやるわよ、こつち向いて！」

「ヤ、やる……つて、ああ能力を引き出すつてヤツか。頼むよ」

俺がそう言い終わると同時に、少女はボロボロの法衣をバサツと脱ぎ捨てた。ここで初めて俺は彼女の服装を確認する事になった。

上は半袖のネイビー色ジップ式パーカー。ジッパーラインは赤色で、開口部は白でアクセントになっている。

更に、左右の腕に乳白色の二連ブレスレットを身に付けていて、パーカーの下からデニムのダメージジミニが見え隠れしている。

まさか自称死神がこんなファッションをしてると思ひもよらな

かった。素直に可愛いと思ってしまったではないか。

と、俺より少し背の低い少女の容姿に見とれていると不意に。

俺の頬に両手を添え上目遣いの綺麗な灰色の瞳が、ズイツと視界いっぱい迫ってきた。

「ちよつ、近……」

心臓がドキンと跳ねる。こんなに近くで見つめられて、ドキドキしない男がいるはずもない。それに男は女性とのスキンシップにとっても弱い。

いつの間にか、虹彩がショッキングピンクに輝いている少女は、俺の心に染み入るように囁きかけてきた。

「慶太、アナタの力はこんなものじゃない。信じて？ 自分を。慶太ならきつとやれる。……私を……助けて」

う、うおお、何故だか彼女の為なら命も懸けられる気分になってきた。何だか力が漲ってくる。

そうだ、俺はこんなものじゃない。まだまだ力を出せる！

「うおおおお、やってやるぜえー！」

戻ってきたデスサイズに、俺は耐圧の盾を構えて対峙した。

第四話 共闘（前書き）

どうも、ジャムです。この回でやっとヒロインの名前が登場します。序章はもう少しだけ続きます。

なかなか筆が進まないのが辛いですが、頑張って投稿していきま
すので、気を長くしてお付き合いくださいなれば幸いです。

第四話 共闘

ちよつ、コイツなに突然変なコト言い出すの！？ 名前をつけた
い？ 頼んでもいないのに。

さっきも！ 私なんて助ける義理もないくせに！

あゝもう調子狂っちゃう。サッサと力を引き出して終わらせちゃ
おう。

「慶太、アナタの力はこんなものじゃない。（はあゝ、何でこんな
コトやってんだろ、私）

信じて？ 自分を。慶太ならきつとやれる。

……私を（うるっ）……助けて（ていうか、助けなんていらなか
ったのに）」

イーヴィルアイで視神経から直接脳に干渉、魅了効果で慶太の精
神のリミッターを外してやる。

何故だか知らないが元々動体視力は良いみたいだから、これでか
なりやれるはず。もっとも、やってもらわなきゃ困るんだけど。

「うおおおお、やってやるぜえゝ！」

……単純なヤツ。私が言った事をちゃんと覚えているのか？ け
どうなった以上、コイツに任せるしかない。頼むぞ。

外野の深い所まで吹っ飛んでいたデスサイズは、ゆっくりと歩いて戻ってきた。無表情ゆえ、その心情は読み取れない。

殆どダメージは受けていないようだったが、こちらを見て、擦れて破れた法衣を脱ぎ捨てた。

当然同じ格好だと思っていたのだが……違った。これは彼女の二面性の表れなのだろうか。

上は黒のベアトップで、左右対称に大きめの白いフェイクボタンが計八つついている。少女の程よい胸の膨らみが、上から二段目のボタンを主張していて、胸がアツくなる。

そしてそれに合わせたモスグリーンのミニスカート。チラチラ見え隠れする僅かな肌色ゾーンが、小宇宙を感じさせた。これが着エ口というやつか。

いやまで、俺は今から彼女と命のやりとりをするはずではなかったか。

——こんなコトに目を奪われているようでは、護れる命も護れないぞ。

俺は二人の少女の間に割って入り、耐圧の盾を構えて対峙する。デスサイズは一定の距離まで近づくと、ピタリと立ち止まった。

緊張感に耐えきれず、先に痺れを切らしたのは俺だった。

「ダメッ！」

パーカーの少女に制されたが蛇腹の剣を振ってしまった。

後の先をとるかのように、ベアトップの少女が伸びてくる一太刀をアッサリとかわし、カウンター宜しく俺の心臓目掛けて刺突を繰り出してきた。

ヤバイ！　と思ったが攻撃後の硬直で動けない。

万事休すと思われたその時、丹田に力を込めた低音の掛け声と共に、俺の右脇から物凄い速さで棍が飛び出した。

ズドッ

棍のリーチが勝り尚且つ死角からの一撃だった為、デスサイズはかわす事も出来ずにクリーンヒットした。

「バカ慶太！　手を出すなって言ったでしょ！」

「わ、悪い！　でも今のは効いたんじゃないか？　捻糸棍だろ？」

捻糸棍。大地を踏みしめ、脚から腰へ力を送り、腰を捻る。

そうして倍加させた力を今度は肩から腕、そして棍へと送り、捻りを加えた強烈な突きを繰り出す。

普通の突きの数倍の破壊力があるという。勿論格ゲーマメ知識だ、俺が体得してるわけじゃない。

しかしスゲー迫力だった。こんな華奢な身体のどこにそんな力が蓄えられているのか。

「今はマナを集中してないから大して効いてない。距離を取る為にやっただけ。

見て、すぐ立ち上がってくる」

そう、今の私にはギリギリのマナしか残っていない。グレイヴメイカー墓標の分しか。もう今のが最後の一撃だ。

バカ慶太、分かったの？ これでもう本当に助けられないぞ。

っていうか何で捻糸棍とか知ってるんだ？

武器のイマージュといい、これだけの速さにすぐ慣れた動体視力といい、何か特別な事でもやってるのか？

……謎だ。

これ以上ないクリティカルヒットに思えたが、うん、やはり。大して効いてなさそうだ。

「マジかよ……あんなの相手にどうやって吸収するんだ？」

「これを両腕に嵌めてやれば、緊縛の術が発動できる」

慶太に腕に嵌めている、乳白色のブレスレットを見せる。

「私はもう武器をしまうから、慶太、本当に頼むぞ」

「ああ、もうヘマはやらない。その腕輪を嵌める為のスキを作ればいいんだな、メイ」

「そうよ」

………

………？

「めい？」

横にいる男の顔をスツと見上げる。

「良い眼をしてるからメイだ、良い名前だろ？」

それに命を預ける相手が、ずっと名無しじゃ俺も困るしな」

ど、どうしたんだ私は！？ か、顔がアツい。心臓が高鳴る。ダメ！

「バツ、バツじゃないの！ 今そんなコト言ってる場合じゃないでしょ！」

ドキドキが収まるどころか、どんどん速くなってくる。くそう、
ヘンな事言いやがって……

「気に入ってくれたか？」

「何言ってるの！ ほら来たわよ、ガードして！」

「任しとけ！」

凄く調子の良い返事が返ってきた。いくら精神のタガを外してや
ったからって、さっきまでと変わりすぎじゃないの？

まあ、今はその方が良くんだけど――

バキーン、と金属同士のぶつかる音。もうヘマはしない。

俺は二人の間に陣取り、攻撃を耐圧の盾――ただの腕にくつつい
たマンホールなんだけど――で受け止めると同時に、蛇腹の剣を新
体操のリボンのようにくねらせながら逆袈裟に斬り上げた。

これは攻撃の為の攻撃じゃない。この螺旋の不思議な動きは、
後ろに飛び退くしかないという予測の下、相手の動きを制限する
ための陽動なのだ。

案の定、敵は下からの攻撃に合わせて後方に宙返りする。

「今だメイ！」

ピクツと反射的にデスサイズに向かって飛び込んでいくメイ。素晴らしい連携プレーに見えるが、

「名前を呼ばれたからじゃないんだからね！」

と反論してきた。

乳白色の二連ブレスレットが黄金色に輝く。メイが左のそれをつ引つ張ると、マジックのように手首をすり抜けた。

宙返りして視覚情報を整理仕切れていない、且つ、着地寸前の身動き出来ない瞬間を狙う。

メイがデスサイズの左腕にブレスレットをあてがうと、またマジックのようにすり抜けてガツチリと嵌った。

「良し！」

「あともう一個だな！」

「うん！」

初めは見せていなかった、メイの活き活きとした表情。ちゃんと良い顔出来るじゃないか。

と思っていると、急にブンブンと首を振って、集中しろ！と自分に言い聞かせている。なんかちよつと面白い。

とっさの連携だったにもかかわらず、ここまで上手くいくとは。さすがの動きだな、メイは。

でも、トリッキーな事はもう通用しないだろう。あと一個なんだが。

何でもそうだが、その『あともう少し』が難しい。俺という壁から離れたメイに、猛烈な勢いで剣が振るわれる。

得物を持たない彼女は、逃げるしかない。どんどん俺から離れていく。

流石に自分への凶刃は防げても、あの二人に追いついて割って入る程の動きは出来ない。どうすればいい？

俺はナウい盾と蛇腹の剣のイメージを解きながら二人の後を追った。

幸か不幸か、ここがグランドだった為、二人の鬼ごっこは俺から一定の距離以上離れる事はなかった。

メイを見ると、左上腕から血を流していた。さっき、着地ざまに振り返りながら放ったデスサイズの一撃にえぐられたらしい。

他にも、剣を気にするあまり疎かになっている打撃を喰らって、アザや擦り傷が出来ていた。

俺には考える猶予はそれほどない。メイを救うにはどうすべきなのか。

俺に出来る事。

それを考えながら、俺はもう一度イマージュの為に目を閉じて集中を始めた。

第五話 墓標

——メイは自らの危険を顧みず、俺を助けてくれた。だから、今度は俺が助ける番だ。

たとえ近づけなくても、デスサイズの気を引かせられればそれでいい。

彼女を救う為に、俺は俺の出来る事をやる——その覚悟を持って目を閉じる。

左腕を掲げ集中を高めると、イマージュリングの輝きがどんどん増していき、血液からマナを吸い上げて俺にその力を還元する。

力の塊をかざした左手で握り潰すと、拳が白発光に包まれた。そして人差し指を起て、メイの位置に気を付けながら、デスサイズ目掛けて腕を振る。

すると、エネルギー弾が尾を引いて放たれた。それは、あの巨人のナイトメアが繰り出した技を見様見真似でやったものだ。

おゝ、出来ちゃったよ。さすがだな、俺。こういうのはきつと得意分野だと思うぜ……って、誰に言ってるのかな。

小さな出力しかなかったが、なんとか出来た。ついさっき目の前で見たのだから、出来なくはないと思っていただけだ。

生憎ハズしてしまったが、それは問題ではなかった。欲しいのはほんの少しの『間』だったのだから。

「メイ！ こつちだ！」

その言葉を聞くが早いか、瞬間的に察知して此方に向きを変える。殆ど間髪を入れずにデスサイズがその後ろを付いて来る。メイよりワンテンポ遅れているはずなのだが、神速でその差が全く広がらない。

メイを守るにはどうすればいい？ 今必要なものは？ 考える。

防御に関して俺には素質も素養もない。なら俺に出来る事は。

頭に思い描いたイメージを具現化させる。

両拳を握り、体の正面で親指側同士をくつつける。すると両拳が光りだし、エネルギーの塊が出来た。

武器をイメージしながら水平に腕を広げていくと、少し短めの、一対のサイという剣に変わった。

山という字に似た形をしているといえは分かりやすいだろうか。

ともかく、防御に関して才能の無い俺が考えた事は、『攻撃は最大の防御』の実践だった。

武器を手にして俺もメイに向かって駆け出した。

一気に距離が縮まる。そしてすれ違い様にメイと視線が重なった。

言葉は無かったが、それ以上の信頼が二人の視線には宿っていた。

メイのすぐ後ろに迫るデスサイズに、突進を止める為の攻撃を繰り出す。

進行方向から突如迫る逆風の太刀に、急ブレーキを余儀なくされたデスサイズ。

その一太刀を受け止め、そのまま鏑迫り合いになった。

「す、すげー力だ」

押し返す反動で飛び退いたのを合図に、激しい攻防が始まる。

メイを守るように立ち回りながら、話しかけてみる。

「大人しく、吸収されて、くれないか？」

剣を弾きながらなので一言ずつしか喋れない。

「自分で、自分を斬るなんて、アンタも望んじゃ、いないだろ？」

今までただの一言も発していないからそうだと思い込んでいた。

デスサイズは闘争本能の人格化。ただ機械的に任務を遂行する、それだけの存在。

立ち塞がる障害と話す事など無い。そう思っていると。

「私は……神の下に戻るのだ」

「どういつ事だ？」

言葉の裏を探る。

「メイを消す事が、神の下に、戻る事に、繋がるのか？」

その台詞から、今は天界か何かから追放されているという事が推測出来る。

そういえばメイが、今は本当の名を名乗る資格がないと言っていたことを思い出す。

「人間などに、肩入れしては、いけないのだ！」

う、うおっ、感情的になっているのか、一撃が強烈になってくる。

「何があつたんだ？」

「貴様には関係無い！」

彼女の怒りを買ってしまったのか、一歩引いたと思うと右手に持っていた剣を力の塊に戻し、エネルギー弾を放ってきた。

両手のサイをクロスさせてそれを受け止める。

「くっ、うっ！」

物凄いプレッシャー。しかし鬪牛の突進を払うように横に受け流す。

「慶太！ 危ない！」

身動き出来ない一瞬を逃さず、デスサイズが左の剣を俺に突き立てる。

「うっ おおお！」

両手に持っていたサイを離し、刺突を半身を捻ってかわし、右脇で相手の左腕をキメる。

「メイ！」

間髪を入れずにメイが飛びかかる。右の腕輪を左手に抜き取り、デスサイズの右手を掴んで腕輪を嵌める。

「やったな、メイ！」

気を緩めた瞬間、デスサイズが俺に頭突きを喰らわしてきた。思わずクラッチを解いてしまう。

そのスキに左手の自由を取り戻して、横に一閃。絶体絶命。一人なら完全に詰んでいた。

だが寸前でメイの蹴りを喰らい、俺は吹っ飛んだ。

それによって危機を脱したのだが、かなり効いた。

意識を失うまではいかないものの、初めて味わう一撃に、俺の身体

は暫くいうことを聞かなくなっていました。

——油断大敵。間一髪だったぞ。

慶太にご褒美の蹴りをくれてやる。そのまま着地したなりで、掴んだままの右手に左手を加えてデスサイズを投げ飛ばす。

そして自分は逆方向に地面を蹴り距離をとる。

心を落ち着け、人間が懺悔する時のように胸の前で手を組み、祈りを捧げる。

「我に力を《ダウン》《フォース》！」

すると何の前触れもなく、天から巨大な十字架が降ってきた。

ズドオオン

その巨大なクロスが私の背後に突き刺さる。

私の蹴りを喰らってうずくまっている慶太が、あんどりと口を開けて見ている。

……まあ初めての経験だろうからな。

次に両手を開き、また唱える。

「アブソープ
吸魔！」

身体からキラキラ混じりの白い光が立ち昇り、それに呼応するように背後の十字架にキラキラの白発光が充填され、点滅を始めた。

その光景は——慶太たち人間からすれば——、まさに神々しいという形容がピッタリだろう。

それは、私の中のありったけのマナを吸い取っていく。

そして充分力が蓄積されたのを気配とより強くなった輝きで察知する。

広げていた両手をスーツと頭上に持っていく、発動の言葉と共に両手を振り下ろしてクロスする！

「グレイヴメイカー
墓標！」

点滅していた十字架から、二本の稲妻がデスサイズに向かって撃ち出され、両腕に嵌めた腕輪に繋がった。

稲妻の鎖がデスサイズを捕らえ、手を離れたメジャーのように巨大な十字架に巻き戻っていく。

ジャラララ……バキーン

両腕が十字架に拘束された。

「たあーっ！」

デスサイズのまだ自由の利く脚に向かって飛びかかり、残り二つの腕輪を両足首に掛けて、十字架に打ちつける。

そして遂に、デスサイズの動きを封じる事に成功した。

「やつ……やつた……」

俺は無意識にそう発言していた。

磔にされたデスサイズを見上げる。んーむ、これは……けしからんな。

黒のベアトップにモスグリーンのミニスカート。

このような露出の高めな服装の少女を磔にするなど、全くもってけしからん。

……などと、本当にけしからん事を考えているのは、俺だけだろうな。だが反省はしない。それが俺、出海慶太だからだ。まあ、世間には内緒だけだな。

と、俺が脳内暴走モードに突入している間に、呼吸を整えたメイが、もう一人の自分に語り掛ける。

「手をかけさせてくれたわね。残念だけど、私はあそこに戻る気はないの」

ガチャガチャとデスサイズが無駄に足掻く。……ひとしきり足掻いた所で、メイに向かって話し始めた。

「リリスの悪意から逃げられると思っているのか」

メイは少しの沈黙の後に言葉を返した。

「それでも……それでも戻る事は出来ない。私は望んで堕ちたのだ」

「愚かな……見る、今の地上を。お前のたった一つの過ちが、どれだけ世界を狂わせていると思っている」

……何だ、何の話だ？

「それは……しかしあの時、あの娘を見殺しにするなど私には出来なかった」

「お前も知っているだろう。お前が人間にとって忌避の存在ではない事を。」

そのお前が人間に情けをかけて神に背く事に、一体何の意味があるというのだ？」

「メイ……何があつたんだ……？」

言葉が上手く出てこない。

「貴様には関係ない。それにコイツをメイなどと呼ぶな」

少しの怒りが俺の中に芽生える。

まあ資格が無いと言いながらも、本当は名前が有るんだから彼女の言うことは当然と言えば当然なのだが。

だからといって名無しのままなんて……消化仕切れない。

葛藤していると、デスサイズが今度は俺に向かって話しかけてきた。

「お前も同じだ。コイツの正体を知ればお前も忌み嫌うに決まっている。

今からでも遅くない。そのリングを使ってソイツを消すのだ。マナの尽きた今なら、お前でも倒せる。

ソイツさえ消えれば、私は本当の私に戻るのだから」

「……メイを……消せだって……？ 馬鹿な事言っ……」。

メイの……正体なんて……関係ない……」。

過去に何があるうとも、俺にとつてのメイは……今のこのメイなんだ！」

そう、関係ない。例え彼女が死神であっても。過去に何があるうとも。

俺は俺の目で見たもの、自分の判断を信じる。他人の評価など関

係ない。

「そんな名で呼ぶなと言っただろう！ 教えてやる、ソイツの名は」

「もういい！」

メイが割って入ってきた。

「私の道は私が決める。お前は大人しく私の中から行く末を見届けるがいい」

そう言っ、メイは殆ど無いであろうマナを使っ、デスサイズと同じ高さまで浮き上がり、正面で相対した。

礫にされたデスサイズに向き合い、呼吸を整え詠唱に入る。

「受諾せよ《アクセプト》」

メイの身体の輪郭がボンヤリと輝き始めた。

「我より出でし者よ、汝は我なり」

ドクン……

ドクン……

………？

ドクン……

ドクン……

心音に連動するように大気が揺れる。そして一際大きな揺らぎが、波紋のように広がった。

……この感じ、さっきナイトメアが現れた時によく似ている。

ようやく身体に感覚の戻ってきた俺は、立ち上がりながら周りの様子を伺った。

「まさか、早すぎる！」

メイが初めて狼狽する姿を見せた。

「おい、融合するなら早くしろ！」

なんと、あれだけ抵抗していたデスサイズが、自ら戻る事を要求してきた。それを聞いてメイは詠唱を続ける。

「汝、今在るべき場所に戻り、その記憶と経験を一にすべし」

妖しく目を光らせた黒猫が、音も無く忍び寄ってきていた。その妖しげな猫が一鳴きすると、その足元から暗黒が広がっていく。

慌ててメイが最後の言葉を発する。

「ユナイト・アストラル
融合！」

……？ 何も起こらないぞ。

周りは暗黒に閉ざされ、俺たち三人とその猫だけがオーラのようなものを纏って、真つ黒のキャンバスに奇妙に浮かび上がっていた。平衡感覚を失ってしまいそうだ。

「なっ……融合出来ない……？」

「融合？ そんな事は出来ないよ」

……！ ね、猫が喋った！？

「此処は魂の牢獄。ソウルプリズン

この中では魔法なんて使えないよ」

瞳孔の思い切り広がっている猫が、礫にされているデスサイズをチラリと見てまた語る。

「もっとも、発動状態の術は活きているがな」

「俺たちをどうする気だ！」

一番自由のきく俺は、身構えながら猫に噛み付く。

「威勢が良いな、人間。私は何もしない。ただ待っているだけだ。感じないか？ このソウルプリズンがお前たちのマナを吸収しているのを」

そうなのか？　そう言われれば妙な脱力感がある。

「お前たちがマナを吸い尽くされて気を失うまで、私は此処で見ているだけさ」

「おい、もう私を拘束していても意味が無いだろう。術を解け」

デスサイズがメイに向かってそう言った。だがメイはグレイヴメイカーを解除しない。いや、解除出来ないでいた。

「言っただろう。魔法は使えないと。マナを操作して事象を変える以上、解術も立派な魔法だよ」

……圧倒的。この猫の能力は、荒ぶる力の顕現のような、ある種単純で分かりやすいものとは違い、得体の知れない不気味さがあった。

三人もいて全く何も出来ないどころか、敵も何もする必要がないなんて。

「メイ、何とか出来ないのか？」

「ごめん……今の私では……ハアハア、何も出来ない……」

メイの様子がおかしい。大量に汗をかき、肩で息をしている。

「だ、大丈夫か？」

メイは悔しさを滲ませた顔で答えた。

「ハアハア……慶太……すまない……こんなに早くコイツに見つかるとは……思ってたなかった……」

「そんな事はいいい！これからどうすればいいのかを教えてくれ！」

突然グレイヴメイカーが解け、デスサイズが自由を取り戻した。

「え……？ 解術も出来ない筈じゃ……」

「ククツまず一人」

黒猫の台詞にハツとしてメイの方に振り向く。彼女は既に意識を失い、膝から崩れ落ちていた。

「メイ！」

彼女の華奢な身体を抱き起こし、懸命に呼びかける。だが完全に昏倒しているらしく、全く反応がない。

「そんな……メイ！」

絶望感に覆い尽くされそうになっているのを、必死で堪える。それを見て憎らしく微笑を浮かべた黒猫が、俺に興味を示した。

「お前……只の人間にしてはかなりの容量だな。まだそんなに動けるとは。」

「何の事だ！？ 早く此処から出せ！」

苛立ちを抑えられなくなってきた俺は、怒気と共に言葉を発する。

「ああ、いいさ、お前だけなら。用があるのはそっちの二人だけだからな」

「それじゃダメだ。一体二人をどうする気だ！？」

「それはお前には関係のない事だ」

くそっ、なんて反応に手応えがない奴なんだ。しかもグズグズしてたら俺達も意識を失ってしまう。

何より今メイを助けられるのは俺しかないんだ、俺がなんとかしないと！

俺は焦っていた。この局面を打開出来るのは自分しかないけど。だがどうすればいいのか、俺は答えを出せずにいた――

第六話 ファーストキス（前書き）

どうも、ジャムです。前回更新から約一週間、どうしても気になつてしまい、投稿済み小説の手直しをしていました。

続きを心待ちにしてくださっていた方、大変長らくお待たせしました。第六話です。サブタイトルも幾つか候補があつたのですが、最終的にコレにしました。男としては情けない限りですが、こういった経験が、後々彼を大きく成長させてくれることでしょう。それでは、どうぞー。

第六話 ファーストキス

俺はさっきから一つの方法を考えていた。この暗闇、ソウルブリズンを脱出し、メイを助けだす方法を。

それは単純に、この化け猫を退治すればいいんじゃないかということだ。

一見、喋る事以外は特別おかしい所はない。まあそれが十分おかしい事ではあるのだが。

それにしても最初こそ驚いたが、大体この猫のどこに、俺達をこんな所に閉じ込めておくだけの力があるというのか？

魔法が使えないのは向こうも同じはず。なら不利なのは寧ろあの化け猫の方じゃないのか？

俺の視線や態度から、デスサイズにも心情が伝わったようで、諭すように話し掛けられた。

「あの猫なら攻撃しても無駄だぞ」

「えっ？」

心を見透かされるというのは、やはり気味が悪いものだ。

「あの猫自体は敵ではない、私達と会話するための通信機のようなものだ。

だからアイツを消した所で、この結界にはなんの影響も無いぞ」

「そんな……じゃあ打つ手無しかよ」

「そんな事はない。逆に言えば私達は何をしようと、アイツはただ見ているしか出来ないという事だ」

「それはそうかもしれないけど、こんな暗闇で一体何をすればいいのか……」

いやに饒舌なデスサイズが、その青い瞳の奥に堅い決意を秘めたような眼差しを宿す。

「……私にお前のマナをよこせ」

「な、なんで？」

「お前と私のマナを使って、出口を切り開く」

「何言ってるんだ、この中じゃ魔法は使えないんだろ？」

我ながら少し挑発的。だって、さっきまで殺り合っていたんだ。コイツは言った。メイが死ねば自分を取り戻せると。

いくらこんな状況だからって、そんな奴と軽々しく協力は出来ない。その真意を見極めないと。

「確かに魔法を使う事は出来ないが、マナを使えないわけじゃあない。そこが狙い目だ」

「どういう事だ？」

凜とした表情から確かな力強さが見て取れる。

さっきまで闘っていた相手なんだ。なのに、どうしてこんなに頼もしい顔をするんだ。

「こうしている間にもどんどんマナが吸われていってしまっから、簡単に言うぞ。」

この結界での約束事は『魔法が使えない』じゃない。『マナ消失エネルギーに意思を反映出来ない』だ」

「え？ 全然簡単じゃないぞ」

「まあ難しく考えるな。マナはそのまま使っんじゃない、一度エネルギーに変換してから使うんだ。」

そしてそのエネルギーを生体活動に使えば『代謝』、イメージの具現化に使えば『イマージュ』、言霊を使って精霊の力を借りれば『魔法』と呼ぶ。

人間だって病は気からって言ったり、武道家は気を練ったりするんだろ？ この『気』ってのが、マナから取り出したエネルギーと考えればいい。

知らず知らずの内に、お前たちもマナからエネルギーを受け取っているのさ。

そして今お前はイマージュ出来るか？ 出来ないだろ。でも代謝はしてるな？

つまりはそういう事だ」

「なるほどな。で、結局どうするっていうんだ？」

「この結界の限界容量以上のエネルギーを喰わせる。そのためにお

前の潜在マナがいる。

当然私のマナだけでは破れないように張ってあるはずだからな。後はお前の潜在能力次第だ」

退屈そうに丸くなっていた黒猫が、スッと顔を上げて話に割り込む。

「ああ、そうだね、それがいいよ。
イレギュラーの人間が混じってるとはいえ、どうせ破れはしないんだ。

その方が早く終わって良い」

キツと猫を睨みつけるが、さも興味なさげに欠伸で返されてしまった。デスサイズに相手にしないように促され、深呼吸を一つ。

「分かった。今俺がメイの為にしてやれる事は、アンタを信じる事だ。

なら早くやろうぜ、マナを渡すのってどうやるんだ？」

虚空を見つめ、一呼吸置いた後、デスサイズは語った。

「最も効率良くマナを受け取るには、粘膜から粘膜へが一番だ。この場合、口と口だな」

「ねっ粘膜って……」

そっ、そりゃキスのコトかよー！　いくらなんでも突然すぎだろ。

それに見た目は普通の女の子だけど、中身は死神だかなんだかなんだろ。そんなコト軽々しくやってもいいものか。

ベアトップの上から二段目の、求めてもないのに主張しているフェイクボタンに、つい目がいつてしまう。ゴクツと喉を鳴らしてしまった自分が、とんでもなく恥ずかしい。

おへそ辺りの絶対領域をチラチラさせながら、少女が近寄ってきた。

……正直、可愛い。こんな時に何だが、俺にとってみればAAAランクの美少女だ。

いや、違う。俺は巨乳好きだった。じゃあ非巨乳のこの娘はAAくらいか。いやいや、何を考えてる、俺！

などと不謹慎妄想タイムに突入している間に、少し前にメイにそうされたように頬に両手を添えられ、青色の綺麗な瞳が無遠慮にズイツと迫ってくる。

「な、なあ、その、マナを受け渡さなくても、二人で気を練るだかすれば良いんじゃないのか？」

「それではダメだ。お前ではムダが多すぎる。

マナを燃焼させた時に出るエネルギーは、今のお前では30%程度がやっとならう。

残りはカスになって排出されるだけだ。

だが私は、お前より遥かに効率良くマナを扱える」

「で、でもこんな、いきなりキ、キスだなんて……」

「なんだ？ 震えてるぞ、怖いのか？」

「いや、そういうワケじゃ……」

「まさかお前、“した”事ないのか？……お子様だな」

「う、うるせー！ か、関係ねーだろ、そんな事！」

……俺の脈拍は今幾つだ、300くらいいつちまったか？ ああ、くそっなんか下半身がムズムズする。俺の野生のエネルギーが目覚めそうだった。

「……アイツを、メイを救うんだろ」

はっ、そうだ、俺にはやらなきゃならない事があった。我にかえり、返事をする。

「そ、そうだ」

「なら、しっかりしろ……慶太」

彼女なりの精一杯の優しさが、俺の理性を呼び戻す。俺は……青い瞳に全てを託す、その覚悟を決めた。

……フッ、私としたことが……。面白いヤツだな、出海慶太。

お前ともっと早く出逢えていたなら、私たちは違った未来に辿り着けたかもしれない……

意味は無い。それでも私は、唇の重なる瞬間に目を閉じた。

口づけと同時に上昇気流が発生し、私と慶太の身体が光に包まれ、彼の力が流れ込んでくる。これは……想像以上の力だ。ますます面白。

慶太、もっとお前の事知りたくなつたぞ、叶わぬ願いだがな……

最低限のマナを残し、慶太からそつと離れる。……惚けた顔してるぞ、バカ慶太。

「おい、ここから出た後の事は任せるぞ」

……こ、これがキスの味……はっ、っていうか、すっげえ抜かれちまった。この異常な疲労感、キツい。でも、そうかこれが……へ、へへへ……

「おい、聞いているのか」

……はっ。

「ゴホン。な、何ですかな？」

「ここから出た後の事だ。アイツを連れて身を隠せ」

「ああそれは……いや、でもマナの揺らぎを追跡されるって言っ
てなかったか？」

「これだけ大質量のマナを駆使すれば、乱れ過ぎて逆に追跡なんて
出来ないよ。」

「そうか。で、アンタはどうするんだ、またメイの命を狙うのか？」

口づけを交わした少女は、背中で語る。

「そんな事はしないし、もう遭う事もないさ」

なんだ、なんて寂しそうな背中なんだ。さっきまでのツンツンし
た態度はどこへ行ったんだ？

しかもこれじゃなんだか、最期の別れみたいじゃないか。

「さあいくぞ」

デスサイズの覚悟がその短い言葉の中に見え隠れし、俺の心にち
よっとしたささくれを作るのを感じていた。

第七話 過去のキズ（前書き）

はい、ジャムです。今回はある程度この世界の抱える問題や、今までに何があったかなどを描く為に、猫さんが喋りまわります。先話とガラリと変わってシリアスですが、きっと楽しめると思います。では、どうぞ！

第七話 過去のキズ

デスサイズ。メイの闘争本能の人格化であり、メイを始末する事を至上命令にしていた彼女に、今の俺は命運を託すしかなかった。

この場は無力だが、ここから脱出した後にメイの身を守るという使命がある。俺は昏倒して意識の無いメイを、いつでも肩に抱えられるように体制を整えた。

それにしても……黒猫に捕まるよりはマシとはいえ、こんなに話をしたり、力を合わせたり、……キスをしたり。うっ、思い出すとまた脈拍が。落ち着け、落ち着け。

デスサイズ。彼女の存在って一体？ 本当の自分って？ メイも心の中では、昔の自分に戻りたいのか？ 本当はメイなんて、呼ばれたくないのかな……

いろんな事を考えてしまう。しかし、それもこれも、此処から脱出した後にじっくり考えればいいことだ。

「私を……いや、私達を捕まえて何をするつもりかは知らないが、お前の思うようにはならんぞ」

「へえー、随分な態度じゃないか。この魂の牢獄ソウルプリズンを破るだけのマナは集まったのかい？」

丸くなつて顔だけを起こした状態で問答する黒猫が、今度は右手で顔をコネている。

「ああ、お前の言うイレギュラーな存在が、思わぬ大器だったおかげでな」

「それはスゴい！ で、君は自分の存在の条件を理解した上で、それでもやるのかい？」

「……お前に捕まるよりはマシだからな。おしゃべりは終わりだ。さあ、たっぷり力を吸うがいい」

深呼吸する時のように、腕を少しだけ開いた状態で、目を閉じ集中を始める。

この結界内ではマナのままでも吸収されてしまうが、それでは結界の許容量に到底足りない。

それに対して、マナを燃焼させる事によって発生するマナLE（マナ消失エネルギー）であれば、その容量は数百倍に膨れ上がる。

それを吸収させて初めて、この結界を破る可能性が出てくる。慶太から多量のマナを受け取ったとはいえ、少しもムダにはならない。

「はあああ……」

体内でマナを燃焼させ、マナLEEをどんどん蓄積していく。そして全身にその力が満ちると、青いオーラが身体から立ち昇ってきた。マナLEEを純粋なエネルギーとして爆発させると、個人特有の色が出る。

私は青。どこまでもクールに、どこまでも冷静に、目的を遂行してきた私の色だ。

私のありったけのオーラを、結界がどんどん吸収していく。それは、命が削り取られていく感覚。

「くっ、持ってくれよ、私の身体——」

デスサイズの身体が綺麗な青い炎に包まれている。彼女を中心に突風が吹き荒れる。凄い圧力だ。

しかし同時に、その圧力を暗闇が吸収していく。これは我慢比べだ。俺達二人分のマナが尽きるのが先か、結界の容量が限界を迎えるのが先か。

「これは……これほどは——」

くそっ たれの猫が落ち着かない様子で立ち上がった。どうやら、

デスサイズのオーラが、結界の許容量を超えそうなんで焦ってるんだ。ざまあみやがれ、俺達をナメんなよ！

「まったく、敬意を表するよ。人間、確か慶太と言ったね。」

実際にこの結界を破るのは彼女かもしれないけど、君の潜在能力があればこそだからね」

「残念だったな。俺達はこの結界を破って身を隠す。」

「ああ、そうだね、この場合は君達の勝ちだ」

「やけに潔いな」

「今回は大チャンスだったというだけで、機会はいくらでもあるさ」

ここから出られても、終わりじゃないのか。メイはこんな事を何度も経験しているということか。怒りがこみ上げる。

「なら俺が、お前を倒してやる。メイと二人で、この鬼ごっこを終わらせてやる」

「アッハハハハハ、本当に面白いね、人間。」

お前がメイと呼んでるその女、人間に忌み嫌われているんだよ」

さっきもデスサイズがそんな事を言ってたな。

「どついう事だ？」

「その女の本当の名前は、サリエルっていうんだ」

「サ、サリエル……？」

「そう、大天使でありながら死神と呼ばれ、その瞳の魔力故に恐れられてきた存在さ。

彼女は健気にも、世界の秩序を保つ為に与えられた使命をこなしているだけののにさあ。

人間は勝手な生き物だね。救いを求めておきながら、その強すぎる力に恐怖し、敬遠し、遠ざけようとする。

その女も、相当報われない思いをしてきているはずだよ、ねえ、もう一人のサリエルさん？」

「メイが……実は大天使……」

驚きを隠せない。

——「……し、死神とか、そういうの……？」

「まあ……そう思うのが普通だろうね」——

あの会話をした時、メイはどんな顔してた？

……悲しそうだった？

淋しそうだった？

ああ、俺は出会ってすぐに、もうメイを傷つけてしまっていたのか。ちくしょう、畜生！

「ソイツの言う事は本当だ」

デスサイズがオーラを出しながら話に入ってきた。それに猫が言葉を重ねる。

「そして墮天して名前を失ったのも人間のせいだもんなあ。そんな間違つても一緒にいられない者同士が、仲良く僕を倒しに来るって？ アツハハハハハ、そんな事、あるわけないじゃない」

黒猫が奇妙な笑顔で高笑いする。

「に、人間のせいで墮天しただって？ どうして？」

「一人の娘に情けをかけたからさ。」

これもさつき似たような事を聞いたぞ。たしか……

——「愚かな……見ろ、今の地上を。お前のたった一つの過ちが、どれだけ世界を狂わせていると思っている」

「それは……しかしあの時、あの娘を見殺しにするなど私には出来なかった」——

そうだ、確かにこう言った。

「人間を助けちゃいけなかったのか？」

「そんな事はないさ。助ける助けはないは、天使の自由意志に委ねられてる。

ただその娘を助けようとして、たったひとつ、禁忌を犯した事がよくなかったのさ」

「禁忌って、何をしたんだ？」

「月の秘密だよ。人間には絶対に教えちゃいけない筈なのに、サリエルはそれを教えちゃったんだよね。

それであの娘は僕と出会っちゃったんだ。人間の欲深さを知っている筈なのに、情にほだされた為に」

「もういいだろう」

青いオーラを放つデスサイズが話を切る。

「慶太。正直私は、人間が嫌いだ。それはソイツ——メイも同じだが、心の奥底では、まだ人間を信じたい気持ちもある。だからこそメイは、お前を救ったんだ」

ドックン。

何てことだ。そんなに嫌っているのに、それでも俺を救ってくれた。見捨てて当然ともいえる俺の命を、救ってくれた。

「お、俺は……どうすればいい？ 教えてくれ！」

「お前は、お前の思うようにしろ。きっと答えが出る。」

さあ、結界が破れるぞ。メイを……頼んだぞ」

暗闇に一筋の光が走ったかと思うと、一気に暗黒が地平線の彼方に後ずさり消えていく。その暗闇に乗って、黒猫も去っていった。一言こつ残して。

「束の間の平和をお楽しみあれ」

空が白みがかったている。俺はデスサイズの最後の頼みを思い出し、メイを肩に担いで、夜明け前の寂しい道を駆け足で急いだ――

第七話 過去のキズ（後書き）

はい、如何でしたか？今回で、序章的な話はおしまいです。次話から新しい局面に向かいます。新キャラも登場です。遅筆な自分が辛い所ですが、それでも読んでくださる方がいれば、それで満足です。ではまた次話で。

第八話 平穏な日常？

——まどろみに聞こえてくる、チュンチュン、チチチと雀たちが朝の挨拶。ああ、今日もきつと晴天だ、と思いながら、床に敷いたタオルケットにくるまる——

……パタパタパタパタ、コンコン、ガチャ。

「おにいーちゃー、わっ！」

「おう、おはよう花梨」

「お、お兄ちゃん、なんでドアの真ん前に立ってるの？」

「いやあ、朝日を浴びながらのストレッチは気持ちがいいもんだなあ」

「ナニ言ってるの、全っ然浴びてないじゃん。窓はベッドの所にしか無いんだ……か……ら？」

ぐわっ、マズい！

「お兄ちゃん、ベッドに誰がいる？ ……え、女の子？」

「いやあの、こ、これはだな、ちゃんと理由があつてだな」

我が妹、花梨がドアノブから手を離し振り返る。

「おかあゝモガッ、フグオフグアッ……」

音速を超えるスピードで、妹を後ろから羽交い締めにして口を塞ぎ、部屋に連れ込む。お、俺は朝っぱらから一体何をしているんだ、チクショー！ 足でドアを閉める。

花梨に逃げられそうになるのを、左手は口を抑えたまま、右手でお腹を抑えて持ち上げて阻止する。くそっ、長い髪の毛が俺の顔をこすってムズ痒い。リンスのいい香りはするんだが。

ジタバタしたから、うさ耳スリッパが、ドアに向かってスポスポーンと飛んでいく。

「まてまてまてまて、整理するぞ。いいか、まず俺は無実だ。お兄ちゃんを信用しろ。手を離すけど騒ぐなよ。いいな？」

……コクコク。後ろからだったが、首の動きで頷いたのを確認する。俺は持ち上げていた花梨を降ろし、塞いでいた左手を離れた。

「プファアッ、ううゝっ」

なんだかよく分からん声を出しながらこちらを振り返る花梨。

「もゝいきなり何よお」

と言いながら、さっきのイザコザで出てしまった口元に光るヨダレを、右手でゴシゴシしている。

「お前こそ何だよ、朝っぱらから。ノックぐらい」

「した」

「俺は返事をしてないぞ」

「何よ、返事が無かったら開けちゃいけないの？」

ぶぐ、という吹き出しが見えるような顔をする。

「普通そうだろ」

分の悪い話をきるように、騒々しい兄妹のやりとりの中でも、懇々と眠り続けるメイの方を流し目で見える花梨。

「ジイー」

「アホな擬音語を出すな」

「……お兄ちゃんもスミに置けないんだあ」

俺とメイをじいつと見ながら続ける。

「こーゆー子が好みなの？ 可愛いね」

白々しい声で妹が逆襲してくる。

「違うって」

「ヒトミさんは知ってるのかな」

「おいおい、ヒトミさんは関係ないだろ」

「どーだか」

お茶目なつもりか知らないが、両手を開いて肩をすくめる。

「だから違うんだって。倒れてたから、安静にしないといけないだろ」

「なら普通は病院でしょ」

「う……いや、でもなんか事情とかあるかもしれないだろ」

「確かにい、ちょっと普通じゃないかも。なんかスッゴい泥だらけだし」

「だろ？ 幸い、命に別状は無いみたいだし。もう少し寝かせてあげてくれないか？」

「……？ 一瞬花梨の髪が、アンテナのようにピンと立ったように見えた。」

「そつえばあ、今日から公開の映画で観たいのがあったんだあ」

「はあ？ ナニ言ってるの？」

「お母さんが見たら、なぐんて言っかなー」

「……そついう事か。」

「分かった分かった、ちょっと待ってろ」

財布から二千円取り出し妹の胸の前に突き出す。

「ナニこれ？」

「ナニこれって、これだけあれば映画観れるだろ」

「やれやれ、と言わんばかりの顔をする花梨。」

「華の十六歳が、一人で映画なんて観れるわけないでしょお」

マジか。誰と行くのか知らないが、ソイツの分までたかるのか。

……コイツは鬼だ。

「わーったよ、ほら」

更に二千円。お前とイツコしか変わらない俺だって、小遣い制なんだぞ。くっそー。

「映画って言ったら、ポップコーンだね、コーラだね」

……めっちゃニコニコしてるし。お前は悪魔か。

「キラリン」

「だからそんな擬音語はいらん」

突き出していた四千円をしまい、五千円札を渡す。

「交渉成立、毎度あり」

くそなんてヤツだ。そしてなんて良い笑顔だ。高校生の口止め料にしては高すぎるだろ。

「かりん。お兄ちゃん起きた？」

母親の声。

「おっと、マズい！　じゃあねお兄ちゃん。ヘンな事はしちゃダメだよ？」

「するか！　早く行け！」

うさ耳スリッパを履き直し、ドアを開けて元気な声を出しながら階段を降りていく我が妹、花梨。

「お兄ちゃん、なんか今はいいって。後で食べる——んで花梨ね、やっぱ今日出掛け——」

全く騒々しいヤツだ。嵐かアイツは。

フット、溜め息を吐きながらベッドに目をやると、いつの間にかメイが目覚めて、天井を見つめていた。

「あ、起こしちゃった？　悪いね、ウルサイ妹で」

「ううは……私……」

混乱しているようだ。無理もない。あの結界で気を失って、気がつけば見知らぬ天井を見上げているのだから。

「安心しろ、ここは俺んちだ。結界も破ったし、追跡も多分免れる」

「どうやって？」

「ああ、デスサイズがな、俺のマナを受けとって——」

またキスの味を思い出し、同じ顔の少女を見て恥ずかしくなる。

「そう、デスサイズが……」

「あの後アイツはどこへ行ったんだろうな」

そういえば妙な雰囲気だった。まるで、今生の別れのような儚ささえ感じられたのだから。

メイが両手で布団を握りしめる。

「……存在の力を失って、もうこの世にはいないと思う」

「えっ？」

「アレは私という本体から出た^{アストラルボディ}星幽体の一部。

だからその力が尽きる前に本体に戻らないと、消えてしまう。例外的に、本体である私が死んでしまった時だけ、神の祝福を受けることによって、新たな本体として生存できるけど……

私はこうしてまだ生きている」

もう遭つこともない、と言ったデスサイズ。それはこの事だったのか。

「そんな……じゃあデスサイズはもう力を使い果たして、消えちゃったって言うのかよ」

メイは少し考えてから、自信なさげに話す。

「でもわからない。本当に消えてたら、もっと喪失感みたいなものがあると思うのに、それが感じられないの」

「じゃあメイが気付かないだけで、まだどこかで生きてるかもしれないって事か」

急に彼女の表情が曇る。

「どうしたんだメイ、また命を狙われる心配をしてるのか？でも、デスサイズって敵っていう感じがしなくないか？本当かどうかは分からないけど、もう狙ったりしないって言うてみたいだし」

「そうじゃないの」

「メイ？」

「やめて！」

「な、何がだよ？」

顔を窓の方に向けて表情を隠すメイ。

「…………私に名前なんて無い」

心がズキンと痛む。

——その女も、相当報われない思いをしてきてるはずだよ——

あの黒猫が言っていた意味を、顔を背けて放つたたの一言で痛感する。彼女の心の傷は…………かなり深そうだ。

第九話 平穏な日常？〜慶太とメイ、メイと花梨〜

「なあ、俺聞いたんだ、君のコト。あの黒猫に聞いたんだけど」

窓の方を向いたままの少女。耳だけはこちらを向いている……と
思いたい。

「サリエル、なんだろう？ 大天使だったなんてな。死神なんて言っ
て悪かったよ、ごめん」

顔を背けたままのメイに、一方的かもしれないが、俺の気持ちや
思っていることを伝える。

「名前を無くした理由も……聞いた。だから……人間が嫌いなのか
？」

一呼吸。俺は今、元大天使の心の痛い部分に触れようと、いや、
もう既に触れている。只の人間である俺なんかこんな話をされて
は、やはり苦痛だろうか？

だけど、デスサイズは俺に言った。メイを頼む、と。それに俺だ
って、このままメイの中のわだかまりをほったらかしにするつもり
もない。

「人間は勝手だからなあ。嫌いになるのも分かるさ。けどな、皆が
皆そうじゃないだろ。」

少し人間を知る努力をしてみないか？ 何より、俺がもつと君の
コト、知りたいんだ」

「……どうして？」

「理由が無いとダメか？」

彼女は答えない。

「気になるからだよ」

さあつと窓から入ってくる緩やかな風が、カーテンを揺らす。

「君はサリエルでもないし、大天使でもない。俺にとっちゃ、ただの命の恩人の女の子なんだ。

その命の恩人が、名無しで元居た世界に戻る事も出来ず、放浪してるなんて気になるだろ。出来るなら助けてやりたいって、思うだろ」

メイがゆっくり上半身を起こす。

「それでさっき死にかけたじゃない」

うつ、それはそうなんだが。

「私に関わった人間が、不幸になるのは嫌なの！」

「今までにもあったのか？　そういう事」

「うるさい！　私は誰とも関わらないし、だから名前も要らないの！」

メイがベッドを降りようとして、片足を床につける。今彼女をベ

ツドから降ろしてしまうと、もう留まってはくれないような気がして、俺は必死だった。

「嫌だ！ このままアンタを行かせない！」

メイの両肩を手で抑えて、見下ろす。

「どうしてそんなに付きまとってくるの!？」

「——それは分からないけど、初めてアンタの瞳を見た時から、アンタの、メイの事が——」

うつ、こ、これは……

俺を見上げる、二重の綺麗なグレーの瞳。言葉を発したなりで、半開きの口元。さらさらとその黒い長髪が流れ、耳の先がちょこんと見え隠れ。

思いつめたような表情がまた、かつ、かわいい。俺の頭の中はどっとなってるんだ？ メイの心のケアをしてやる筈だったのでは？

そして不意に、視線を下にずらすと。

ネイビー色パーカーの、赤いラインジッパーが、胸元辺りまで下りていて。俺が両肩を抱くようにしているものだから、パーカーがくばあってなってる。

彼女の育ちきっていない双子山が、半分くらいその御姿を現しになっておられた。

ワォーン！ 俺の中のウルフが、妄想の世界で満月に向かって吠える。目覚める野生。俺は、オレハ――

バシーンと左の頬に電撃的な痛みが。

無理もない。一体オレは、メイをどんなゲスな顔で見ていたのか。肩で息をしながら左手で胸を隠すその表情から、己の痴態を恥じる。

「ハアハア、お前……変態なのか？」

がーーーーん。

いいえちがいます。私は変態などではありません。ちょっと魔が差しただけです。もう一度言います。私は変態などではありません。と、心で叫びました。

すると、これは天罰なのでしょうか。私の全身という全身が、突如悲鳴をあげるかのように激痛を訴えて参ったのです。私は懺悔しました。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。実は変態です。まごうこと無き変態です。ただ周りには内緒だけです。はい、認めます。チエリー（Aのみ経験済み）なのに変態です。元とはいえ、大天使様を変態的な目で見てごめんなさい。

「ど、どうしたんだ慶太？」

「か、身体が、痛い……」

メイ様が溜め息をつかれました。

「今頃きたのか。それは……筋肉痛よ。昨日私がイーヴィルアイで暗示をかけたでしょ。」

それで肉体は、その性能をフルに使った。当然、今まで使った事の無いような筋肉までね。

だから、全身筋肉痛は当然ね」

ブルブル震えながら崩れ落ちていく俺。

「そんな……、さっきの懺悔の意味は——」

「なんだ懺悔って？」

「いや、何でもない。……ただメイ、お、俺はお前をメイと呼ぶ。これからもな——」

ここで俺の朝の記憶は途絶えたのだった。

「ルンルンルン♪ たっだいま」

お出かけ用の五センチ程ヒールのある、花のモチーフをあしらえた、薄い黄色の姫系ウェッジソール——靴底が直角三角形のような

形——サンダルから、うさ耳スリッパに履き替える。

パタパタとリビングへ進んでドアを開ける。

「いや、今日の映画は良かったなあ、見入ってポップコーン残しちゃったよ」

「って——アルエ？ お兄ちゃん朝ご飯食べてないよ？ もう四時過ぎだよ？ 朝ご飯も食べずにナニやってるのカナ？ カナカナ？」

今日は土曜日で二人とも学校は休み。お母さんは午前中からパートだけど、それも終わって、今頃ちょうど退勤したくらいカナ。そしてお父さんは単身赴任中。

つまり、お兄ちゃんは日中アノ娘と二人きりだった……？ まさかお兄ちゃん——いや、ないない。そんな度胸ないって。

ブンブンと、誰も見てないのに手を横に振ってリアクションをとる。

まあこんだけ騒がしいんだから、花梨が帰ってきてるのは分かってるだろうし、いつものノリで突撃してみますか。花梨、いつきまゝす！

パタッパタッ……花梨の存在を主張するようにワザと音を鳴らしながら、少しゆっくりめで階段を昇ってと。コンコン……コンコン。

……ふむう。音沙汰無しなら突撃しちゃうよ？

「お兄ちゃん、開けるよー？」

ガチャ。ソーツと中を覗き見る。

「お兄ちゃん、朝ご飯食べなかった……の？ って」

朝とは状況が逆転してる？ お兄ちゃんがベッドに寝ていて、アノ女の子が床にぺたっと座り込んでいた。

「あ、どうも。お兄ちゃんがお世話になってますう」

ニヤハハと取り繕うような表情で挨拶。なーんで花梨がこんな気を使わなくちゃなんないのかなあ？

「お兄ちゃん、どうかしたんですか？」

目をぱちくりさせてる女の子が、少し間をおいて話してくれた。

「慶太は全身筋肉痛みたい——です」

「へっ？ 筋肉痛うう？ ナニやってるのお兄ちゃんは」

「私を助けようとして、少し無理をしたみたい」

何そのドラマみたいな話。ウチのお兄ちゃんが？ こんなどうせまだチェリーに決まってるような、気弱な人間ですよ？

「へ、へえ、そうなんですか」

と、も一度よくその娘を見ると、朝とどうやら同じ格好をしてるみたい。相変わらず泥んこだし。

「それよりさ君。シャワーで良ければ浴びてきなよ、泥んこじゃん。お母さんはまだ買い物とかあるから、もうしばらく帰って来ないし」

「え……と……」

「ちょっと立ってみて。——うんやっぱり。
身体のサイズは花梨と同じくらいだから、服は貸してあげる」

「いや、あの」

「だいじょぶだいじょぶ！　ウチの家族ならあんま気にしないから。
ってあとはお母さんしかないけど。ささささ、こっちこっち」

後ろに回って背中を押して、バスルームにご案内。なんか分かんないけど事情があるみたいだから、ひとまず警戒を解かないとね。

第十話 憂いのデスサイズ（前書き）

どうも、ジャムです。今回は第九話から時間軸が行ったり来たりしちゃいます。けどどうか楽しんで読んでもらいたいです。

第十話 憂いのデスサイズ

「ハアッハアッ、なんとか破れたようだな。慶太、後は頼んだぞ」

コンクリートの壁にもたれかかり、白み始めた空を見上げる。

それにしても、思った以上にマナが残ったな。それだけ尋常じゃない量のマナを保有していたということが、あの人間は。素質も悪くなかった。

これでアイツの心を癒せるなら――

ふーっと長い息を吐く。

今はそんな事を考えている場合じゃない。私も消えるまでにはまだ時間がある。どこかに身を隠さないと。

疲労感の激しい身体に鞭を打つように立ち上がり、あてもなく歩き始めた。

――慶太達が結界に閉じ込められていた頃、ある男の話――

――ハアッハアッ、ハアッハアッ――

逃げる。

ここがどこかも分からないし、何から逃げているかも分からない。

都会のビル街に出来た、迷路のような路地裏を次々に抜けていく。
に、逃げ切れるか――

「ハアッハアッ、これだけ逃げれば――」

振り返って見るが、追ってくる気配は無い。も、もう大丈夫か――
――前を向く。

「うっ」

「グアア……」

黒い影の塊。身体は二メートル以上あり、犬のような顔だが、半ば崩れていて、半分ゾンビのようだ。そして骨太の腕に頑強そうな脚。カモシカのような爪先立ちの佇まい。……知らない、こんな奴見たことも聞いたこともない。

「な、なんだお前！　なんで俺を襲う！？」

「グアア……」

くっ、話にならない。何故かは分からないが、懐に入っていたハンドガンを取り出して構える。

定まらない照準を必死に合わせ、無防備に近寄ってくる黒い塊に、ぶっ放す。

パンッパンッ……パンッパンッパンッパンッ！

六発のリボルバーに込められた弾を打ち切る。が、効いてない。黒いバケモノが、容赦なく近づいてくる。

「ひ、ひいゝ！ た、助けてくれ！ 助けて」

ブシャアッ！

——更に同時刻、ある女の場合——

「いやゝっ！」

なんなの、アレ！ ここはどこなの！？

自分の街とは似ても似つかない、街並み。彼女も黒い獣人に追われていた。道を縫うようにして逃げる。

「……っ、行き止まり！」

獣人に追いつかれるっ……。彼女は必死になっていた。咄嗟に壁を蹴ると、なんと三角跳びの要領でビルの間を跳び上がった。いった。

「うそっ！？　なんで私、こんな事が出来るの？」

屋上に到達し、自分の能力に驚いていると、同じように下から黒い獣人が上がってきた。

「ひ、ひいゝ。誰か、誰か助けて！」

駆け出す。下はビル街の谷だ。だが彼女は躊躇なく地面を蹴って、隣のビルに飛び移った。しかし、つかず離れずバケモノが追ってくる。

「な、なんでよ、なんでなのよ」

彼女は完全に倒錯していた。自分に、ビルからビルへと飛び移れるくらいの能力があった事。得体のしれないバケモノに追われている事。そして何より――

「なんで誰もいないのよ!？」

背の低いビルから地面に飛び降りると、いつの間にか最初に屋上に上がったビルの足元にいた。そして目の前にバケモノが。

「グアア……」

……っ――

「いや……、いやーっ！」

――結局は彼女も逃げ切る事は出来ず、黒い獣人の餌食になってしまった――

——少し時間は流れて、明くる夜……メイが慶太の家に泊まっている、その深夜。デスサイズは残り少ない時間を、空き地の資材置き場で過ごしていた——

もうすぐか。私の存在とは一体なんだったのか……。

天界を追放され、名も失い、人間には忌み嫌われ、リリスの悪意に追われ、拳げ句の果てに自分自身とも別れてしまった。そして最期はこんな所で、靈魂マナが尽きるのを待つのみ。

……ない、ないない、何もない！私には何も、肉体すらもない！そして誰にも看取られず、いや、存在していた事すら誰の記憶にも残らず、ただ消えてしまう。私は、一体、何のために……

重ねられた足場板にもたれかかり、膝を抱える。そして自分の境遇を憂えて、より一層縮こまる。

……イヤだ、このまま誰の記憶にも残らず消えるなんて……！

唇を噛み締めてハツとする。あの感触を思い出し、指で唇をなぞる。

慶太、面白いヤツ。ああ、そういえばアイツのファーストキスの

相手は、私だっけ。あの慌てようったらなかったな。

フツツと思い出し笑い。揃えたつま先を上げたり下げたりして、慶太の事を思い出す。

アイツ、これからどうするのかな。私はもうすぐ消えるけど、私の本体——メイとは上手くやっていけるのかな。アイツの唇……あったかかったな。慶太だけは私の事、覚えててくれるかな……

「イヤだ、イヤだよ慶太……私、消えたくないよ……！」

——所変わって。時間帯は同じだがその場所は、真昼のように明るかった——

「えっ！？　ここどこ？　遊園地？　なんで私こんな所に——」

「っていうか、誰もいないの？　私ひとり？　慶ちゃんと一緒とかじゃないの？」

キョロキョロと辺りを見回す。うん、人っ子一人いない。なんかなあ、こんなトコ一人じゃなんにも面白くないよあー。

——ジャリ。

えっ、誰がいる？　すぐさま振り返る。

「グアア…」

「ひっ………！」

なに、ナンなのアレ！？　ジリジリ後ずさる。ちよっと、誰か、誰か助けてよ！

「な、何なのあなた！？　『冗談ならもう止めてよ！』」

「グアア…」

「きゃああっ！」

振り返り、駆け出す。私、どうなっちゃうの？　イヤだ、死にたくない！　慶ちゃん、助けてよ！

そのバケモノはつかず離れず追ってくる。ジワジワと追い詰めるのが趣味なの？

——ハアッハアッ……ハアッハアッ。

逃げる。何故だか遊園地の出口が見当たらない。それに、これだけ走り回っているのに、誰にも会わない。

「ハアッハアッ、何で、何で誰もいないのよ！　キャッ！」

ズダダッ。つまり転ぶ。最早足がもつれて逃げる事もかなわない。黒いゾンビ面の獣人がゆっくり近づいてくる。

「そんな……イヤッ、助けて……」

身体に対して妙に長い、骨太の腕を振りかぶって私を切り裂こうとした瞬間、ゾンビ獣人の身体が真つ二つにわれ、後ろに大きな鎌を携えた少女が立っていた。

「あ……あ……」

可憐なブルーの瞳。だが酷く辛そうな表情をしている。

「ハアハア、間に合ったか——。おいお前、頼みがある」

少女の声を聞いた時、極度の緊張感から解放され、私は意識を失い倒れてしまった。

「おいお前、しっかりしろ、おい！お——」

第十一話　メイのお泊まり日記？

——時間はまた少し巻き戻り、夕方——

——キュコツ、サアアア……。

身体の汚れを落とすのは、気持ちの良いものだ。私がまだ大天使サリエルと名乗っていた頃は、全く必要の無い行為だった。

私の身体は、ライトソープと呼ばれる目には見えない膜で覆われていて、汚れや穢れを寄せ付けられない身体だった。

けれど墮天してそのライトソープと、背中にたたえていた六枚羽根を失ってしまった事で、今の放浪の旅が始まったのだ。

《神の命令》の意味を表すサリエルという名前も失い、天界に居場所も無くなった。誰かと関わる事も無く、降りかかる火の粉を払い、日の目を見ない生活を強いられた。

——こんな私に、何故慶太や花梨はかまってくるの？ 特に慶太。あんなに感情をぶつけてくる人間は、今まで居なかった。あの娘を、ルナを除いて。

コンコン。

「ねえ、タオルと着替え、ここに置いとくからね」

花梨の声だ。小さく返事をする。

「ねえキミ、名前なんて言うの？」

返答に困る。でも答えないわけにはいかない。

「……メイ」

「メイちゃんかあ、良い名前だね。メイちゃん、お腹すいてるでしょ。」

お母さんにさっきメイちゃんの方も頼んだから、食べていつてね。じゃありビングで待ってるからね」

良い名前、か。あんなに否定したのにな。なんだか私、おかしいな。メイと呼ばれる事に慣れはじめている。それに気分も……悪くない。

キュコッ。ガラガラ。

タオルで身体に残る水滴を拭き取る。着替えは……これか。はっ？ これって……

ガチャッ――

「あ、あがったー？ うんうん、やっぱりちょうどいいサイズだね」

「えと、これって……」

「うん、パジャマだよ。今日は泊まっていくんだよね、メイちゃ

ん」

ニコニコと満面の笑みで、強引に宿泊の約束をさせられた。

「いらっしやい、メイちゃん。

たいしたご馳走はないけど、沢山食べてゆつくりしていつてね」

は、はあ、お世話になります、とても言うべきなのか？ でも無言は良くないのは分かるので、ひとまず感謝の言葉を並べた。

「あ、そういえばさっきお兄ちゃん目を覚ましたみたいなの。なんかうめいてたよ。一緒に見に行こ」

ドタドタと二人で階段をあがっていくと、慶太のうめき声がハッキリと聞こえてきた。花梨がニヤニヤしながらドアを開ける。

「お兄ちゃん、調子はどう？」

「か、花梨。あの女の子どうしたか知らない……か？ ブッ！ アイタタタ、な、なんでメイが花梨の部屋着なんか——」

それは私が聞きたい。タオル地のノースリーブのルームウェアは、締め付けもなく、肌触りも気持ち良いのだけだ。

「メイちゃんは今日はウチに泊まってくの」

「はあー？ ツタタタ……」

ねえーっ、と話を振られる。

「……そう、みたい」

「ワケ分かんねー、けどま、いつか」

爽やかにそう言う慶太。でも何故だか妙な視線を感じる。

妹のパジャマを着てる私が、そんなに珍しいのか？ パジャマというにはやけに肌の露出が多い気はするけど。下は短すぎて脚なんて殆ど出てるし。

うわ、慶太目ヂカラスゴいよ。……アレ？ 私なんか間違ってる？

「お兄ちゃん、全身筋肉痛なんだって？ どれどれ、お仕置きぢやあ〜」

「ちょ、あつ、やめやめ！ 俺が何をした〜」

「さあ〜て、何だと思う？ 一番視姦、二番視姦、三番視姦。さあどれだ？」

「ご、ごめんなさいごめんなさい！ ヒィ〜」

花梨が、慶太の身体をツンツンして遊んでいる。ぎゃあ、とか、ぐあつとか変な声を出してよがっている。ヘンな兄妹だ。……シカンを何だろう？

そんな様子を初めはボーっと見ていた私も、だんだん可笑しくなってきた。気が付けばクスクス笑っていた。そしていつの間にか、二人で慶太の経絡秘孔をつついて遊んでいた。

「みんなー、ご飯できたわよー」

「晩御飯できたって、行こ。お兄ちゃん立てる？」

情けなくうめく慶太を、二人で介助して立たせてやる。後は大丈夫っていうから、花梨と先に階段を下りる事にした。

——慶太と花梨の母親は、どうも物事を深刻に考えるような性格ではないらしい。私の事をさして詮索する事もなく、和気あいあいとした食卓を囲んだのだった——

「それでメイちゃんのお布団はどこに敷くの？ その和室でいいの？」

「花梨の部屋で寝る。お兄ちゃん布団運んでって、その様子じや無理か」

「スマン」

結局、花梨と私で和室の布団を持ってあがる事になった。

それにしても、花梨の強引さには目を見張るものがある。考えるヒマも与えてくれないくらいだ。だけど今の私には、それがあったかっただけかもしれない。

「少しはのんびりしてもらえたかな？」

「うん、今日はありがとう」

花梨の部屋に布団を敷いた後の、何気ない会話。本当はいろいろな事があるんだろうけど、何も聞かないでくれた。

感謝だ。慶太に何も聞かないように釘をさされているのかもしれないけど、それを忠実に守っているのなら、やはり花梨は素敵だ。

コンコン、ドアが鳴る。

「かりーん、風呂空いたぞー」

「はい、じゃあお風呂入ってくるね」

景気よくドアを開けて、そのまますんなり出て行くのかと思ったら、入口の所で慶太に悪態をついている。

「お兄ちゃん、姫に手を出したら承知しないよ？ とりや、とりやあ」

「やめ、やめろ。しないしない、何もしないって。まだ全然痛すぎて何もできん」

ひとしきりじゃれあった後、花梨はようやく下りていった。主人の居なくなつた部屋に、代わりに慶太が入ってきてガチャリとドアを閉める。

「おもしろい兄妹だな」

「ふー、毎日一緒にいるとそんな事言えないぞ。

ま、アイツのおかげで、家の中が明るいつていうのは分かるんだがなあ」

めったに入らない妹の部屋をさも珍しそうに見渡す慶太が、机上のファッション雑誌を手にとり、パラパラと捲りながら話し始めた。

「明日からどうするんだ？」

「これまで、特に目的がある訳じゃなかった。リリスの悪意から逃れられればそれで良かったの」

「なんでメイは狙われてるんだ？」

布団の上にぺたりと座り込み、腕組みをしてうなづいてみる。

「うーん、そういえばなんでだろう？ いつも生け捕りしようとしてるみたいだから、生きてる私に用があるんだろうけど」

「じゃありリスの悪意って何なんだ？ 目的は？」

これだけ関わってしまった慶太には、最低限の事は教えておいた方がいいのかもしれない。

「この世の一つ上の次元に、リリスという死者の魂が集まる世界があるの。」

魂はそこにしばらく滞在した後、この世で積んだ業カルマに応じて、また別次元の世界に飛ばされるんだけど、それは個体によって長さの違う旅になる。

そして旅した世界のマナを吸収した魂は、活性化して靈魂マナとなり、新しい命としてこの世に転生するの」

「いわゆる輪廻転生の話か」

「そうだね。だけど、カルマに応じて旅の長さが違うから、中には長い旅を選ばされて妬む魂もある。」

また、今この世に生きている人間に対しても、嫉妬する者もいる。それら妬みやそねみが集まって、いつしか一つの固有意思を持った者が、リリースの悪意と呼ばれるようになったの。」

「魂の暗い部分の集合体ってワケか」

「うん、多分この世に異常な執着があるんだと思う。」

だからその目的はきつと、この世に存在し続ける事だと思う。輪廻のルールを破ってでもね」

机の椅子に跨がろうとするも、痛くて断念した慶太が、机の端に寄りかかってこちらを見ながら分析する。

「その、この世に存在する方法みたいなものはあるのか？」

「この世で生きていくには二つの要素、肉体と靈魂マナが必要不可欠。」

靈魂マナは肉体に宿る事によって、この世での長期間の活動を可能にしているの」

探偵マンガにあるような、親指を顎にあて腕組みした格好で、慶太が相槌をうつ。

「魂だか靈魂マナだか知らないが、それだけじゃまあ存在は出来ないよな」

「人間はそこを勘違いしてる。靈魂マナこそが、この世に存在する為の絶対条件なの。」

マナの中でも、靈魂マナは特殊なエネルギーで、存在の力を与えるの。」

つまり靈魂マナさえあれば、肉体は無くても実体化してこの世に存在は出来るって事」

慶太は腕組みをして首を傾げている。

「例えば、人間たちの言う幽霊。」

あれは靈魂マナの存在の力だけで実体化しようとして、でも力が足りなくて希薄な存在になってしまった例よ。」

それに対して、私から分離したデスサイズやナイトメアは、はっきり実体化出来るだけの靈魂マナを持っていた。」

まああの巨人のナイトメアは、この世に出てくる時に大量の靈魂マナを消耗してしまったせいで、周りの靈魂マナを吸収したり、実体化していた自分の身体を犠牲にしたりして闘ってたけど」

「いやあ、今にして思えば、俺あんな簡単にイマージュしまくってたけど、自分の存在を犠牲にしてたのか？ アブねーな」

「慶太は大丈夫、肉体があるから。肉体はマナを生産し、貯蔵する器なの。」

肉体を持つ者はそこからマナの供給を受けて、それを生態活動に使う。消耗した分は寝食などで回復する。」

だから靈魂マナは寿命として日々少しずつ消耗していくだけなの」

「なるほど、見えてきたぞ。」

じゃあ肉体を持たない者は、全ての行動を靈魂マナで行うから、

長く存在出来ないって事か」

そのとおりと頷く。

「じゃあそのリリスの悪意は肉体が無くて、それをメイに求めてるんじゃないのか？」

ズキンッ。痛い所を突いてくるな、慶太は。俯き、躊躇いながら返答する。

「肉体は……もう持ってる」

予想外の答えだと言わんばかりの表情を見せる慶太。

「まさか……昨日結界の中で言っていた女の子？」

コクリと頷く。

「察しがいいわね、慶太。あれは私の落ち度だった」

「何があっただんだ？」

……迷ったが、首を振って拒否する。

「ごめん。それは、今はまだ……言いたくない」

「そうか、いいよ全然。悪いな、変な事聞いちゃって」

こういう時、慶太は優しい。花梨に対して思った事を、慶太にも

感じていた。

第十一話　メイのお泊まり日記？（後書き）

どうも！ジャムです。今話で初めてこのお話の設定みたいなのを少し明かしましたが、メイさんの台詞が長くなりすぎて、これでいいのかなと不安にかられながら投稿した次第です。

もし疑問質問ありましたらなんでもお知らせください。答えられる事には答えます！

さて、次回から急転直下！遅筆なのがイタいですが、がんばりますのでもしよかったらこの作品に付き合って頂けたら最高です。ではでは。

第十二話 花梨、悪夢への誘い

パタパタ……

おっと、花梨だ。あいつの足音はすぐ分かる。なんでフワフワ素材のスリッパ履いててあんなに騒々しいんだ。

ガチャ、パタン。

「おっとつと、いいふいんきだったスカ？」

何言っただこいつは。オッサンかよ。しかもフニキだったの。何故だか変換出来ないとか言っなの？

「いや、別に」

花梨の気配で自然と会話が打ち切られ、結局明日からどうするのが決められないまま、話すきっかけを失ってしまった。

「ところでお兄ちゃん」

ん？ なんだ急に。

「明日の夕方までだよ」

「何が？」

「メイちゃんを匿えるのが」

「お前、何でソレ——」

「そりゃあ分かるでしょ。どういう関係かは聞かないケド」

まあ普通気付くか。家出人かなんかだと思ってるのか？ さすがに墮天使だとは思うまい。

しかしマズいな。まさにそれを相談しようとしていた所だったんだが。さてどうするか——

「心配ない、明日には帰るから」

メイ？ 帰るってドコへ？ 思わず突っ込みそうになった自分を押し殺し、相槌をうつ。

「ああ、そうなんだ。まあ今日だけは宜しく頼むよ」

とはいうものの、明日からどうするつもりなんだ、メイは。っていうか、今までどんな生活してきてんだ？ 興味というか、疑問は尽きない。

例えば食事。どこでどうやって食べてたのかも気になるが、今日の夕飯で出てたおみおつけのたくあん。

横でカリコリカリコリうるせーよ、主食じゃねーだろ。好物なのか？ そればっか食いやがって。

——などと考えている間に、二人の美女？ にいろんな所をツンツンされ、俺は幸福の絶頂を迎えたかのような声をあげるのだった。

「お前らもう勘弁してください」

「だって、面白いんだもん」

「チキショー、アッー」

——やがて夜も更けていき。明日からの不安を抱えつつも、今日の所はどうしようも無いので、自分の部屋に戻って眠ることにした。

——その深夜。

ゴトリ。

んん、遠くの方で物音がする。何だ、何の音だ？

ゴン、ゴン。

だんだん目が覚めてきたので、音の出どころを探った。花梨の部屋からだ。なにやってんだ。

ドシンと一際大きな音。

「ったく、何やってんだよ、ベッドから落ちたのか？」

まだビキビキ痛む体に鞭を打って起き上がり、花梨の部屋に向かう。

コンコン。返事はない。

「おい、どうしたんだー？ 開けるぞ」

こんな時間に妹の部屋に入るなんて、倫理的に大丈夫なのか？ などといらぬ心配をしながら中に入る。

「なんだ、メイ起きてるじゃないか」

床に敷いた布団に寝ている花梨の手を握って、メイが座り込んでいた。しかしすぐに異変に気が付いた。

花梨が苦しそうな様子で、尋常じゃない汗をかいている。な、なんだ、急病か？ メイに聞いてみる。

「花梨どうしたんだ？」

だがメイは何も応えてくれない。イラッとしながらもう一度聞くが、やはり無反応。俯いている顔を覗き込んでみると、目を瞑っていた。なんだ寝てんのか。

メイの肩を掴んで揺すつてやると、力無く床に倒れ込んだ。……え、これでも起きないのか？

今度は花梨の名を呼び掛けながら体を揺すつてやる。が、花梨もやはり起きない。なんでだ。しかも何かに取り憑かれたようにブルブル震えている。

「くそつ、お前らどうしたんだよ」

なす術もない。一体、メイと花梨に何が起きてるんだ。

途方に暮れていると、突如メイの身体が跳ね上がり、ガクガク痙攣した。

「おい、メイどうしたんだ、何が起きてる!」

——ゴブツ。

「なつ、何だよこれ? ……血?」

メイの口が赤く染まる。

おいおい、待てよ。これって……まさか、襲われてるんじゃないのか? じゃあ、花梨もか!

いや、部屋に入った時の状況から察するに、異変に気付いたメイが、花梨を助けようとして、何かしらやっている最中なんだろう。しかしどうもマズい事になっている気がする。

俺はイマージュリングを取りに、一度自分の部屋へ戻った。間違いない、これはリリスの悪意だ。もう見つかったのか?

しかし……くそつ。メイの奴、俺の事置いてきばりかよ。机の引き出しから取り出した指輪を握りしめ、ゴッソんと思わず机を殴る。

俺を危険な目に合わせない為なんだろうが、余計なお世話だ。確かに俺は普通の人間で、普通の高校生だ。昨日の闘いではビビって役に立たなかった事も認める。……だけど、男だ。

元大天使だかなんだか知らないが、なんで一人で解決しようとするんだ。それに花梨は俺の、憎たらしいけどたった一人の妹なんだ。

その妹のピンチに、指をくわえて待っているなんて、そんなこと出来るはずがない。

怒りとも焦りとも、自分でもよく分からない感情が入り混じり、俺の心をかき乱す。

だが思考を止めるわけにはいかない。こうしている間にも、二人に命の危機が迫っているかもしれないのだから。

イマージュリングを左の人差し指に嵌める。幾何学模様のプレートが指に巻き付き、毛細血管からマナを吸い上げていく。俺の準備はコレだけだ。

自分の部屋を出てまず一階に下り、バスルームの棚に積み上げられたハンドタオルを一掴み。それから花梨の部屋に戻る。

状況は相変わらずで。花梨は震えながら、時々うめいている。

さつき持ってきたタオルでメイの口元を、そして花梨の額や首筋の汗を拭ってやる。メイと色違いのルームウェアは、絞れるんじゃないかってくらい花梨の汗を吸ってビショビショだ。だがさすがにそれを換えてやる事は出来ない。

今はメイに全てを託すしかない。自分の大事なものの命運を、他人に任せるしかないこの状況。花梨に何かあったら許さないからな頼むぞ――。

「アルエ？　ここ……学校？　なあーんで花梨こんなトコにいるのかなあ？」

ここは花梨とお兄ちゃんの通ってる、私立彩美高校の正門前。今日学校あったつけ？　制服まで着ちゃって。……そう、花梨はこの制服が着たくてこの高校を選んだんだ。

黒地に赤と白の織りなすタータンチェックのプリーツスカートにネクタイ。シャツの袖もスカートと同じ柄で絞られている。

右胸には彩美の校章バッジ。ソックスは“高校生らしいもの”であれればいい。

花梨は紺のハイソがお気に入りだ。勿論指定の物もあるけど、リボンやフリルみたいなワンポイントって大事だよな。

っと、話が飛んじやった。さてと、どうしようかな。やけに静かだけど門は開いてるし。なんかよく分かんないけど誰かいるかもし

れないし、教室にでも行ってみようか。

正門をくぐり中央通路を突っ切って、真っ直ぐ校舎を目指すことにした。

——でも。その時正門が誰の手も借りず独りでに閉まった事に、花梨は気付かなかった。

——ガラッ。

「ニヤロハ、って誰もいないじゃん」

なんだろうねこの静けさは。まあ靴箱見て分かったケドさ。
教室の窓をひとつ開けて、グランドの様子を伺ってみる。

「やっぱり誰もいませんぜアニキ」

あ、こういう一人の時ってついつい独り言言っちゃうんだよね。
ん、部活もやってなさそうだし、今日の花梨は一体どうしちゃったんでしょおか。もう帰ろっか。

——窓を閉めて教室を出る。廊下を通って靴箱へ。

「はあ、ヘンな一日だなあ」

また独り言。一人でもうるさいって、ある意味才能だね。

上靴を脱いでローファーに履き替える。靴の踵を指でつまんで足をねじ込む。

つま先をトントンとして足が落ち着く所に入った瞬間。日常では絶対聞かないような声を耳にした。

「グアア……」

ビクッ。何よもう、花梨はそういう音で脅かす系は苦手なんだから。

昨日映画館でも、全然ビビるところじゃない所でビクッになって、友達に笑われたんだからね。

と、一瞬にして心で喋った後前を向く。そこには見た事もないバケモノが。

「キッ、キャアーッ！」

脊髓反射で校舎の中に逃げ込む。ソイツは玄関に立ちふさがっていたからだ。

な、なによなによなによ、アレ何なのよ!? 顔がいつちやってるし。二足歩行だけど事故った犬の亡霊? だったら花梨は関係ないよう〜。

同じ階にいるのも気持ち悪いと無意識に感じたんだろうか。迷いなく階段を駆け上がり二年生の校舎へ。

チラッと振り返って見ると、一定の距離をとって追いかけてくるのが見えた。

イヤッ！ 誰か、誰か助けて！ なんで花梨がこんな目に合わなくちゃいけないの？ なんも悪い事してないよ！

二年生の校舎を突っ切ってまた階段が見えてきた。今度は一階へ。そのまま玄関を目指す。相変わらず、つかず離れずの距離でバケモノがついて来ている。

こんな誰もいない学校なんかにはいけない。とにかく、誰かがいる所に逃げなきゃ。

玄関を突っ切り、五段ほどあるコンクリの階段をひとつ飛び。転びそうになるのを必死で堪える。後は正門まで一直線。

せ、正門閉まってる。でも関係ない、例え鍵がかかっていたとしても、乗り越えればいい。

正門が近づく。頭の中で、どこに足をかけてどこに掴まるべきかシミュレートする。決まった。いくぞ、それっ。

正門の決めた場所に足をかけようとした瞬間、見えない何かにグニャンとぶつかり、弾きとばされてしりもちをついた。

「……ッタッ。なによコレ？ まさか出られないの？」

門の外を伺おうとして、今気付く。正門の外の風景が無い。グレーがかったモヤみたいなもので視界が遮られている。

「そんな……、これじゃどこにも行けないじゃない!」

来た道を振り返る。バケモノが狩りを愉しむようにゆっくり近づいてくる。

これでは、グランドの方にしか逃げ場がない。選択肢の無い逃走経路を行くしかないなんて。

……ヒック。涙出てきた。ここから先はどうすればいいの? この、グランドという名の袋小路で!

「お父さん、お母さん助けて! お兄ちゃん、助けてよーッ!」

——とうとう追い詰められてしまった。花梨の人生、これで終わりなの? こんな死に方、イヤだ!

「グアア……」

うう、バケモノがスローモーションのように迫ってくる。そしてついに目の前まで来て。鋭く尖った爪を持つその腕を振りかぶった。

ああ、こんな死に方、花梨は望んじやいなかった——

「はあーっ」

聞き覚えのある声と共に、誰かがそのバケモノに飛び蹴りを喰らわせた。ズザザーっと吹っ飛んでいく。

なに、救世主? 誰が助けてくれたの?

「ギリギリ間に合ったわね」

それは、知り合ってたった一日しかないメイちゃんだった。

「メイちゃん！」

第十三話 メイ@花梨ノ中

うるつ。涙目。

「メイちゃんメイちゃんメイちゃん！」

どばーっ。号泣。

「怖^こかったよー」

メイちゃんを思い切りハグ。ひしっ。ああ、シャンプーのいい匂い。

「花梨。もう大丈夫、ここは私に任せて」

た、頼もしー。惚れちゃうよ、惚れちゃうよメイちゃん。

「ありがとう、メイちゃん。だけど、パジャマで来たの？」

「え？ ああこれは、服を選^えんでるヒマが無^なくって」

そんなに花梨の事が心配で、大急ぎで来てくれたんだ。ホント、ありがとう。

「すぐ終わらせるから、ちょっと下がってて」

「うん」

んーと、あ、あそこがいいな。グランドの端の方に植えられている、ポプラの木。ここならだいじょぶかな。……メイちゃん、がんばって。

「ゲアア……」

ゾンビっぽい犬面の獣人が、標的を私に代えたようだ。それでいい。

昨日の今日で身体に少しダルさを感じるが、やる気は充分だ。

唸り声をあげる獣人が、カモシカのような脚に力を込めるのを気配で感じ取る。

「一瞬で決めてあげるわ」

両手にマナを集中させる。左の握り拳を肩口にもっていき、その上に右の拳を親指同士が合わさるように重ねる。

思念を送りイマージュする。右拳の中に日本刀の柄が生まれる。右拳を少し上に動かすと、その分だけ美しい波模様の片刃が現れた。

「ほえー、メイちゃんまほーつかいなのか？」

花梨がポプラの陰で目を白黒させている。……これを説明するのは面倒だな。慶太に任せよう。

視線を獣人に戻し、前かがみになって居合いの構えをとる。

——刹那。獣人がその脚に溜め込んだ力を解放し、地面を蹴る。
一気に詰め寄り、私の右肩にその犬歯を突き立ててくる。

「……遅い」

獣人は私の居た場所に立ち尽くし、その頭で理解する事もなく胴と脚を切り離されていた。

獣人の踏み込みよりも早く居合いの一太刀。後は噛みつきを流れるようにかわすのみ。獣人の身体が大地に落ちる。

「すっ……」

花梨の驚嘆が聞こえる。終わった。さあ花梨を連れてこの悪夢から抜け出そう。そう思った矢先。

「メイちゃん後ろ！」

なんだ？ バツと振り向く。

バラバラになった獣人の身体が、アメーバのようにそれぞれ復元し、二人になって立ち上がってきた。

「そんな。まさか……浄化出来なくなってる？」

墮天する時に神から受けた、魂の浄化の禁止命令。それはやって

はいけないという、ある種の努力目標だった。

事実、これまではその気になれば浄化出来ていたんだ。

あの時、デスサイズの方に浄化能力は全部いつてしまったというわけか。

「くっ、ならどうする」

浄化能力がなくてもヤツを倒す方法は……

日本刀のイメージを解いて、静かに仁王立ち。

体内のmanaを右手に集め、燃焼させる。純粹なmana（mana消失エネルギー）には、個人特有の色が出る。私の右手は、燃えるような“朱”に染まった。

獣人が鋭い爪を突き立てようと突進してきた。

「遅いって言うてんでしょ！」

右の手刀を難なくかわし、懐に入り込む。

「でやあ！」

炎の拳を獣人のみぞおちに一撃。全身が炎に包まれ吹っ飛んでいく。そして爆発して、弾け飛んだ。

「なにナニ何なの？ 素敵、メイちゃん素敵！ カッコ良すぎるよ」

「この方法は、常に消耗し続けるから、効率が悪いのが難点ね」

「ナニその説明台詞。それもカツコイイ！ 痺れる。」

その調子で、もう一匹もやっちゃえー！

それっ、ドカバキゴスーッ」

……視界の端の方で、花梨がなにやら擬音語と共にシャドーボクシングしている。気が散るんだけどな……、まあ言わないでおくけど。

目線を残った獣人に向ける。がむしゃらに突っ込んでくると思っていたが、そうはしてこなかった。突如空に向かって遠吠えを始めたのだ。

——すると、地面に幾つもの黒い斑点が生まれ、そこから獣人が次々と姿を現した。

「これは……、数が多いな……」

その数は十や二十じゃない。浄化能力を失った今の私に、どれだけやれるのか。私のマナは“もつ”のか……？

「ひええええ、怖いよ怖いよ、こんなのないよ、神様助けてください！ うつつ……」

手を懸命に摺り合わせる花梨。……ウルサイな、まあ言わないけど。

「やるしかない、か」

マナレEを全身に巡らせ、朱の炎を身にまとう。

先手必勝、獣人の群れに飛び込む。神速は無くても、コイツらを圧倒するだけのスピードは持ち合わせている。

一番手近な奴に一撃。まず一匹。間髪入れずに次の標的へ。二、三、四。次々に炎の拳を喰らわせ消し飛ばす。

獣人もその妙に長い、腕の先端の鋭い爪で引っ搔こうとしたり、噛みついてきたり、体当たりしてきたりするが、遠慮の無い本気の私の前には、まるで当たらない。

「メイちゃん……。スゴい、スゴいスゴい！」

まるで踊ってるみたい。それっ、そこだっ、良し、いつけっ！」

さっきまで神頼みしていた花梨——私の前で神頼みとは複雑な気分だけど——が、テンションを巻き戻し、ノリノリでシャドーボクシングしている。

……花梨、少しは静かに出来ないの？ まあ……言わないけど。

——消耗戦。迫り来る獣人たち。十五、十六、十七。炎をまとった突きや蹴りを次々に繰り出す。ノッてきた。こうなるともう止まらない。やられる気がしない。

「キャアー！」

ハイテンションに水を差すように、叫び声が聞こえた。

「花梨！」

見れば、獣人が一体花梨に迫っていた。

目の前の二体を右ストレートと後ろ回し蹴りで消し飛ばし、花梨の方へ急ぐ。

「間に合わない……。花梨！」

獣人が花梨の目の前まで近づいている。

「うう、ヤダヤダヤダ！ それ以上こっちに来ないで。来ないでったら！」

それ以上来たら泣くよ？ 泣いちゃうよ？」

花梨の願いとは裏腹に、獣人が無慈悲な声をあげて襲い掛かる。

「グオオオ！」

『イヤーーーーッ！！！』

ビリビリッ――

あまりの大声量に、獣人の動きが数秒止まった。その瞬間を逃さず、炎の拳を放って花梨に迫る獣人を蹴散らす。

「……っ、なんて声。大気が揺れたわ」

耳が痛いし、目も一瞬霞んだ。身体にマナが満ちていないと、声

にここまで力は乗せられまい。

花梨……ただうるさいだけじゃないんだ。全く、心底“元気”なんだな。

「あ、ありがとう、メイちゃん」

「花梨。目立ちすぎよ。少しおとなしくしてて」

「ごめん、ちょっとコーフンしちゃって」

……やれやれ。

「でも、花梨らしいな」

「でしょー?」

「「……ぷつ。あはははははは」」

顔を見合わせて笑いあう。花梨、なんて面白い子。慶太といい、こんな面白い兄妹は初めてだ。

——守らなきゃ、この笑顔を。

気合いを入れ直し、獣人の群れに立ち向かう。

ドクン……

ドクン……

突然、大気に波紋が広がる。

「まさか！」

「なにナニ、今度はなにによぉ」

花梨が不安げに辺りをキョロキョロ見回している。

突如、中空に撞球大の黒い球が現れ、一人の獣人の手に降り立った。

その獣人が球を呑み込むと、身体に亀裂が入って内側から身体が破られた。

そして中から現れたのは、黒よりも黒い影だった。

「ナイトメア……か」

その影から獣人に対して引力が働き、吸い寄せられていく。

引力に引かれた獣人たちが、次々に影に重なっていく。

「——吸収している。アイツ、獣人たちの力を利用して姿を現すつもりだ」

「ひいひいひい、神さまごめんなさい！」

一年生の時、オネシヨして濡れた布団をこっそりお兄ちゃんのと交換しました。

おやつをお兄ちゃんと半分こって言いながら多めに取っていたのも花梨です。

「ごめんなさいごめんなさい、反省しますから、悪い夢なら早く覚めてください〜！」

必死の懺悔。花梨……お前は絶対死なない気がするよ。っていうか慶太ちよつと可哀想。

残っていた数十匹の獣人たちを全て吸収したナイトメアが、その姿を現す。

銀色の体毛に覆われた強靱な四肢。目は血走り、赤く煮えたぎっている。それはトレーラーのようなデカさの魔獣だった。

「サリエルか、これは大物がかかったな」

「喋った！ 狼みたいのが喋った！」

魔獣がチラツと花梨を見た後、私に話しかけてきた。

「なんだサリエル、えらくお疲れの様子じゃないか。そんな弱った身体でこのオレと闘えるのか？」

「やってみなくちゃ判らないでしょ」

拳を握り戦闘体制をとる。

「強気だな、なら思い切り来い」

「言われなくても思い切りいくわよ、はあああ〜！」

身体中のマナを振り絞り、朱のオーラを身にまとう。

突撃。飛び上がり魔獣の顔面に炎の拳を見舞おうとする。が、巨大なその前脚で軽く弾き飛ばされてしまう。

両腕をクロスさせてガードし、クルツと空中で体勢を立て直して着地。その反動を利用してもう一度低空で飛び込む。

今度は魔獣の足下まで距離を詰め、二択を迫る。顎か腹部か。更に加速し腹の下に潜り込む。

「破ッ！」

身体を仰向けに反転させて、炎の拳を撃ち込む。手応えはあるが、それに反して魔獣にダメージは感じられない。

くそっ、こんな体勢じゃてんで効きやしないか。

殴った反動で地面に背中が付く間際に宙返りして着地して、より強く大地を蹴りもう一撃喰らわせる。それを右に寝転がってかわす魔獣。

あっ、と思った時には、魔獣の鞭のようにしなる巨大な尻尾が目の前にあった。

「んぐっ」

右側面を激しく打ち付けられ、地面に叩きつけられる。だが受け身だけは取り、余計なダメージは避ける。

「メイちゃん!!」

……っ！ 気付いた時には、魔獣が巨大な口をあんぐりと開けて、今にも喰われそうな距離に迫ってきていた。

「ぐっぐっぐっ！」

咄嗟に右手のマナLEEを朱色のエネルギー弾として、魔獣に放つ。

「ふんっ！」

魔獣はエネルギー弾を自らの歯で噛み砕く。口の隙間から煙のような物が漏れた。

……魔獣に僅かな油断が見えた。一瞬のスキについて、顎の下から思い切り飛び上がり下顎に身体全体でアッパーカット。

「ガフッ」

強制的に上を向かされる魔獣。

「やった！ メイちゃん！！」

花梨の声と共に手応えを感じたのも束の間、つぶっていた目を見開いて宙にいる私を睨み付け、その巨体で体当たりしてきた。

「くぁっ！」

もの凄い横のベクトルに、身体を操作出来ない。受け身も取れないまま吹っ飛び、校舎の壁に激突する。

「メイちゃん!!」

——ガラガラッ。

「メイちゃん大丈夫!？」

両手を地につけ、四つん這いの格好になる。

「ハアッハアッ……ゴフッ」

たまらず吐血してしまう。

「……! メイちゃん……」

両手で口を押さえる花梨。……ダメだ、花梨が不安がる。氣力を振り絞り立ち上がってみせる。

「なかなかいい動きだ、流石だな、サリエル。
だがもう息があがっているぞ」

はあっ……はあっ……

くそっ、力が……力が足りない……。マナの回復が、全然遅い。

肉体とアストラルボディのシンクロがうまくいってないせいかな……。分裂した影響がここまで大きいとは。

このままではマズい、花梨を守れない。一体どうすれば——

第十四話 妹思いの兄貴

巨大な魔獣が、居丈高にけなしてくる。

「動きはなかなかだが、弱い。弱すぎるぞ。貴様、本当にあのサリエルなのか？」

花梨が図々しく割り込んでくる。

「やっぱりメイちゃんの事なんだ、サリエルって。知り合いなの？あのデッカいワンちゃんと」

「……違う」

「違うのかよ！」

「私の名前は、サリエルなんかじゃない」

「ああ、そっちね」

さつき大人しくしてて言った筈なのに、やっぱりウルサイ雑草魂。まあそれも花梨の魅力か。

「私は――」

――墮天して名を失ってから、誰とも関わらなかった。関わろうともしなかった。

それが、たった一日。そう、たった一日だ。

それだけの僅かな時間で、慶太と共に闘い、四人で食卓を囲み、花梨とがーるずとーくなるものに華を咲かせた。

慶太の優しさに花梨の人懐っこさ。二人の母の手料理も凄くおいしかった。

私の荒んだ心に、少しばかりの光を照らしてくれる人間たち。その彼らが、私をこう呼ぶ。それを拒む理由は……無い。

「——メイ。私の名前は、メイだ！」

「ふん、メイだと？ くだらん、くだらんなあ。
弱い貴様などに用は無い。

このオレを——ベオウルフ様を本気にさせる事の出来る者は、もういないのか」

ベオウルフ——なるほどコイツ、こういう性格か。

「ベオウルフ、お前は強い者と闘いたいのか」

「そうだ、それこそがオレの望み！」

「……知ってるぞ、強いヤツ」

「なにい、そんな奴がいるのか？」

「そいつはすぐ近くにいます。なんなら連れてきてやろうか？」

興味津々の魔獣ベオウルフ。値踏みするように私の話を吟味して

いるようだったが、答えが出たようだ。

「いいだろう、連れてこい。言うまでもない事だが、その女は人質だ」

「分かってる」

花梨はキョロキョロと辺りを見回した後、ブンブンと手を横に振ってアピールしている。

きつと、

「……え？ その女って誰かな？ メイちゃんじゃないとしたら、花梨……だよな、やっぱり」

などと考えているんだろう。

「ヤ、ヤダヤダヤダ、こんなトコに花梨を置いてきぼりにしないで〜！」

花梨が不安がるのも無理はない。ただどこで残って闘い続ける方が、遥かに危険なんだ。それを花梨に伝える。

「花梨。悔しいけれど、今の弱った私じゃアイツには勝てない。私は捕まり、お前は殺されるだろう」

「ぞんなく、だからって一人はヤダよ〜！」

花梨の側まで移動し、彼女の肩を抱く。そして涙目で駄々をこね

る彼女に、落ち着かせるように語りかける。

「よく聞いて。アイツは花梨に手出ししないから安心して」

「どうしてそんな事が分かるの？」

「この世界は、花梨の精神から創られた世界なの。

だから花梨を消してしまうと、この世界も消えてしまう。

それではベオウルフも、私との接点を失ってしまうから、私を待つ間は何も出来ないってワケ」

「花梨の精神が創った世界？」

魔獣ベオウルフはその説明をお座りの状態で聞いていた。なんだかわい……くはない。

「今はこれだけしか言えないけど、必ず戻ってくる。

そしてアイツを倒して花梨を助ける。だから、信じて」

恐怖と不安はあるだろうが、花梨はその持ち前の切り換えの早さで、納得してくれたようだった。

「……絶対だよ、メイちゃん、絶対に帰って来てよ」

——コクリと力強く頷いてみせる。

「説得は済んだか。なら早く行け」

「じゃあ、行ってくる」

この世に戻る為に、来る時に使った《穴》を目指して校舎の中に入る。それは一年二組——花梨の教室らしい——にあった。

教室には一見何の変化も無いように見えるのだが、黒板の前に立ち瞳を閉じて唱える。

コネクト
「連結」

すると、空気が肌を撫で、黒髪がサラサラと流れるのを感じた。

フツ……と目を開けると、黒板に直径二メートル程の穴が開いていて、ゆらゆらと揺れながら、来る者を待ち構えていた。

迷わず飛び込む。——花梨、待ってて。必ず戻ってくるから。

「……っはあっ、ゲホッ、ゲホッ」

「メイ！」

不意にメイが目を覚ました。良かった、血反吐を吐いた時はどうなるのか心配したぞ。

「……はっ……あ……、慶太……気付いてたの」

「ああ、それよりメイだけなのか？ 花梨の意識は戻ってくるのか？」

目線を床に落とすメイ。だがすぐに顔を上げ、俺に成り行きを話し始めた。

「花梨は今、自分の精神が創り出した世界、小リリスに捕らわれているの」

「小リリス？」

リリスの事なら昨日聞いた。確か死後の魂が一端集まる場所、だったな。でも小リリスって何だ？

「簡単に言うと、夢の中の世界の事よ」

夢の世界？ 自分の夢から覚めないっていつのか。この眠り姫は。

「夢は個人的無意識の創り出す幻想の世界。

それは普通、自分の深層心理が反映されるだけのものだけど、たまに自分以外の者と波長があって、リンクしてしまう時があるの」

「他人の夢にリンクするとどうなるんだ？」

「夢の世界を共有する事になる」

「要は花梨の夢の中に、誰か他の奴が入り込んで来たって事か」

「うん。その入って来たのが……ナイトメアだった」

「なっ……」

汗が体中から吹き出す。あんな恐ろしい奴が夢の中に出てきて、花梨を襲っているっていうのか。

「なんでお前だけ帰って来てんだよ、花梨は、花梨は！」

俺は無意識に詰め寄り、語気を荒げていた。

「ちよっ、ちよっと落ち着いて！」

「これが落ち着いていられるかよ！」

メイに頬をはたかれるまで、俺は自分の気が動転していた事に気付かないでいた。

「あ……すまない、俺」

「慶太、大丈夫。花梨は無事だから」

呼吸を落ち着かせ、冷静にメイの話を聞こうとする。

「そうだな、メイは花梨を助ける為に戻って来たんだろ？
今度は俺も行くぞ」

「私こそ、慶太を置いてきぼりにしてごめん」

「いいんだ、それよりこうしちゃいられないだろ。
花梨の夢、小リリスだったか。にはどうやって行くんだ？」

恐怖は無かった。それよりも花梨が心配だった。普段はチャラけるが、ああ見えて怖がりな所がある。

心霊現象を扱ったテレビ特番の後なんか、トイレについてかなくちやなんないし、俺の部屋で一緒に寝た事もあるくらいだ。勿論布団は別だぞ。

——コンコン。

カチャツと少しドアが開き、上目遣いの妹が顔を覗かせる。

「お兄ちゃん、今日……一緒に寝ていい？」

……ぼりぼりと頭を掻く俺。

「お前なあ、そんなに怖いなら見るなよ」

「だあって、見ちゃうんだもん」

「——はあ、電気点けて寝ろよ」

「花梨は明るいと寝れないの」

「母さんと寝れば？」

「ぶっ、お兄ちゃんがいいの」

「おいおい、それは問題発言じゃないのか」

「昔は一緒に寝てたじゃんか」

俺も別に妹が嫌いなワケじゃない。性的な意味で（嘘）。花梨が望むなら、一緒に寝たって構わない。性的な意味で（大嘘）。一応言つとくが別に変な意味じゃないぞ。

……まあ、苛めるのはコレくらいにしておくか。

ドアを閉められまいと、持ってきた枕を部屋にねじ込んだ状態で懇願する妹。

やれやれという顔をしながら招き入れてやる。

「うわあいっ」

……ふっ、ういヤツよのう。

「ところで花梨、枕だけか？ 布団は？」

「お兄ちゃんは床で寝てね」

なっ……。

「それとも……一緒にネンネするう？」

お前というやつは……

「お前が一番恐いわ」

「へへへ、お休み」

そんな花梨が、独りきりでナイトメアの世界に閉じ込められているなんて。兄貴としての使命感に俺は燃えていた。

「慶太、そこに座って。まず慶太の身体から靈魂マナを抜くから、気を楽しにして」

うお、闘う覚悟は出来てるけど、流石にちょっとビビるぜ。魂を抜くってどんな感じなんだ。

メイが俺の背後に立つ。俺からは何をしようとしているのか見えないが、背中にメイの両手の温もりを感じた。——次の瞬間。

トン、と背中を押されたかと思うと、視界が揺らいでフッと身体が軽くなった。

「なんか身体が軽い。さっきまで感じてた筋肉痛も無くなったぞ」

「慶太、よく見て」

その言葉に振り返ると、俺がもう一人そこにいた。

いや……今俺の目の前に見えているのが、本来の“俺”だ。じゃあ今動いてるこの“俺”は魂……なのか？

「こ、この動いてる今の俺が靈魂マナなのか？」

「正確には、靈魂マナが慶太の形をとった《アストラルバディ》よ」

そう言つて、メイが部屋の壁にもたれて座り込み、今度は自分自身のアストラルバディを抜き出した。

うおー、これこそ摩訶不思議な感覚だ、メイが二人いるよ。

壁にへたり込んだメイは、まるでプライズの景品のようだ。っと、そんな事考えてる場合じゃないか。

「次は？ どうするんだ？」

「花梨のシルバーコードを捜してそれを辿って行くの」

「シルバーコード？」

「肉体と靈魂マナはシルバーコードで繋がってるから」

ふーん、なんか肉体と魂は玉の緒で繋がってる、みたいなのを聞いた事がある気がするが、そんな感じかな？

「捜すって身体から銀色のコードなんて出るものなのか？」

「慶太、名前に騙されないで。意味を捉えるの」

「意味って？」

「どういう事だ？ シルバーコードの意味？ 肉体と靈魂マナを繋ぐ物？ それを辿る？」

「そう、肉体のある場所から靈魂マナのある場所までを繋ぐ物。それはトンネルみたいなものよ」

「でもトンネルなんて身体に開けられないだろ」

「出入り口は、その人の縁のある場所や物に出来るものなの」

「じゃあ、この部屋の何処かに入り口があるってのか？」

「そう。ただどこかで一つ問題がある。

私は力が弱り過ぎて慶太を向こうに連れていけない。

だから、慶太自身が入り口を見つけて、自分の意志でアストラルダイヴしなきゃいけないの」

キヨロキヨロと花梨の部屋を注意深く探る。——んん、一力所だけ違和感のある場所があった。しかしここは——

「入り口はなんとなく分かった気がする……ケド」

「じゃあそこに立って。精神を集中させて連結^{コネクト}って唱えてみて」

俺の思う場所に取り敢えず立つ。花梨の机の前だ。しかし本当に此処なのか？ そこは、超有名ロボット所有のタ。ムマ。ンの入り

口だぞ。

「——コネクト」

意を決して詠唱すると、空気の流れに変化が起きたのを感じた。

……スーツと机の引き出しを開けると、いかにも亜空間です的な歪みを伴った穴があった。

「マジかよ」

「やっぱりセンスというか、耐性があるわね。」

普通はもつと慣れないと見つけれないし、見つけてもコードが安定しないもののな。

あとはそこに飛び込めば勝手に花梨の夢の世界まで連れて行ってくれる」

まあ、勉強机のある部屋で異次元の入り口はドコだって聞かれたら、大概の現代人はここを思い浮かべると思うが、黙っておく。

センスがないとコードが安定しないとも言ってるし。

「じゃあ、いいか？」

「私も慶太の開いたコードから飛び込むから。」

コードを開いた者が向こうでの主導権を握るって事、覚えておいて」

「分かった、じゃあ……いくぞ。絶対花梨を連れて帰るんだ」

——頷きあい、俺たちは机の引き出しに出来たシルバーコードに

飛び込んだ。

第十五話 アストラルダイヴ／花梨の世界／

——不思議な感覚。身体は乳白色に染まっていて、何処から何処までが自分の輪郭か分からない。

すぐ後ろをメイが、俺と同じように乳白色の帯を引きながらついて来る。

「なんかヘンな感じだな」

「沈まない川に身体を預けてる感覚でしょ」

なかなか上手い事言うな。確かに沈まない川だ。そして急流下りのような爽快感さえある。

「もうすぐ出口が見えてくる筈よ」

時間にして一分程の不思議な旅。その終わりが見えてきた。

シルバーコードという名の次元の穴の出口は、白く輝いていて目を開けていられなかった。

「さあ、出口よ——」

俺たちは、溶け込むように白い光に飲み込まれていった——

——うっ……

だんだん意識がはつきりしてくる。ゆっくりと目を開ける。

「ここは……。学校、か？」

そこは俺と花梨の通う、私立彩美高校の教室。俺はその床に寝転がっていたようだった。

「ん〜と、ここは一階だな。ああ、もしかして花梨の教室か」

窓の外の景色と時間割の内容から、場所を特定する。

「花梨の夢、小リリスか、思った以上にリアルだ」

自分の身体も、肉体を脱ぎ捨てた霊体、アストラルバディだとはとても思えないな。

「あれっ、そういえばメイは？　メイ！」

「——こっちにいるわ」

「なんだ、そこにいたのか。てつきりはぐれちゃったのかと」

メイは教卓の陰から顔を覗かせていた。

「どうやら無事戻ってこられたようね」

「じゃあやつぱり此処に花梨がいるんだな」

磨り硝子では無いので開ける必要はないのだが、なんとなく窓を開け外の様子を窺う。

「花梨はグランドにいるはずよ」

メイは俺の背中越しにそう言った。

「グランドか、こっちは中庭側だから見えないな」

振り返りながらメイに移動を促す。

「行ってみようぜ、グランド——はいくつ!？」

トウーン!（上げ調子）

「な、なんだ慶太、どうしたの? トウーン! って何!？」

トウーン!（上げ調子）　というのは、突如俺の鼻の粘膜が臨界点を超えて、血しぶきをあげる音である。

「慶太! 何があったの!？」

メイが駆け寄ってくる。ちょ、ちょ……

心配そうに見つめるメイを指差して必死で言葉をひねり出す。

「おま、お前……なんで……裸」

「えっ!？」

何を言ってるのか分からないといった顔で、メイは自分の首から下をその目で確認する。

と同時に、音速をも超える彼女のパイルバンカーが、俺の顔面を捉え視覚を奪う。キリキリと回転しながら壁に激突し、窓ガラスを割る。

——遺体。いや痛い。しかしその痛みが、これが幻でない事の証明なのだ。

そう私は今、幸福の絶頂にいる。このまま帰らぬ人になろうとも、悔いはない、悔いはない!

「っっっ! いやーっ!」

遅れて、惜しげもなくその美しき肢体を俺の視界にうつ^{サイト}してくださった女神様が、絶叫なされた。

「み、見るな! バカ慶太!」

メイは、大事な部分を手で隠して叫ぶ。

「おおお、手ブラエロス! 手ブラマンセー!」

慶太はこうふんしてわれを忘れている!

ズビシッ！

メイ は うらけん を 放った！

慶太 に 999 の ダメージ！ 慶太 は しんでしまった！

——というR指定コントを繰り広げる。

「くおの変態が！！

言っただでしょ、コードを開いた者に主導権があるって！
早く服をイメージして着せて！」

そんな事言われたって、逆ギレにしか聞こえないぞ、と反論した
い所だが、身が保たないので黙っておこう。

「ふ、服だな、ちょっと待ってくれ」

一応真剣に、服をイメージする。

「服、ふくゝ、服ゝ！」

メイの身体が白く光り、衣類がその身を包んだ。それは——彩美
の制服だった。

「なんで制服なんだ？」

「しょーがねーだろ、学校にいるんだから。ブルマやスク水じゃない
だけ有り難く思えよ」

「まあ、それよりはマシか。」

でもスカートが短すぎるし、オーバーニーなんてちよつと恥ずかしいじゃない」

「安心しろ、俺のイマージュが確かならば、そのスカートは決して捲れない仕様になっている」

「はあ？
なんで？」

……やれやれ、コイツはズブの素人だな。仕方ない、ちよつとだけ教えてやる。

「いいか、スカートの中はな、見えてはいけないのだよ。見えないからこそこの小宇宙なのだ。覚えておくように。ココ、テストに出ますよ」

私立萌え萌え女学院の全校生徒一名は、これ以上ないほどのやれやれ顔で、理事長たるこの私に辛辣な言葉をぶつける。

「——お前、完全に変態だろ」

「ありがとう、最高の褒め言葉だ」

つい先日、大人の階段を一步登った俺——キスを経験——は、隠れ変態からオープン変態へと進化の兆しをみせていた。

「いい加減にしろ、バカ慶太。さっさと行くわよ」

……そうだった。俺は此処に、兄貴の務めを果たしに来たのだ
た。

「すまない、ちょっとどうかしてた」

「じゃあ気を取り直して行くわよ」

「ちょっと待ってくれ、せっかくだから俺も着替える。

夢の中とは言え、学校でパジャマは恥ずかしい」

と言いつつ、イメージして制服に着替える。

「よし、じゃあ行くぞ」

気持ちも新たに教室を飛び出す。グラウンドまでの移動中に、ナイトメアについて聞いておく。

魔獣ベオウルフの事。バカデカイ狼らしい。どんな奴が相手だろうと負ける訳にはいかない。

俺の全身全霊をかけて挑む。それしかない。幸い俺の調子は、人生最大級にイイ。筋肉痛もないし。まあアストラルバディなんだから当然か。

それよりも問題はメイだ。調子が良くないらしい。聞けば昨日から、体力はともかく、マナが殆ど回復してないという。

「マナの回復は、肉体とアストラルバディがシンクロしてないとうまく出来ないの」

デスサイズと分裂したメイは、肉体に対してアストラルバディが五十パーセントしかなく、そのせいで上手く回復が出来ないというのだ。

更に問題なのは、浄化能力を失ってしまったっている事だ。それはつまり、嫌でも俺が矢面に立たなければならぬという事に他ならない。

「私が相手を倒すには、マナLEEを直接叩き込むしかないの。だから、マナの枯渇した今の私ではベオウルフには歯が立たない」

……マナLEE、マナ消失エネルギーか。それを喰らわせれば、倒せない事はないのか。

「でも浄化能力が無いのは俺も同じだろ？」

「うっん、人間には私たち天界の者にも無い、特別な力がある。だから慶太を呼んだの。それは『破魔の力』よ」

神の似姿、それ故に人間には元々魔を寄せ付けない力があるらしい。

「コツは簡単。邪気を打ち払う気持ちを、形にして相手にぶつけるだけよ」

「そう言われてもなあ。よく分かんねーよ」

「慶太ならきつと大丈夫、その時になれば出来るはず」

エラく評価が高いな。今までののは、殆どマグレというか結果オーライばっかなんだけどな。

でもま、イメージは出来る、出来て当たり前、という気持ちを

持つことが大切なのはうすうす気付いてるからな。俺も自分を信じるさ。

とにかく、マナ・Eで相手に直接ダメージを与えるか、俺の破魔の力で浄化するか。このどちらかが必要だという事を確認する。

正面玄関が近づいてきた。ここを飛び出せば、グラントは目の前だ。

「もうすぐだ、気合い入れろよ、メイ！」

「やだナニ慶太カツコイイ！」

パカン！　メイに頭を叩かれる。

「人の声色を使うなバカ！」

「すまん、自己暗示だ」

「……なんとなくお前と花梨は兄妹なんだと実感したよ」

正面玄関の五段ほどある階段を勢いよく飛び降りる。見えた、グラントだ。

「アイツか、魔獣ベオウルフとやらは！　で、デケ〜！」

ちょっと待て、予想の遥か上のデカさじゃないか。こんなの俺なんかじゃどうにも出来ないぞ。

「お、兄ちゃん、メイちゃん！」

「「花梨！」」

一瞬日和ってしまったが、花梨の姿を見て自分の気持ちを強く持ち直す。

そうだ、俺はお兄ちゃんなのだ。妹の前で無様な格好を見せるワケにはいかない。それが兄としての矜持なのだから。

「待たせたな花梨、俺たちに任せとけ！　すぐに終わらせてやる！」

伏せていた魔獣ベオウルフが、その巨軀を起こし、俺たちを歓迎の言葉で迎える。

「お前か、強き者とは」

……はい？　なんのこっちゃ。

「貴様の強さ、とくと見せてもらっぞ」

なんだなんだ、なんでそんなに俺を目の敵にする？　メイに目配せするも、軽くスルーされてしまう。

ベオウルフは大きく息を吸い込んだかと思うと、口から炎の塊を吐き出した。

「のううえい！」

変な叫び声と共に、飛び退き身をかわす。

二つ、三つ。連続で火炎弾を撃ってくる。三つ目の火炎弾をかわすのはギリギリだった。

「うひいいいいっ」

やべえ、ちゃんと着地点を狙ってきやがる。遊びはナシかよ！

更に連続で火炎弾を三つ。初弾を左へかわし、次は右へかわす。三つ目を更に右へかわそうとするがその時。

火炎弾の向こうのベオウルフに違和感。瞬時にイマージュリングに念を込める。

「うおりゃあゝっ」

左手の白いマナの塊を右手に持ち替え、炎目掛けて投げつける。

俺の手を離れたそれは、巨大なブーメランに変化し、火炎弾を真つ二つ。更にその後ろから、突進してきていたベオウルフめがけてブーメランが唸りをあげる。

「グオッ！」

咄嗟に身を半回転捻りさせた魔獣の肩を掠める。チッ、あれをかわすのか。

「フフツやるな、良いぞ貴様、それでこそ殺り甲斐があるというものだ」

余裕の表情のフリで返事をする。

「そりゃどうも」

と言いながら、弧を描いて戻ってきたブーメランをキャッチする。

「おっと」

デカすぎて少し身体が持つて行かれる。——その隙にベオウルフが特大の火炎弾を放っていた。

「マズい！」

ブーメランをマサカリのように使って、火炎弾を切り裂く。

「アチチチッ」

体表がチリチリと痛む。熱気に一瞬息が出来なくなる。

「油断したな！」

超巨体のタツクルだ。避ける間はなかった。せめてブーメランを盾代わりにして直撃を避ける。

……っ!!

「お兄ちゃん！」

校庭の壁に向かって一直線。身体が利かない。……激突するっ！

「慶太！」

間一髪の所で、メイが身体を張ってブロックしてくれた。

「た、助かったぜ……」

「少しジツとしてて」

メイは座り込んだ俺の胸に手をあてて力を発揮する。

黄金色の温かい光が俺たちを包む。治癒の法だ。

「こ、これは！？ き、きもちいい、ちにゃ」

「な、何言ってるの慶太？」

「いや、なんでもない。けどすげーな、メイの治癒の法は。火傷のヒリヒリ感が一瞬で消えてったぜ」

「こ、こんなのは何でもない」

「――？ 何どもってんだよ」

「う、うるさい！ 何でもないったら！」

なんだ、今更照れてるのか？ 面白いヤツ。

「アイツつええな」

「慶太はよくやってる。イメージの質も速度も昨日より相当上が

つてる」

「それは俺も感じてる。身体も羽根が生えたように軽いんだ」

「昨日慶太の能力を限界まで引き出したでしょ。肉体の経験は魂に刻まれる。」

体で覚えるってよくいうケド、魂が体捌きを覚えているのよ」

すっかり身体の痛みがひいた俺は、ゆっくり立ち上がり、メイに告げる。

「それでもアイツに勝つのは一筋縄じゃいかないだろう。
だから……破魔の力を試してみる。その間、メイが時間を稼いでくれないか」

第十五話 アストラルダイヴ〜花梨の世界〜（後書き）

少し反省しています。遊び心が過ぎたかな、と。

ニヤリとしてくださる人が、一人でもいれば感無量です。

さてベオウルフとの対決は次回に持ち越しです。慶太が主役らしい活躍を見せてくれるのか？

それは全て私の双肩にかかっていますね。ガツカリさせないように頑張ります。

ではまた次回！

第十六話 主導権ヘイニシアチブは誰の手に

魔獣ベオウルフは、どうやら闘いを楽しむタイプのようだった。俺がメイの治癒の法を受け、立ち上がるのを待ってから火炎弾を放ってきた。

破魔の法について考えたいんだが、その間は与えてはくれないのか。

迫る火炎弾を各々左右に飛んでかわし、すぐさまメイが反撃に移ろうと距離を詰める。流石に速い。俺はまだ避けるのが精一杯だったのに。

炎の拳を喰らわそうと、その軽やかな跳躍で、ベオウルフの頭上に舞い上がる。

フンツと鼻を鳴らしながら、ベオウルフがその鋭い爪を備えた前脚で叩き落とそうとした瞬間。

白い幾筋もの閃光を魔獣に放つ。

「グオツ」

閃光が肩や脚を掠める。

「たあゝっ！」

魔獣の怯んだスキを逃さずメイの一撃が脳天を捉えた。朱のオーラが、殴った位置でくすぶっている。

魔獣がしゃがむ形になったのを受けて、続けて落下の勢いそのままに炎をまとったキックを見舞う。

が、ベオウルフは有り得ない動きでジグザグに飛び退き体勢を立て直した。

「メイ、ちょっと攻撃が単調過ぎやしないか？
俺が援護出来たから良かったものの」

「つい身体が勝手に動いちゃって。
神速があればあれで間に合ってるはずなんだけど。
慶太の援護で助かったわ」

「でも消耗の割に命中率が低いみたいなんだよな、この技。俺には
向いてない技なのかもなあ」

「昨日たった一回見ただけでここまでモノにするなんて、恐ろしい
くらいの才能だとは思っケド」

「だけでもムダが多すぎだぜこの技は。なんか他の考えた方が良さ
そうだ」

そんなやりとりを嬉しそうに見ながら、ベオウルフが口元にニヤ
リと笑みを浮かべ呟く。

「とてつもない獣王無尽」

そう言っつて魔獣がメイの頭上に跳び上がり、宙を蹴った。その足

元に魔法陣のような紋様が浮かび上がり、足場の役目を果たす。

これまでとは明らかに違うスピードで頭上から飛びかかってきた。

「くっ」

間一髪でかわすが、ベオウルフは続けざまに大地を蹴り、メイを追う。

あまりの勢いに一度で方向転換出来ないようだが、魔法陣のような紋様を足場にする事によって、立体的に方向を変えて追い討ちをかけてくる。

魔獣の鉤爪がメイを引っ掛け、ガードしている腕から鮮血をほとばしらせる。

「うっっ」

「メイ！」

「人の心配している場合ではないぞ、人間！」

サマーソルト宜しく後方宙返り。また魔法陣のような紋様を蹴る。今度は俺狙いだ。初撃はかわすが、魔獣の立体的な素早い動きに身体がついていけない。

二度紋様を蹴って宙に舞い上がり、三度目の蹴りで、背後の空中から引っ掻いてきた。

……避けられないと直感的に悟った俺は、左手にマナを集中させる。

「うおおおー！」

ベオウルフの鉤爪と接触する直前に、マナの塊を爆発させ、攻撃を相殺してみせる。

「うわああーっ」

考え通りに上手くはあったが、ベオウルフのプレッシャーを相殺しきれず弾き飛ばされた。ズザザーっと地面を転がる。痛い。

うれしそうにベオウルフが語る。

「いいぞ、貴様。発想といい度胸といい、人間にしては素晴らしいものがあるな」

「……いつて、その内そんな事も言えなくなると思っぜ、覚悟しとけよ」

おいおい、なんで俺こんなに調子こいてんだ？　だいぶ常識的な所が麻痺しちゃったのか？

「ぐはははは！　出来るものならやってみろ！」

また紋様を蹴り立体的に移動し、俺達を威嚇し始めた。

格ゲーで鍛えたからか、幸いにも動体視力が良いおかげで、動きが全く見えないワケじゃない。

だが身体は別だ。いくら見えても反応出来なければ意味はない。

「くっそ、やべえか……」

「慶太！」

メイが背中を合わせてきた。なる程、これなら少なくとも背後は安心だ。

「慶太は正面からの攻撃にだけ集中して！」

「分かってる！」

腕をクロスさせて正面でガードの格好をとる。あんな巨体でこれらちゃ意味は無いんだけれども。

——俺目掛けて、斜め後ろから魔獣がクイックターンで仕掛けてきた。

メイが俺の腕を絡め取り、自身を回転させて俺の代わりに回避行動をとる。

「すまない！」

「喋ってたら舌を噛むわよ！」

またすぐに紋様を二度三度と蹴り、方向を変えて突撃してくる。

「来たっ！」

互いが背中押し合い、その反動で離れてかわす。また紋様を蹴って戻ってくる。

「くっ、また俺かよ！」

咄嗟に至近距離で白い閃光弾を放つ。

これだけ近けりや命中率なんて関係ねえと思ったが、僅かなモーションで察知したベオウルフは直前で紋様を蹴り、閃光弾の有効範囲から脱出する。

「げ、うそっ」

ヤバい、こういう放出系は、直後に動きが止まっちゃうんだ。

「はあっっ！」

メイがマナLEをエネルギー弾として放った。俺が動けなくなったのに気づき、ベオウルフの動きを予想したためだ。

そのエネルギー弾は朱の炎に包まれてメイの手を離れ、魔獣に直撃した。

「うおおお、アブね、助かったぜ」

「はあっはあっ、慶太こっち！」

ベオウルフと距離を取りつつ、メイの近くに移動する。

「ヤバいな、いつまでも保たないぞ。」

破魔の力の使い方を俺なりに考えたいんだが」

「そうね、ベオウルフを普通に倒すのは、かなり難しい。私も慶太の考えにかけるわ。でも――」

言いよどむメイ。なんだか歯切れが悪い。

「どうしたんだ？ ……女の子の日か？」

「ふふつ、緊張感が無いなお前は」

なびく髪をかきあげ呆れながらも微笑むメイ。

「コレくらいの余裕は欲しいだろ？ で、どうしたんだ？」

「今の私が、ベオウルフを止められるかどうか……。まさか私が足を引っ張るハメになるなんてね」

メイが悔しそうに俯き呟く。そうか、今のメイはマナが不足してるのか。

「でも治癒の法は使えたじゃないか。それはマナは関係ないのか？」

「治癒の法は、私の靈魂マナを消費するから、私が生きてる限り使えるわ」

えっ、靈魂マナ？ ドキンと肝を冷やす。靈魂マナって回復しないんじゃないかったか……？

まさかメイは、自分の命を削って俺を癒やしてくれていたのか？

「あ……、心配しないで。私の靈魂マナは回復するの。
それが、私にしか治癒の法が使えない理由よ」

「不老不死ってやつなのか？」

「近いけどそうでもないわ。」

一気に靈魂マナをゼロにするような攻撃を受ければ死んでしまうし、痛みはあるからショックで気を失う事もある」

「そつえば怪我の治りも異常に早いよな？」

見れば、さつき血を流していた腕の傷も、いつの間にか消えていた。

そつだ、俺はメイの事を殆ど何も知らないぞ。たくあんが好きそうなくらいか。

「うん、私の靈魂マナは少しずつ回復し続ける。
その影響で、私の身体の損傷は自然に癒やされていくの」

「じゃあ靈魂マナを攻撃に使ってもいいじゃないか、回復するんだし」

「それは無理。皮肉にも自然治癒の力が、靈魂マナを削るのを邪魔してしまうから。」

私が靈魂マナを削って使えるのは、治癒の法を他人に施す時だけ。相手に触れて、自分の身体の延長として認識することで、自然治癒の力を分け与える時だけなの」

「そうか……」

知りたい事は山ほどあるが、作戦タイムがじっくり設けられていくわけじゃない。まわりついていた煙から解放された魔獣は、こちらに飛びかかるように様子を窺っている。

「慶太——」

不意にメイに呼ばれる。なんだ？

「マナを……少し分けてくれないか？」

「……」

——キター——ッ!!!!!!

どうしたんだ俺。昨日からずっとクライマックスじゃないか。春か？ 人生の春なのか？ 桃源郷はすぐそこなのか？

マナの分与。イコールせつ、接吻だ。まさかメイから誘いが来るとは。

おっと、がつついてはみつともない。あくまでクールに。

「ああ、いいぜ。お前が求めるんなら。拒む理由は無いからな。じゃあいくぞ、気持ちの準備はいいか？」

「——？ う、うん」

メイの肩に手をやる。

……はっ。そういえば花梨が見ている。さすがに妹の前でこんなラブロマンスを披露するわけにはいくまい。

「ベオウルフ！ ちょっと待ってろ！」

「……まだ作戦会議は続くのか？」

「すぐ終わる！」

そう言い放ち、メイの手を引き花梨とベオウルフの死角になる校舎の陰に移動する。

アルエ？ お兄ちゃんとメイちゃんどうしたのかな？ またデカワ
ンちゃんと二人きりなの？

「あのーベオウルフ、さん？」

「なんだ」

恐る恐る尋ねてみる。

「どうして、お兄ちゃん達と闘うんですか？」

「……それが俺の生きる目的だからだ」

「楽しい？」

「ああ、俺はリリスの淀みの中から産まれた、闘いの欲望の象徴だからな。」

「相手が強ければ強いほど喜びが増していくのだ」

「どうしてもお兄ちゃん達とも闘うの？」

「当然だ。人間にしてはかなり筋のある奴だ。まあ、俺の相手としては役不足だがな」

むっ。なんかお兄ちゃんがナメられてる。知らないんだ、お兄ちゃんのコト。

「花梨のお兄ちゃんをナメてると、痛い目にあうよ。」

普段は、おバカでぼけーっとしてるけど、ココ一番っていう時のお兄ちゃんの強さはハンパじゃないんだから。

忠告しといてあげる。お兄ちゃんをナメてかかったら、きっとやられるよ」

「そいつは楽しみだ。せいぜいそのお兄ちゃんの強さってのをみせてもらいたいものだな」

「ここなら大丈夫だ。さっきと同じシーンを演じる。」

誰もいない——放課後の校舎裏。いや放課後じゃないんだけど。
俺を見上げる制服美少女。……最高だ、最高のシチュエーションだ。

改めてメイを見つめる。制服のスカートがひらりと舞う。大きく
見開いた灰色の瞳、その物憂げな表情はすごく……可愛い。

肩に手をやり、メイに尋ねる。

「準備はいいか？」

「——？ うん、いいケド……」

躊躇いがあるのか？ まあいきなりキスをせがむなんて、こんな
事勇氣いるよな。分かるぜ、その気持ち。俺がお前でも同じように
ドギマギするさ。だけど安心しろ。

俺は既に経験済みだ。上手くやれる。安心して身体を預ければいい。
主導権は俺がとってやる。そして俺は、勝ち組の仲間入りだ——
イニシアチブ

何も恐くはない。さあ、心の扉を開くんだ、メイ。

「いくぜ——」

顔を近づけ、唇を重ねようとするその瞬間——

「あ……」

メイの強烈な掌底が俺の顎を捉えた。

「なっ、なっ……」

て、照れるにも程があるだろう。めちゃくちゃ効いたぜ。

「何すんのよ、このド変態!!」

「えっ、なに言って——」

アレ？ 何かヘンだぞ？ 意思の疎通がなってないというか。

「マナを効率よく分け与えるには、ねっ粘膜同士が一番だって——」

更にグーパンを喰らう。

「何ヘンな妄想してるの、そんな事、あるわけないじゃない!」

——そうか。俺は今ここで。やっと気が付いた。

「うおおおおああああ、騙された~~~~!」

デスサイズめ、何が粘膜摂取だ。騙しやがって。俺の貞操はどうなる？ 遊びか？ 遊びなのか？

くそー、この気まずいフィンキ、なんとかしてくれー!

顔を赤らめ、肩で息をしているメイ。なんとなく振られた格好だが、その照れた表情に性懲りもなくドキッとさせられる。

「——まったく。ほら、手を出して」

「……あい」

なすがまま奴隷のように従う。

「少しだけ貰うわよ」

そう言うとき、手を重ね合わせて瞳を閉じた。

俺達の身体から上昇気流が生まれ、俺の身体からメイの身体へ、マナが流れ込んでいく。

ああ、このカンジ、昨日もあった。……マジで騙されてたのかよ、ちくしょー。

——アレ？ でもなんで？ デスサイズの奴、そんな騙す必要があったか？ 何か目的があったのか？

——未熟者の俺は、ここではあの青い瞳の気持ちに思い至る事は出来なかった。

すうっと上昇気流が収まり、メイが俺の目を見ながら語りかけてくる。

「これくらいで充分。ありがとう」

「あ、ああ、お安いご用だぜ」

なんだか腑に落ちない気はしつつも、俺達はベオウルフの待つゲランドへ戻っていくのだった。

第十七話 銀の弾丸へシルバートレット（前書き）

書いていて恥ずかしい程の厨二展開。こんな感じですが、良かったらどうぞ。

第十七話 銀の弾丸へシルバーブレット

「待たせたな！」

「お兄ちゃん、どしたのその顔？」

「うつ、それは……」

なんでコレは治癒してくれないんだよとメイに流し目で訴えるが、フーン、変態のコトなんて知らないもーん、という顔をしている。

これは不可抗力だろう。なあ、悪いのは俺じゃないよな？

「作戦会議は終了か？」

うん、ナイスタイミングだ、ベオウルフ。花梨の疑問は疑問のままにしておく。

「ああ、悪いが勝つのは俺達だぜ。頼むぞ、メイ！」

コクつと頷いてから、メイは単身ベオウルフに挑んでいった。

「よし。破魔の力、か」

……どうやる？ 魔を討ち滅ぼすなら、やっぱりコレだろうか。

左手にマナを集めイメージを開始する。右手でマナの塊を掴み、水を切るようにブンと振ると、白金の銃が現れ、残りカスのマナは、水しぶきのようにキラキラ輝きながら消えていった。

俺のイメージした白金の銃は、デザートイーグルを模した、スライド部に《PEACE》の刻印が彫られたマグナムだ。

「銃はこれでよし、と。問題は“弾”だよな……」

今度は弾をイメージする。もちろん、銀の弾丸だ。シルバーブレット

グリップからマガジンを取り出し、出来上がった弾丸を込めていく。装填数は全部で七発。

「これでどうだ、いけるか？」

ジャコツとマガジンをグリップに差し込み、左手でスライドを引く。撃鉄が起きた状態となり、発射準備は整った。

人差し指をトリガーにかけながら、視線を美女と野獣に向ける。

メイはいつの間にかデスサイズが持っていたのと同じ大鎌をイメージしていた。しかし違う点が一つ。

それは、その刃先から朱の炎を吹き上げていた事だ。どうやらイメージした武器にMANAをまとわせる事で、直接ダメージを与えるつもりなんだろう。

俺は白金の銃を正中に構え、タイミングを見計らうが、速すぎて狙いが定まらない。

メイが動きを止めてくれるのを待つしかないか……

そんな風に考えていると、俺の所作に気付いたベオウルフが一旦メイと距離を置き、唐突に声をかけてきた。

「ふはははは、なるほど。なかなか楽しめそうだな、小僧。

サービスだ、俺に当ててみる。破魔の力が宿ってるか試してやる」

……ベオウルフ、余裕だな。だがコイツを喰らっても、まだそんな大口が叩けるのか？

「なら遠慮なくやらせてもらうぞ、いつけ〜！」

照準を合わせ、トリガーを引く。

——パンツ

想像していたよりも、味気の無い乾いた音が鳴り響く。スライドが反動の衝撃を和らげるように後退し、薬室からは空の薬莢が飛び出した。

強力な銀のマグナム弾が、魔獣に向かって放たれる。

ベオウルフは無防備に立ち尽くしていた。その眉間に銀の弾丸が命中する。だが効いた様子はなく、すぐに弾痕が塞がった。

「き、効いてない……！！」

「——やはりな。まだ破魔の力が宿せていないぞ」

予想通りといったベオウルフの台詞。

「く、くそっ」

——パンッパンッパンッ

更に三発。先程と同じく弾痕がたちまち塞がり、手応えはない。

「くそっ、何が足りないんだ？」

「慶太！」

メイがベオウルフの方に大鎌を構えたまま、声をかけてくる。

「気持ちをしずめて！」

そして聖なる心を力に変えるのよ！」

「聖なる心って——」

分からない。なんだ、聖なる心って。

「ベオウルフを打ち倒してやるって気持ちじゃないのか？
人間の俺に聖なる心なんて、本当にあるのか？」

ベオウルフが一つ溜め息をついた。

「やはりその程度が限界か、人間。
興醒めだな、お前たちを殺してサリエルは貰っていくぞ」

そう言つとベオウルフは、銃を構えて焦っている俺目掛けて、特大の火炎弾を放ってきた。

横に飛び退いてかわす。

「ぐわあっ！」

「イヤーーッ、お兄ちゃん！」

「慶太！」

固まってしまうていた俺は、リアクションが遅れたせいで火炎弾をかわしきれず、脚を焼かれてしまった。

「ぐ、ううっ！」

「お兄ちゃん！」

花梨が泣きながら駆け寄ってくる。だ、ダメだ、花梨まで巻き込まれちゃう！

「く、来るな！」

俺に制された花梨は両手で口を押さえたまま、微妙な距離で立ち尽くしている。

「こ、こんなのは、なんでもない、なんでもないんだ……！」

花梨を悲しませちゃいけない。俺は、花梨の『お兄ちゃん』なんだ……！

歯を食いしばってよろめきながらも立ち上がる。

「ふん、美しい兄妹愛というわけか。だが残念、力無き愛などまさ

に無力！

「トドメだ！」

「させない！」

ベオウルフが火炎弾を吐き出そうとした瞬間、メイが動いた。

大鎌を振りかぶり、魔獣の前脚を斬りつける。傷口から朱の炎があがった。

「ウグツ」

効いている。これを繰り返して直接ダメージを与え続ければ、この巨獣を倒せるのかもしれない。

更にメイが斬りかかる。が、ベオウルフは獣王無尽でかわし、空中から火炎弾を連続でメイに見舞う。

神速は無くとも、元々素早さのあるメイにとって、火炎弾をかわすのはそう難しい事ではなかった。だがダメージを与えるととなると、そう簡単にはいかない。むしろ、攻撃する暇も無いくらいだ。

単純なスピードはメイの方に歩があるように見える——小回りが利くという意味で——が、ベオウルフは獣王無尽という能力を持っている。

それは、魔法陣のような紋様を作り出し、それを足場にする事で立体的に動けるといいう、物理的な能力としては攻防一体の強力な技だった。

これのせいですつとベオウルフのターンであり、それは最早『ベオウルフ劇場』といって差し支えなかった。

しかしそんな中にありながらも、メイは俺に攻撃の目を向けさせないように立ち回り、破魔の力についてのヒントを与えてくれた。

「破魔の力とは、相手を倒す為の力じゃない！ 守る為、救う為の力よ！」

……倒す為じゃない…… 守る為、救う為の力……

「そうだ——俺は。守る、花梨を。救う、メイを。
その為の力が俺の中に眠っているんなら、今、ここで、目覚めてくれ——」

グリップを握っている右手に左手をあてがい、顔の横に銃を持っていく。そして目を閉じて祈りを捧げると、一瞬銃が明るく光ったのを感じた。

「んっ、今のは……？」

白金の銃を丁寧調べていく。

よく見ると、グリップの底——マガジンの底部でもある——に細かい起伏を発見した。普通の銃なら、ここはツルツルしているものなのだが。

そういえばさっき光ったように感じた時、左手はこの位置にあった……？

その起伏をジーツと見つめる。何かパズルのピースがパチリとはまるような感覚。

「そうだ、コレだ！」

その起伏に、左の人差し指に嵌めているイマージュリングを重ねてみる。

「やっぱりそうだ！」

銃の起伏とイマージュリングの幾何学模様が、違和感なくカッチリ合わさった。

——そうだ、マナを使えば意思の力を具現化出来るんだ。なら破魔の力だって、物理的な形ではないけれど、俺の意思の力として具現化出来るはずだ。

互いの起伏を重ね合わせ、メイと花梨を救いたい気持ちを、白金の銃に捧げる。

すると銃の底部から白い光が走り出し、《P E A C E》の刻印に暖かな光が蓄積されていく。

「う、これは——」

輝きを得た銃を見て、確信する。今度は違う。これなら絶対に効くはずだ。ベオウルフ、覚悟しろ！

もう一度白金の銃を構えて狙いを定める。

「——今だ！」

メイの攻撃をかわして俺に背を向けた瞬間。トリガーを引く。

——ズドオン！

さっきとは違い、バズーカを撃ったような音が鳴り響く。銀の弾シルバー丸が、ベオウルフの肩口を抜けていく。
フレット

「ギャアーツ！」

ベオウルフの身体から、恐らく吸収していた獣人のものであろう
靈魂マナが複数抜け出した。

「やった！ 効いたぞ！」

「慶太、もう一発！」

淀みなくリングとグリップの起伏を重ね合わせて祈りを込める。
《P E A C E》の文字に光が満ちる。

「喰らえ、ベオウルフ！」

ズドオン！

真っ直ぐ。弾丸がベオウルフを捉える。

「いけっっ！」

直撃かと思われたその刹那。ベオウルフの前に魔法陣のような障

壁が現れ、シルバーブレットの威力を相殺した。

「なにっ？」

苦しそうな声をあげつつも、魔獣は自らの力を説明してきた。正々堂々としていて、ある意味良いヤツだ、と思った。

「グウウ、やはりそうではなくてはつまらん。

それでこそ闘い甲斐があるというものだ。

だが俺は、破魔の力を打ち消す耐破魔障壁を張る事が出来る。

これを越えて俺にその弾丸を喰らわせる事が出来るか？」

「よそ見してる場合じゃないぞ！」

メイがそう叫んでベオウルフに斬りかかる。そう、倒す方法は二通り。マナLEで直接ダメージを与え続けるか、破魔の力で浄化するかだ。

また獣王無尽を駆使してメイの攻撃をかわしていく。

くっ……。せつかくのシルバーブレットも、当てられなきゃ意味はない。どうすればヤツの眉間にぶち込める？

——問題は。ベオウルフのスピードと、耐破魔障壁だ。避けさせず、更に障壁を破るだけの一撃を放つ。その為には、一度に何発もシルバーブレットを撃ち込む必要があるだろう。かなりの難問だ。

メイは頑張ってくれている。だが何発も撃ち込むだけの時間を作る事は出来まい。それどころか、このままではメイの方が先に参ってしまうだろう。

……大体、あのマナの使い方は無いぞ。無駄が多すぎる。

まあ元々は、節約の必要も無い程の潤沢なマナを持っていたんだろつし、浄化能力もある上、自然治癒の驚くべき回復力もあったのだから、特に戦い方を考える必要など無かったんだろつ。

だが今はそうはいかない。ベオウルフに勝つ為には、こんな戦い方じゃ駄目なんだ。

俺は考える。何かメイに指南してやる方法はないのかと。

——ひとつ、打開策。上手くいくかは分からないが、このままシリ貧でいくくらいなら、試す価値はあるはず。

イメージはマナLEに意思を反映し、具現化する事だ。つまり、マナには思念を宿せる。これがヒントだ。上手くいけば、一気に勝負を決められる。

「——よし、やってやる」

俺は一度目を閉じて深呼吸し、精神を統一させた。

第十八話 愛と平和と、呪縛からの解放と——前編——

「花梨、こつちへ！」

「お兄ちゃん、だいじょぶなの？」

涙を目に浮かべ、心配そうに俺を見あげる花梨。妹をこんなに悲しませるなんて、ダメな兄貴だ、俺は。

「ああ、大丈夫だ。後でメイに治してもらえるから。

……ほら。お前はここに隠れてろ。いいな——」

今にも零れ落ちそうな涙を親指で拭つてやると、花梨は目を赤く腫らしたままだが、にこーっと満面の笑みを浮かべてくれた。うん、花梨に涙は似合わない。いつでもこの笑顔でいてほしい。愛おしい妹の頬を撫でながら、兄の決意を再確認する。

「……OK。分かった。お兄ちゃん、信じてるから」

「ああ、任せとけ。この悪夢ももうすぐ終わるからな」

自分の中でもう一度覚悟を決めて、メイとベオウルフの方を見据える。

目を閉じ精神を集中させ、胸の前で手を組み詠唱する。

「我に力を《ダウン》フォース」！

天から、前触れもなく巨大な十字架が降ってきて、俺の背後に突

き刺さった。

「え……？」

慶太、何するつもりなの……？」

メイもベオウルフも、呆氣にとられている。無理もない。だが俺は、敢えて無視して続けた。

両手を軽く開き、また詠唱する。

アフソープ
「吸魔！」

俺の身体から白くキラキラしたモヤが湧き上がり、十字架に吸収されていく。実はこの時点で俺はもうヘトヘトだったのだが、それでも意地と気合いと根性で立っていたんだ。

十字架が充分に俺のマナを吸収したのを見計らって、両手を上でクロスさせ、構える。

「ちよつと慶太！」

その術は誰にかけるつもりなの？

このままじゃ——」

問答無用。最後の言葉と共に、一気に両手を振り下ろす。

「墓標——R《グレイヴメイカー・R》！」

十字架から二本の稲妻が、ジャラララッとメイに向かって放たれる。

「ちょ待っ」

慌てるメイの、両手首に嵌めてある乳白色のブレスレット——術発動中は黄金色に輝いているが——を稲妻の鎖が捉え、元の十字架に巻き戻り、パートナーを磔にした。

「んあっ、ちょっと慶太、どういっつもり!? しかも“R”って何よ」

——はあっはあっ、キツイ。閃光弾を二発にシルバーブレット。メイにマナを分けた上に、この術だ。

あの喋る黒猫が、俺は人間にしては多量のマナを保有しているなんて言ってたが、もう限界ギリギリだ。

俺は、振り下ろした腕をそのまま膝につけて、下を向いていた。

「ちょっと慶太!

聞ってるの!?’」

「っせーなー。今からちゃんと説明してやるぜ」

氣力を振り絞って顔を上げ、メイの方を振り向く。

「いいか、今から俺がああああああああひあああああ」

「えっ? 慶太が壊れた?’」

「ほああああひあああ」

「け、慶太しつかりして、どうしたの？」

「ああああありがとございますありがとうございます」

「……なんかヤな予感——はっ！」

メイは俺を見下ろし、二人の位置関係から、俺の壊れた理由を悟ったようだ。

「つつつイヤ〜〜〜！
見るなばかあ〜！」

嫌がる制服女子高生を磔にする、この背徳感。そしてその後には押し寄せる、抗いようのない——愉悦のビッグウェーブ。とめどなく溢れ出る、歓喜の涙。

い、いかにいかに。涙を拭け。よく見えんではないか。

「おおおおつ、脚をモジモジさせると、より一層……！
ふおおおおつ！」

デスサイズの時とは違い、メイの御御脚は拘束されていなかった。おみあし

そのため脚の自由は利くのだが、だからといって恥じらうようにモジモジクネクネさせるのはけしからん。まったくもってけしからんぞ。

制服のスカートとオーバーニーの間に存在する、太もも絶対領域の面積が、脚をモジモジさせる度に変化し、それはまるで白浜に打ち寄せる波を思わせた。

「うおおおお！ 太ももサンセットビイチ！」

こ、此処はどこですか？ 天国に一番近い島？

マイクロン化した俺が、太ももサンセットビーチで戯れている。
此処がああ、伝説の楽園——エリシオン？

喜びが有頂天の俺の背中から、突如暗黒の呪いを込めたような、
どす黒い声が聞こえてきた。

「オ・ニ・イ・チャ・ン？」

「つつおおお！」

背筋が凍りついたぜ。タマがキュツとなっちまった。さっきの兄
としての決意はどこへ行っちゃったんだ？ ったく、煩惱に惑わさ
れ過ぎだぞ、俺。だがそれが、健全な男子の証でもある事は、男な
ら誰もが疑うまい。

「早く降ろせ、ばか、へんたい〜！」

もはや羞恥に堪えられないといった様子のメイは、顔を赤らめ涙
目になっている。その表情がまた……可愛い。

うんうんと頷きながら、俺は緊縛を解く旨の返事をする。

「ちょっと待て。え〜と」

十字架に思念を送り、稲妻の鎖を緩めメイを地面に降ろしてやる。

「なあメイ、使っていない方のブレスレットを渡してくげばおっ！」

れ、と言い終わらない内にみぞおちに蹴りを入れられる。数歩後
退り片膝について呻く俺。

更に助走をつけた怒れるなんちゃってJKが、立ててある俺の膝
を踏み台にする。

「のおおおっ！」

空いたもう片方の脚の、透き通るような白い内ももが俺の顔面に
迫る。こ、こんな3D映像、滅多に無いん――

ズギヤッ

地面を転がるローリングストーン。それが今の俺。

「シャ……シャイニング……ウィザード……」

ノックアウト。これが、『人間万事、塞翁が馬』だ。また一つ賢
くなつたな、俺――。

「ぐすつ。あんたバカあ？　こんな時に何やってんのよ！」

「今のは不慮の事故だ。は、話を聞け。使っていない方のブレスレッ
トをかしてくれ」

両腕から一個ずつ腕輪を抜き取り、荒々しく投げつけてくる。イ

タ、痛いって。

地面に散乱する腕輪を拾う。なかなか惨めだ。

チラリとベオウルフを見てみると、あんぐりと口を開けて突っ立っている。アンタ、獣のクセになかなか空気読むんだな。

拾った腕輪を自分の両腕に嵌める。

「これでよし」

余計なダメージを喰らった身体に鞭を打って立ち上がり、念を込める。

するとメイの腕輪から俺の腕輪にも稲妻の鎖が繋がり、十字架に蓄えられていたマナが、鎖を通じてメイに流れ込んでいく。

そして力を全てメイに与えた十字架は、幻であつたかのようにその存在を消していった。残ったのは、俺とメイの腕輪同士が稲妻の鎖に繋がった、奇妙な状態だった。

「な、何よコレ？ わっ」

困惑しているメイを見ながら、スッと右腕を掲げると、彼女も同じように右腕を掲げた。よし、思惑通りいきそうだ。

「いいか、グレイヴメイカーでお前に流れ込んだ俺のマナは、この稲妻の鎖を介して共有している状態だ。

つまり、メイの思念も、俺の思念も具現化可能というわけだ。例えば――」

ポカーンとしているメイの、サラサラでツヤツヤな黒髪の草原に右手を突っ込み、左耳をさすってやる。

「ひゃんっ」

「ん、なんだ耳が弱いのか？」

「う、うるさい！」

減らず口を叩くものの、身体は正直な反応を示すメイに思わず苦笑するも、少し集中を高めてイマジユする。

すると、パステルカラーのカチューシャを模したヘッドセットが、メイの髪に差し込まれそのキュートさをアップさせた。腰には端末機が備え付けられる。

「これは……？」

「インカムだ、ほら」

そう言つて、自分も端末を装着したのを見せる。

「俺がコイツで合図を出す。その時だけマナを爆発させるんだ。人間の節約術を教えてやる」

「で、でも戦いながらそんな上手く連携出来るかな？」

「大丈夫、任せとけ。それより武器は日本刀に代えてくれないか？」

メイは素直に従い、左手のマナの塊から少し長めの日本刀をイメージした。

「さあ、そろそろ決着をつけようか。」

お前たちの全力でもってせいぜいオレを楽しませろ」

「待たせたな、ベオウルフ。でもこれが最後だぜ。」

決着をつけてやる」

ベオウルフが犬科らしく地面を掻いて身体を低く構えてグルルと唸った。

「よし、いくぞ」

二人見つめ合い、互いに頷く。メイが突撃を開始する。

俺はやられた脚を敢えて治癒してもらわなかった。だから最早まともには動けないでいた。

だが、これも計算の内。組み上げたロジックの大事な要素になる。より確実に勝利を手繰り寄せる為のな。

——ベオウルフと殺陣を繰り返しているメイは、握りしめた日本刀の刃先からは朱の炎を発していなかった。俺が止めているからだ。獣王無尽で駆け回るベオウルフにまともに攻撃を当てる事など、いくらメイと言えど容易ではない事は、これまでの闘いから火を見るより明らかだった。

だから無駄にマナを消費する行為は避けるべきなのだ。

インカムを通じてメイに話し掛ける。

「いいか、無理に攻撃しなくていい。

その内痺れを切らして強引に攻めてくるから、それまでは今のままでいい」

立体的な動きで迫る魔獣は、様々な角度からメイを攻め立てる。だが、守備に重きを置いた立ち回りを展開するメイにとって、その攻撃は決して見極められないようなものではなかった。

「なんだその消極的な攻撃は？」

お、ちよつとイラついてきてるか？

「いいぞメイ、その調子だ」

歯ごたえの無い闘いに、ベオウルフは集中を欠き始めているようだった。

「もうすぐチャンスが巡ってくるからな、その一瞬を逃さずマナレを纏った一撃を頼むぞ」

慶太、ホントなの？ こんな事やってて本当に勝てるっていつの？

——ほんの少しの気の迷い。そのせいで私の動きが鈍ったのを、ベオウルフは見逃さなかった。

火炎弾と鉤爪の複合攻撃を巧みにかわしていたのだが、氣後れした分対応が遅れてしまう。

火炎弾を飛び上がってかわした時、待ち構えていたようにベオウルフが新たな炎を口の中で生成し、狙いを定めていた。

「しまった！」

ベオウルフの火炎弾が迫る。咄嗟に手にした刀で両断するが、すぐ側を通過した炎に皮膚を焼かれ、その熱気に空気を奪われ肺を焼く。

「かつ、はっ……」

ここぞとばかりにベオウルフが距離を詰め、渾身の力で鉤爪を突き立ててきた。

「くっ」

刀の腹で受け止めるも、そのプレッシャーに跳ね飛ばされてしまう。

なんとか体勢を保持し前を向くと、既に火炎弾が迫ってきていた。

「うっっ」

連撃を左右に転がってかわすが、次に来た火炎弾を左右どちらか

にかわす余裕はなく、上に逃げるしかなかった。さつきと同じだ。
このままじゃやられる――

空中に躍り出た私と、魔獣の目が合う。ヤバい、と思ったその時、私の身体は突如その自由を失い、動けなくなってしまったのだった。

「なっ……」

――無意識に身体が反転しベオウルフに背を向け、左手にマナを集めだした。それを一瞬浮かせた後、思い切り叩く。

するとマナの爆風で、身体は上方向からベクトルを変え地面と水平に、つまりベオウルフの方へ一気に距離を詰めた。

「メイ！」

――はっ。

目の前にベオウルフの顔が迫っていた。だが奴はタイミングをずらされてロックオンし直している最中のようなだった。

この間合い、斬る！

「たあっっ！」

大きく上段に構え、眉間に斬りかかる。が、瞬間的に首を僅かに引つ込めた分だけ浅くなり、薄皮を一枚剥ぐほどの切り傷しかつかなかった。

「くっ、外したか！」

ベオウルフは近すぎる間合いを嫌い、丸まるように飛び退いた。

インカムから慶太の声が飛んでくる。

「大丈夫かメイ？」

「う、うん。このくらいなら少しすればすぐ治るから。それよりさっきのは？」

「俺が動かしたんだ。殆どタイムラグもなく上手くいったみたいだ」

またしても慶太の適性に驚かされる。マナの爆風で移動だなんて大天使だった頃、六枚羽根を備え自由に空を舞っていた私には、そんな事考えつきもしない事だった。

「貴様人間、さっきから目障りだな」

ベオウルフは少しイラついているようだ。

「もし俺の身に何かあっても、攻撃の手を緩めるなよ、メイ」

慶太……なんで急にそんな事。何か嫌な予感でもするの？

第十九話 愛と平和と、呪縛からの解放と——後編——（前書き）

後編です。今回で第二章的なものの一応の目処になります。

第十九話 愛と平和と、呪縛からの解放と——後編——

耳に仕込んだイヤホンから慶太の声が聞こえる。何、どういう事？

私は脚を負傷して身動きのとれない慶太が攻撃の対象にならないように、ベオウルフに隙を与えないように立ち回っているつもりだった。

「何をコソコソ話している……」

ベオウルフがやけに慶太を気にしているように見える。

どうしたんだ？ 私と死合っている筈なのに、心此処に在らずと
いったカンジだ。

「自らは闘いもせず、相手がサリエルとはいえ、女に闘わせるとは
見損なつたぞ！」

突然、ベオウルフが攻撃の手を止め、慶太に向かって火炎弾を吐
き出した。

「慶太！」

「——今だメイ！」

インカムから慶太の声がとぶ。

——俺の身に何かあっても、攻撃の手を緩めるなよ、メイ——

私は慶太の言葉を信じる。

「うああっ！」

体内のマナを瞬時に爆発させる。握りしめた日本刀の美しい刃先に、一気に朱の炎が宿った。そして、顔を慶太の方に向けているベオウルフに向かって飛び込みながら、その肩口を袈裟に斬る。

「グオアアーツ！」

傷口から朱の炎が激しく上がる。更に左から右へ薙払う。今度は横っ腹から朱の炎が吹き上がる。

そこまで攻め立てた所で、ベオウルフは攻撃を捌くように、その手傷を負った右脚で私を引っ掻き飛び退いた。

「慶太！」

インカムで呼び掛けるが、返事はない。

慶太の方をサッと振り向く。そちらは土煙が上がっていて、どうなったのか全く分からない状態だった。

「慶太……」

「あゝ、アブね」

土煙が薄くなってくるにつれて、立ち尽くす人影が姿を現してきた。

「慶太、大丈夫なの？」

「ああ勿論。一度マナ・Eで攻撃を相殺するのはやってるからな。おまけにコレだけの距離が有れば、落ち着いて対処出来るってもんだぜ」

……なんて才能なの。タダの人間のくせに、適応力・応用力が半端じゃない。

「まったく、とんでもない奴だな、慶太」

「お、惚れたか？」

「バツ、そんなワケないでしょ！」

あ……なんで赤くなる、私。近くに居なくて良かった。

「そうか、まんまと踊らされたというワケか」

ベオウルフが苦虫を噛み潰したような顔で推察する。

「私も驚いているよ。だけど、これでさっきまでのような動きはもう出来まい。」

諦めて引き下がったらどうだ？」

「そんなわけにはいかん。コレこそ、オレの求めていた闘いなのだから。」

だが、オレは間違えていたらしい。本当に倒すべきは誰なのかを」

そう言うベオウルフはニヤリと奇妙に微笑んだ。その次の瞬間。

私に向かって火炎弾を乱射してきた。

「今更、こんなもの！」

華麗にかわしていく。が、今度は私が油断していた。ある程度距離を稼いだベオウルフは、私が炎をかわすスキを見計らい、慶太に向かって猛然と駆けていた。

「くっ、これじゃあ間に合わない、慶太！」

走りながら、慶太に向かって火炎弾を一発。それを予測していたかのように、彼は手中のマナLEEで火炎弾を相殺する。

が、その隙をついてベオウルフは、獣王無尽で瞬時に慶太の頭上に移動していた。

「慶太ー！」

虚しくインカムを飛ばす。私の油断が招いた事。この距離は、最早私にはどうしようもない距離だった。

ベオウルフは、お返しだと言わんばかりに確信めいた台詞を吐く。

「ぐはははは！」

この距離でその脚ではかわせまい。チェックメイトだ！」

頭上から真つ逆さまに飛び込んでいくベオウルフを、ただ私は見ているしかなかった。絶体絶命。私にも、慶太にもなす術はない。そう思った。

「チェックメイト？ 同感だな」

「はっはっはっ、強がりな！——なっ？」

慶太がしゃがむと、人影がもう一つあった。

「キラリン 誰か忘れちゃいませんか？ 飛んで火にいるデカワ
ンコ〜」

慶太の後ろにピタリと花梨がくっ付いて、慶太がイメージした
であろうマグナムを構えていた。——それも二丁。

白金の銃、《PEACE》と、スライドに《LOVE》と刻まれ
たピンクゴールドの銃だ。どちらも刻印が輝き、破魔の力を宿して
いるのがわかる。

両腕をクロスさせて銃を構えた花梨が、ベオウルフに一言決め台
詞。

「そんなキミにラブ&ピース」

——ズドン、ズドン

銀の弾丸シルバーブレットが放たれる。スライドが衝撃を和らげるように後退。そ
の力を利用して、腕を九〇度内に捻ってクロスさせた二丁拳銃のチ
ヤンバーから、心地よい金属音と共に薬莢が飛び出し、花梨の顔の
前で躍った。

全ては一瞬の出来事。だが、何故だかその時間はとてもゆっくり
流れていくように感じた。

——キンッ

一撃目が耐破魔障壁に当たり、その力を失う。そして二撃目。

——パリンッ

耐破魔障壁を突き破り、ベオウルフの胸元を貫通した。

「グギャーッ！」

もんどりうつて地面に落下した魔獣、その身体から大量の靈魂マナが抜けていく。

「まだだ、まだ終わっていないぞ！」

失いつつある力を振り絞り、ベオウルフが尚も慶太に飛びかかる。なんてしぶとさ。

「……だよなあ」

熱くなっているベオウルフとは対照的に冷静な慶太は、見透かしたような台詞を吐きながら、スツと右腕を魔獣に向けた。

「——&リバティ」

白いマグナムには破魔の力を宿し輝く《LIBERTY》の刻印。

「……！！ 貴様あ、全てお見通しというわけかあ！」

「そうさ、怪我を治さなかったのも、インカムで会話してたのも、全てお前の気の緩みを誘うためさ！」

インカムでの会話など特に意味はなかった。ベオウルフが正々堂々、実力至上主義の単純な相手だということを見抜いた俺は、闘いに神聖性を見出す者の目の前で、コソコソ姑息なマネをしているふりをしてやる事で、魔獣の心の乱れを誘った。その結果、メイに手傷を負わされたのは好都合だった。

そうなれば、集中を切らしたベオウルフが、メイともう一度真剣に向き合う為に、俺を先に始末しようとする事は想像に難くなかった。

そして動けない相手であるにも関わらず、火炎弾の効かない俺を殺る為に、ならばと直接その鉤爪でも突き立てようとしてくるに違いない事も、想定範囲内だった。

ここまでくれば後は、流れ作業のようにシルバーレットを何発も撃ち込むだけだ。だが俺が破魔の力を込めるには数秒だが時間がかかる。そこで花梨の出番だ。

「……ほら、コイツを持ってお前はココ——俺の後ろ——に隠れる。ベオウルフは必ず直接俺を殺りに来る。充分引きつけた所で撃つんだ、いいな」

「——OK、分かった。お兄ちゃんの言うことだもん、きっと信じてるから——」

ズドオン、カシユキンカシャン

銃口からシルバーブレットが放たれ、チャンバーから空薬莖が飛び出し放物線を描く。

「だから言っただでしょ？ お兄ちゃんをナメてちゃやられるよって」
花梨がベオウルフにそう言った。この二人？ 会話してたのか。

走馬灯のような時間の流れを感じつつも、ベオウルフの身体を貫くまで全ては一瞬だった。

「グオオオオオ！」

ベオウルフの身体から大量の靈魂マナが抜け出し、浄化されていく。

「デツカアアルルチュアーツ！！」

断末魔にも似た叫び声を上げ、魔獣の身体がどんどん縮んでいく。そして、せいぜいゴールデンレトリバーのような、大型犬と同程度の大きさになった。

「——グウウ、貴様の勝ちだ」

あっさりと自らの敗北を認め、ベオウルフは地面に伏せた。

「……さあトドメをさせ、持っているんだろ？ もう一丁」

フウーツ、と深く溜め息をつき右腕を下ろし、左腕をベオウルフに構える。真つ黒の銃に、《HOPE》の刻印が破魔の力を蓄え光を満たしていた。

………

………

スツと左腕を下ろし、マグナムと、グレイヴメイカーRのイマージュを解く。

ベオウルフが何をしているのか分からないといった顔をしたが、すぐに犬歯を剥き出しにして怒りを露わにした。

「情けをかけるつもりか？ それこそオレにとって最も耐え難き屈辱だ」

「そんなワケないだろ」

一呼吸置いて続ける。イマージュを解いたのは――

「闘う理由が無くなったからだよ」

「お前の闘う理由とは何だったのだ？」

「決まってる、花梨を助けるためだよ」

しばしの沈黙。そんなにおかしな事は言っていないつもりだが。

「そうか。ハナからオレとは、闘いに対する姿勢が違っていたというわけか。」

完敗だ」

「だけど、まともに闘ったら俺たちに勝ち目は無かった。」

アンタは本当に強かったよ」

「ふっ……いくら強くとも、負けてしまつては意味があるまい」

そこまで会話した所で、花梨が割り込んできた。

「はぁーあ。いくら力が強くたつて、それはホントの強さじゃないよ。」

それが分らないと、いつまで経ってもお兄ちゃんには勝てないよ?。」

ベオウルフがまた奇妙な作り笑顔で返事をする。

「——そうだな」

「終わったな」

いつの間にかメイが俺たちの側に寄ってきていた。

「ああ、これで戻れるな」

ベオウルフに向かって、最後の会話をする。

「さあ、俺たちは戻るぜ。アンタも自分の住処に帰りなよ。くれぐれも、悪さはするなよな」

「オレは親から『強さを求める事』のみが分かれた魂だ。それに善いも悪いもない。」

……だが、無駄な殺生はしない事は、お前たちに敬意を表して誓おう」

「ああ、宜しく頼むよ」

それを最後に、ベオウルフはサマーソルトのように空中で後方回転すると、撞球大の珠になって、僅かな光を放った後に消えていった。

——フウーツ、皆の溜め息の音が聞こえた気がした。

「さあーつてと。帰りますか」

「おい、それは俺に言わせるよ花梨」

妹が俺の腕に絡みついてケラケラと笑う。

「つたく、しょーがねーな」

それを見て俺もつられてケラケラと笑いあい、花梨の教室にある次元の穴を目指した。そして、そんな俺たちの様子を見て、クスクスと笑いながらその後をメイがついてくるのだった——

「——はっ。……はあっはあっ……んん、夢、か……」

深呼吸。肺の隅々に空気を送る。

なんか、すっごく怖い夢だった。場所は……遊園地だったかな。誰もいなくてヘンだなと思ったっけ。

んで、ゾンビみたいな顔した犬人間みたいのに襲われて。ええと、なんだっけ？ んー、思い出せない。

……うわあ、汗びっしょり。ネグリジェの胸元を掴みパタパタと扇ぐ。自分でいうのもなんだが、豊かなバストに珠のような汗が流れムレムレだ。

シャワーでも浴びて、ちょっとスッキリしてこよっと。

普段より少し早い朝。何かとっても大事な事を思い出せないでいる私は、身も心も軽くするために、自室から階下のバスルームへと

向
か
っ
て
い
っ
た
—

第十九話 愛と平和と、呪縛からの解放と——後編——（後書き）

はいはい、いかがでしたか？

過不足なくキレイにまとめる、難しいですね。こんな変な文章しか書けない私に、誰かアドバイスをください。

さてさて、最後に新キャラ登場です。第十話のアノ人です。

キャラが増えると楽しみが増えますが、描写不足などに陥りやすいと思うので、そこは気を付けたいなあと思います。

ここまでお付き合いくださって、ありがとうございます！

もし良かったら、今後もこの作品に目を通してやってください。では、

第二十話 とある少女の入浴シーン

——ガラッ。バタンッ。キュッ。サアアア……

左の首筋から始まり、首もとを通って右肩へ。そのまま背中を濡らす。その後頭から温水をかけて、充分に髪を湿らせる。

——キュッ。

ネットに洗顔ソープを取り泡立てて、その泡だけを手にとる。そして、泡の弾力を感じるようにTゾーンから顔全体を洗っていく。決してこすってはいけない。泡で洗うの。せつかく泡で浮かせた汚れを擦り込んで、意味が無いもの。

泡を流す時も、顔をこするのではなく、水を顔につけるカンジ。水の表面張力で泡を落とす。洗い流せたら、次はシャンプーだ。

シュコッ シュコッ シュコッ シュコッ シュコッ

ポンプ五回。これからだんだんと暑くなってくる季節、今使ってるローズの香りが心地よいシャンプーが無くなったら、シトラスとかグレープフルーツとかに変えようかな。

髪全体にシャンプーの泡をなじませ、マッサージするように後頭部の下から上へ。次に額から頭頂部へ向かって。更にこめかみから頭頂部へ。指の腹で皮脂を掻き出すように。——気持ちいい。

シャワーでシャンプーを落とす。洗った時間の倍かけて。それが大事なの。——リンス。カーキ色の髪の毛の先端まで。慈しむよう

に。髪は女の命だもん。

シャワーでリンスも落とす。じつくりと時間をかけて。

——次はボディウオッシュ。肌を傷めにくいオーガニックコットンのタオルにソープを染み込ませ、泡立たせる。まず首筋。耳の隣まで丁寧に。鎖骨を通って左腕へ。肘にくすみがでないように、タオルを回しながらじつくりと。指先までキレイに。

タオルを左手に持ち替えて、同じ様に右腕を洗う。優しく、優しく。そのまま脇から下に、側面を。そして少しずつ背中にも手を回していく。胸がつかえて肩甲骨の下側までしか届かない。右手にタオルを持ち替え肩の上から回して、下からは届かなかった部分を洗う。反対も同じ様に。脇から下に、背中。左手に持ち替えて肩の裏側から脊椎にかけて。

それが終わったら、次は下腹部。また右手にタオルを持ち替え『の』の字を書いて、腸の活動を促進する様に洗っていく。上に上がって、左手で胸を持ち上げ膨らみの始まりを洗う。そして果実本体。決して力を入れずに優しく撫でる。先の突起は色素沈着しないように、より丁寧に、時間をかけて。

それが済んだら内もも、太もも、外ももとぐるりと回って。両膝は、肘と同様、くすみなどが出ないように回しながら丁寧に。そのままの流れで、ふくらはぎ、すね、足首。くるぶしの周りは丁寧に。足の裏は足指に手指を絡めて。

そして——股間。タオルをお尻の方に突っ込んで洗う。最後に臀部。下からリフトアップする様に。

全身を泡で包み、汚れを落とし、だがまだ泡は流さない。ボディソープを直接手にとり、胸をもう一度洗う。たわわに実った果実を優しく、形を整えるように、そして愛撫するように。

本当の最後に、手で直接股間を洗う。粘膜を傷めないように、指の腹でさすって、隅々までキレイにする。

そしてやっと、シャワーで上から順に泡を流していく。脇や胸の下、股間などはシャワーを万有引力に逆らって流す。

——キュッ。

パタパタパタパタッパタッパタッパタッパタンッパタンッパタンッ……

身体のいろんな部分から、雫が流れ落ちる。髪を束ねて軽く絞って、余分な水気を落とす。

ガラッ、ガラッ。

お日様の下で乾かした、ふかふかのバスタオルを顔に押し当て水分を吸収させる。

「ん~~~~、気・持・ち・イイ！」

——ん、私？ そうだね、自己紹介します。

私の名前は、神野仁美、彩美高校二年二組。そつ、慶ちゃんと同じ。彼とは幼稚園、中学、高校と一緒。小学校だけは校区が違って

中学で再会した時は、まだガキンチョなカンジだったくせに、三年間でドンドン背が伸びて。声変わりもして、男らしい声になっちゃって。高校受験の時、慶ちゃんの志望校が彩美って聞いた時は、嬉しかったなあ。

……え、付き合ってるのだった？ まさかまさか！ アイツ鈍感だから。気付いてもないよ、きつと。……え？ 告白しないのか？ まさかまさか！ そんな勇氣……ないよ。今の関係がちょうどイイの、きつと。……え？ じゃあなんでそんなに入念に身体を洗うのか？ だってだって、いつ何があるか分かんないじゃん。

テレパシーは送ってるんだよ？ “その時”の為に、身体を常に最高の状態に保たなきゃ。そうでしょ？ 慶ちゃんが私のおっぱいをチラ見してくるの。私のココが好きみたいだから、だったら慶ちゃんの気を惹く武器は、常に磨いてなきゃ。

タオルを巻き付けたまま、ドライヤーで髪を乾かしていた私は、ハラリとタオルを落とし、上下お揃いの下着を身に付ける。

うん。私、可愛い。自分に魔法のおまじないをかける。そしていつものように、ヘルスメーターに足をかける。

「ん〜と……？」

——へ？ アレ？ えっ？

「……イヤ~~~~~！」

——砂漠を彷徨うようにフラフラしながら部屋に戻る。

——ボタン。

「おかしい……おかしいわ……」

スケールを取り出しボディチェック。バストは……九一。うん。
で、ウエストは？ ……五九。はい。で、ヒップは？ ……八八。
うん、先週測った時と同じだ。なのに、なんで？

「なんで二十キロも増えてるの？」

うおおおお。何なのコレは？ 意味が分からない。まさか夢？
いやいや、それはない。

ヘルスメーターの故障かと思って、一キロのダンベルを試しに載
せてみた所、デジタルは正しく一キロを指した。

ん~~~~~。ちょっと横になろう。きつと何かの間違いだ。
とにかく一息つかないと、どうにも気持ちの整理がつかない。

ということでは私はベッドに寝ころがり、寝る寝ないに関係なく、
とりあえず目を閉じる事にした。

「あ、ん……」

ちよつとウトウトしてたみたい。時計を見ると、一時間ほど経過していた。と言つても、今朝は早かったから、まだ八時にもなっていない。なんとなく天井を見つめてボーっとする。

——ピリリリッ。携帯が鳴る。メールだ。起き上がり、机の上の携帯に手を伸ばし、内容を確認する。

「……花梨ちゃんか」

☐

おはようございますっ

今日のお買い物なんで
すケド、ちよつと急用
がデキちゃって行けま
せん。

花梨から誘つたのに、
ホントにごめんなさい

(< | >)

またメールしますね。 ホントごめんなさい』

慶ちゃんの妹花梨ちゃんは、私にとつても妹みたいな存在。

一個下の花梨ちゃんは、幼稚園で私がお世話係りを引き受けた娘だった。それもあつて、昔慶ちゃんと三人でよく遊んだものだった。

それを覚えていたらしく、中学で再会してからというもの、またちよくちよく一緒に遊ぶようになった。

今日は花梨ちゃんの誘いで、売りに出始めた水着を見に行く事になつていた。でも……

□

おはよ。

大丈夫だよ、水着は来週でもまだたくさんあると思うし。

また今度時間を合わせて行こうね！

(b ^ _ ^)

□

送信。

はあゝつとため息をつく。予定、無くなっちゃったなあ、どうしよう。んゝゝゝ、急に暇になってもすることないよゝ。コロコロ。

…………コロコロ。

…………コロコロ。

「イカンイカン！

華のじょしこーせーが、部屋で一日コロコロは身体に良くないわ」

飛び起きて一念発起。予定などなくとも出掛ける、花盛りの乙女

にはそれが大事。無駄な時間なんて一秒だって無いんだもの。

朝食から身だしなみまで一時間。これで準備を済ませて、九時には家を出ると決める。気持ちが高まったら、後は自然に身体が動く。

「よし、行動開始！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7559u/>

はじまりはひとつの禁忌 ~ Cry at the Moon ~

2011年10月7日03時27分発行